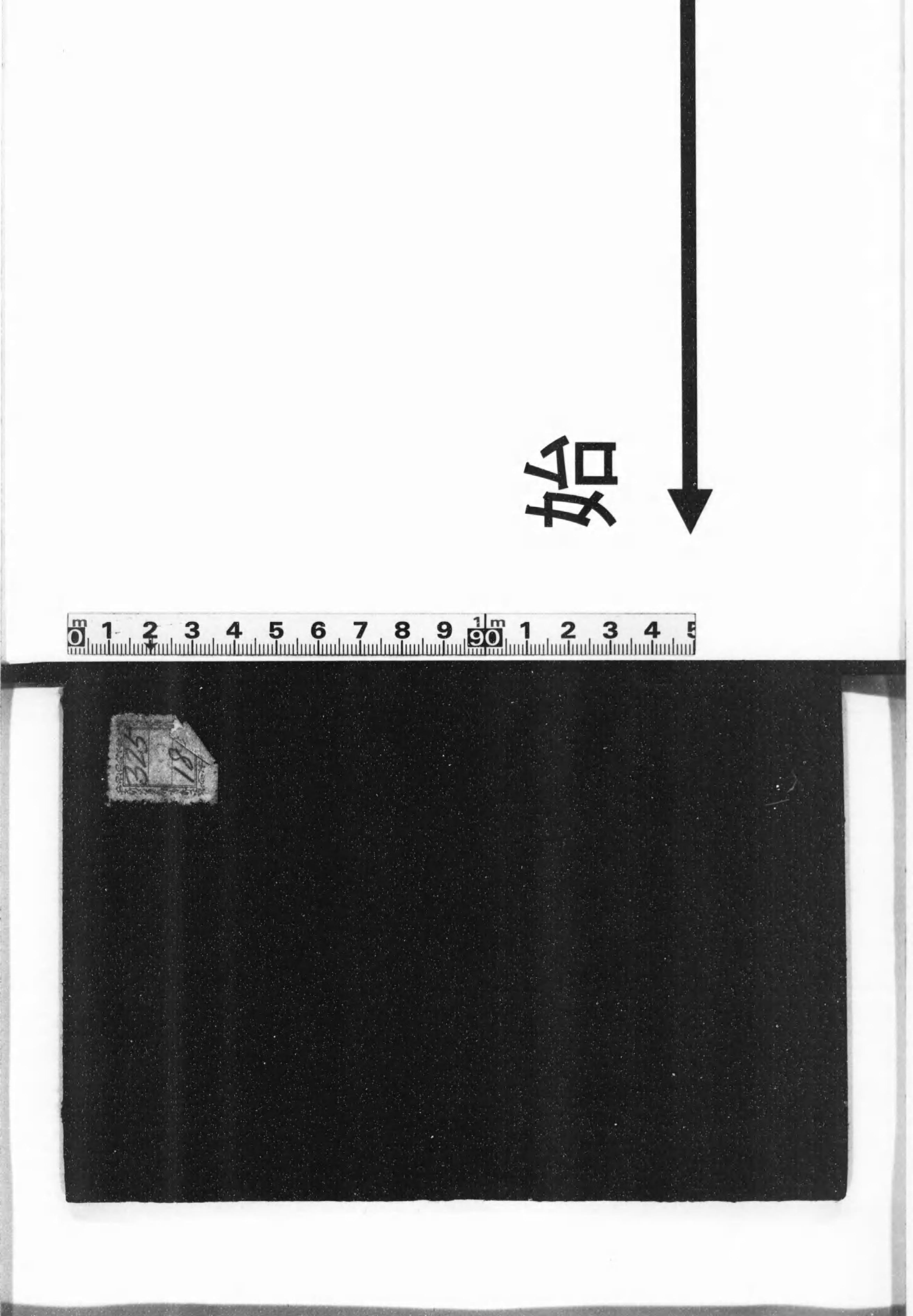
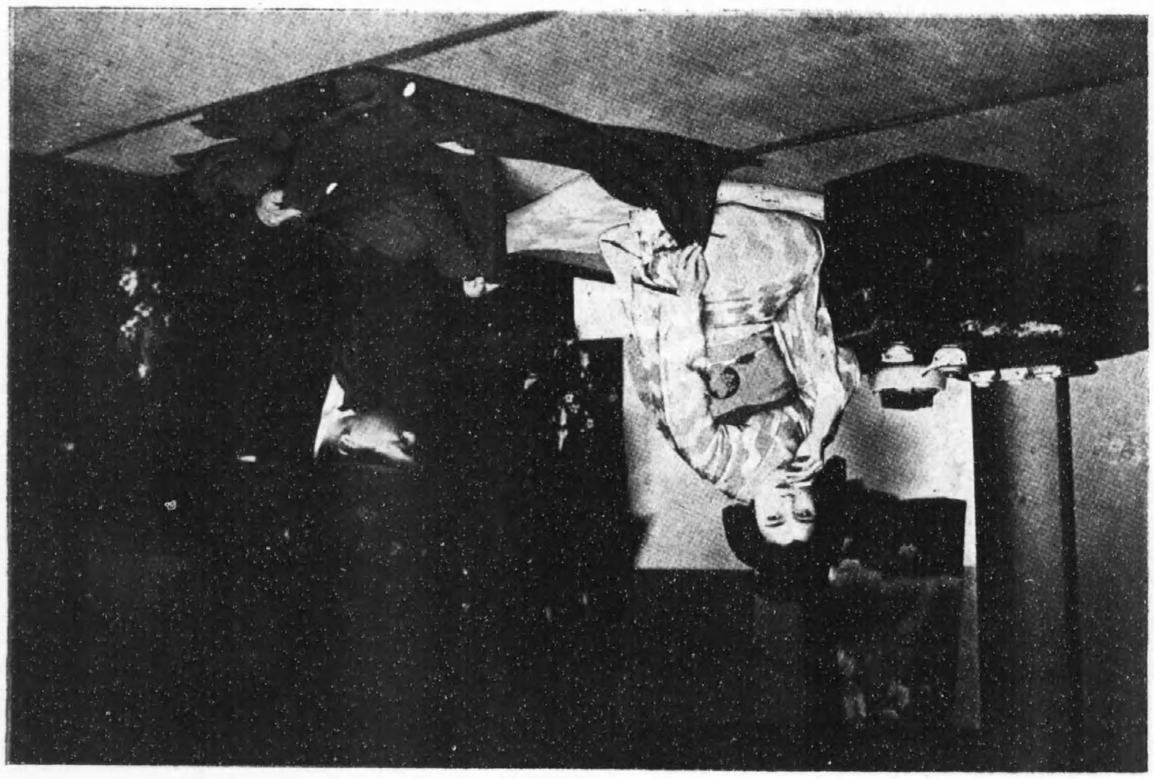

325
18

特219
835

滑稽修養

男女百癖

昭和四八・一・五
帝國圖書館



實社會に成功せんと欲する者は社會の實理實情を究むるを以て成る。而して社會は人類の集團で有る事は謂ふまでもない。依つて是を考究するには人情に精通する事が必要である。人情の機微に通じ人間各〻の性狀習癖を看取するは處世の重要條件である。

本書は男女に於ける隨時隨所に己れが對手の人物如何を看破洞察するの一助として玆に人間百癖卽ち男女二百癖を編纂し是れに聊か滑稽を加味し研究家諸彦の娯樂慰安に供せんと欲す乞ふ幸に一讀一笑を

編者　ゑるす

滑稽修養

男女百癖

目次

一　手に胼胝のでた人……一
二　酒の好きな女……三
三　口先で物を言ふ人……八
四　夫の元氣を沮喪させる女……一一
五　目先の利かぬ人……一三
六　夫の勇氣を鼓舞する女……二三
七　常に歎息する人……二五
八　食ふより外には能のない女……二八
九　金を欲がる人……三八
一〇　近所の噂に日を暮して居る女……三九
一一　酒ばかり飲みたがる人……四一

一二　近所隣に迷惑をかける女……四四
一三　酒癖の悪い人……四七
一四　子供の喧嘩に飛出す女……五一
一五　責任を避ける人……五三
一六　近所の人の身元調査をする女……五七
一七　矢鱈に事を引受ける人……六〇
一八　夫おもひの女……六三
一九　知らずに知つた振をする人……六六
二〇　常に夫の勢を殺ぐ女……七五
二一　知つても知らぬ振をする人……七八
二二　夫に不快の念ばかり起させる女……八一
二三　早合點をする人……八四
二四　上手に夫の機嫌を取る女……八七
二五　細君本位の人……九〇
二六　夫に恥を掻せる女……九七

二七　細君に使はれる人……九九
二八　夫に花を咲せる女……一〇三
二九　細君に叱られる人……一〇六
三〇　夫に友達を失はせる女……一一〇
三一　細君に心配させる人……一一二
三二　針の持てない女……一一五
三三　細君に物を言せぬ人……一一七
三四　縫針の達者な女……一二〇
三五　細君に感心させる人……一二三
三六　何かと言へば直に泣く女……一二六
三七　貸しさうで貸さぬ人……一二九
三八　無暗矢鱈に泣く女……一三一
三九　返しさうで返さぬ人……一三四
四〇　法螺ばかり吹いて居る女……一三六
四一　借金ばかりして居る人……一三九

四二 誠に謙遜な女……一四一
四三 借金を逃げぬ人……一四四
四四 だらしのない女……一四九
四五 上手に金を借りる人……一五二
四六 心に引締のある女……一五四
四七 無くては成らぬ人……一六〇
四八 妙に物を隠したがる女……一六二
四九 有つても無くても宜い人……一六五
五〇 呆れる程寝る女……一六八
五一 手の皮の薄い人……一七一
五二 常に溜息を吐く女……一七四
五三 無暗矢鱈に笑ふ人……一七七
五四 元氣の好い女……一八〇
五五 人の顔を眞向に見切らぬ人……一八四
五六 夫に素氣ない女……一八七

五七 借金を恐れぬ人……一九〇
五八 夫に甘える女……一九三
五九 嘘ばかり吐いて居る人……一九六
六〇 夫を尻に敷く女……二〇七
六一 色々な事に手を出す人……二一〇
六二 夫の悪口ばかり言つて居る女……二一三
六三 尻の重い人……二一六
六四 馬鹿に夫を褒め立てる女……二一九
六五 兎角口數の多い人……二二一
六六 これは困つた癖のある女……二二四
六七 元氣の好い人……二二八
六八 誠に邪猜深い女……二三〇
六九 自分で運を開く人……二三三
七〇 至つて悋氣深い女……二三六
七一 自分の福を破る人……二四〇

七二　犬好きの女……二四三
七三　人の睾丸に絲をつけて引張る人……二四五
七四　人を穢ながる女……二四八
七五　人を只で使ふ人……二五一
七六　容姿自慢の女……二五三
七七　無暗に人を疑ふ人……二五六
七八　我子に酷く當る女……二五八
七九　人の物を欲しがる人……二六一
八〇　演劇好きの女……二六四
八一　食物に卑しい人……二六七
八二　負嫌ひな女……二六九
八三　世話の仕甲斐の無い人……二七二
八四　何でも知つた振をしたがる女……二七四
八五　人好のせぬ人……二七七
八六　人附の悪い女……二八〇

八七　女の尻ばかり追つかける人……二八三
八八　常に瞬きする女……二八六
八九　間の抜けた人……二八八
九〇　我が子を自慢する女……二九二
九一　無性な人……二九四
九二　誠に無性な女……三〇三
九三　物惜みをする人……三〇六
九四　清潔好きの女……三〇九
九五　情深い人……三一一
九六　何でも直に出しやばる女……三一四
九七　強慾非道な人……三一六
九八　着物ばかり欲しがる女……三一九
九九　人を言ひたいやうに言ふ人……三二一
一〇〇　何だか蟲の好かぬ女……三二四
一〇一　心に落付の無い人……三二七

一〇二　口數の多い女……三三三
一〇三　好んで人の世話をする人……三三八
一〇四　何となく人好きのする女……三三九
一〇五　得手勝手な人……三四一
一〇六　無暗に人をおだてる女……三四四
一〇七　兎角人を悪く言ふ人……三四七
一〇八　貧乏に馴れた女……三五〇
一〇九　欠伸ばかりして居る人……三五三
一一〇　虚榮心の強い女……三五五
一一一　困りながら怠けて居る人……三六一
一一二　猫好きの女……三七二
一一三　恩を仇で返す人……三七五
一一四　出好きな女……三七七
一一五　恩を忘れぬ人……三八〇
一一六　亭主ばかり取換へて居る女……三八二

一一七　強いやうで弱い人……三八五
一一八　内證金を溜める女……三九一
一一九　仕事に身を入れぬ人……三九三
一二〇　押の強い女……三九六
一二一　何でも出來て取得の無い人……四〇四
一二二　氣の小さい女……四〇八
一二三　おのれの職業を卑しむ人……四〇九
一二四　剽輕な女……四一二
一二五　物好きな人……四一五
一二六　潔癖な女……四一八
一二七　遊んで居て金を儲けやうとする人……四二〇
一二八　人に食物を惜がる女……四二三
一二九　煙草入を見たやうな人……四二六
一三〇　人に食べさせて喜ぶ女……四二九
一三一　働いて貧乏する人……四三一

一三二　人の物を欲しがる女……四三四
一三三　遠慮深い人……四三七
一三四　借金取と喧嘩をする女……四三九
一三五　妙な癖のある人……四四二
一三六　新らしい女……四四五
一三七　物忘をする人……四四八
一三八　男を見たやうな女……四五四
一三九　貯蓄心に富んだ人……四五八
一四〇　我儘勝手な女……四六〇
一四一　物の冥利を重んずる人……四六三
一四二　仕事を苦にする女……四六六
一四三　金持の眞似をしたがる人……四六八
一四四　仕事を追つかける女……四七一
一四五　着物ばかり飾りたがる人……四七三
一四六　牛涯夫の鹽加減を解せぬ女……四七六

一四七　尻の落着かぬ人……四七九
一四八　盜癖のある女……四八二
一四九　傲慢不遜なる人……四八四
一五〇　貞操を無視する女……四八八
一五一　溫乎として玉の如き人……四九一
一五二　馬鹿に物に騷ぐ女……四九三
一五三　目と氣と手の一時に働く人……四九六
一五四　至つて落着いた女……四九九
一五五　忿りッぽい人……五〇二
一五六　力の强い女……五〇五
一五七　無暗に事を氣にする人……五〇九
一五八　夫を散々な目に遭せる女……五一二
一五九　好んで人の中口を利く人……五一四
一六〇　夫を大切にする女……五一七
一六一　何だか氣味の惡い人……五二〇

一六二　馬鹿に高ぶる女……五二四
一六三　調子に乘つて物を言ふ人……五二八
一六四　禮儀作法を心得ぬ女……五二九
一六五　賬かな人……五三二
一六六　誠に親切な女……五三五
一六七　至つて呑氣な人……五三八
一六八　生涯夫を泣せる女……五四二
一六九　法螺ばかり吹いて居る人……五四五
一七〇　商賣氣のある女……五四八
一七一　誠に几帳面な人……五五一
一七二　遊藝に達した女……五五四
一七三　だらしの無い人……五五六
一七四　妙な癖のある女……五五九
一七五　事を投遣にする人……五六二
一七六　癇持の女……五六四

一七七　兎角不平の多い人……五六七
一七八　呆れる程呑氣な女……五七一
一七九　奮闘心に富んだ人……五七三
一八〇　機智頓才に富んだ女……五七六
一八一　心の粘りの弱い人……五七九
一八二　經濟の上手な女……五八二
一八三　才氣縱横の人……五八四
一八四　至つて吝嗇な女……五八七
一八五　至つて無作法な人……五八九
一八六　淫祠邪教に凝る女……五九二
一八七　少しも當に成らぬ人……五九五
一八八　信仰の厚い女……五九八
一八九　時を徒費して惜まぬ人……六〇一
一九〇　根性の悪い女……六〇四
一九一　仕事を後に延す人……六〇六

一九二　頓馬な女……六〇九
一九三　取越苦勞ばかりして居る人……六一三
一九四　遣りつ放しの女……六一六
一九五　統一の無い人……六一九
一九六　物の準備に努める女……六二二
一九七　品性の劣等な人……六二五
一九八　夫に心配させぬ女……六二八
一九九　信仰の人……六三〇
二〇〇　常識ある女……六三三

以上

滑稽修養 男女百癖

帝國法律研究會娯樂部編纂

（一）手に胼胝のある人

人間は如何なる職業に從事しても、手に胼胝の出來るまで辛棒すれば、決して食には窮せぬものである。

文人には筆胼胝、商人には算盤胼胝、百姓には、鍬胼胝鎌胼胝、足には固い草鞋胼胝大工さんには鋸胼胝錐胼胝鉋胼胝、鍛冶屋さんには槌胼胝に鞴胼胝、船頭さんには艪胼胝、權胼胝、劍客には竹刀胼胝、藝者は糸胼胝撥胼胝鼓胼胝俳優には假髪胼胝、浪花節家には貼扇胼胝、神官さんには御幣胼胝、お坊さんには鐘胼胝まツた木魚胼胝、車夫さんには梶棒胼胝、兵隊さんには鐵砲胼胝、女に針胼胝庖丁胼胝、お醫者さんには打診胼胝、呉服屋さんに物差胼胝、漁夫に網胼胝木挽に鋸胼胝、石屋に鑿胼胝、酒屋に桝胼胝、嬶は泣胼胝ふくれ胼胝、主人は慍つて癇癪胼胝、のらくら子息に高襟胼胝御嬢さん、奥さん虚榮胼胝、學生にペン胼胝、老人には眼

鏡胼胝、小供衆のは紙の凧、政治家さんは演舌胼胝、新聞記者は材料取胼胝、玄關番には取次胼胝、お三どんは米研胼胝、骨董屋さんに拈り胼胝、刑事は繩胼胝、馬方は手綱胼胝、博徒に采胼胝、土方に棒胼胝、女郎の手には烟管胼胝、乞食の手には缺椀胼胝、此方は困つた貧乏胼胝、併し少しも驚く事は無い、人間は如何なる職業に從事しても、手に胼胝の出來るまで遣れば少くも其の道々に於いて一人前の人間に成り得た時である。一人前の人間に成り得て眞面目に働けば、少くも其の日の食に窮する憂ひは無い。

これに反して何を遣つても、手に胼胝の出來ぬ間は飯の食へる氣遣は無い。早い話が桶の輪がへを一ツ賴むにしても、手に輪胼胝の無い桶屋に賴むと後で屹度水が漏る。疊の表がへをするにも、肘や指の節に胼胝の無い疊屋に賴むと、何うせ碌な仕事は出來ぬ。お醫者さんにかゝるにしても、左の中高指に未だ胼胝の見えぬ人に胸を打いて貰ふと、餘り安心はして居られぬ。

一寸辻車に乘るにしても、手に梶棒胼胝の無い、おまけに色の生白い車夫の車などに乘ると飛んだ目に會ふ事がある。斯う云ふ車夫には胼胝はあつても前に言つた高襟胼胝か虚榮胼胝の上りで、父親さんに勘當された奴に違ひ無い。

おなじく胼胝と云ふ名の附く中にも、高襟胼胝、虚榮胼胝、怠惰胼胝、嘘吐き胼胝などは宜しく無い。そんな人間を相手にすると、飛んだ馬鹿を見なければならぬ。

併し一寸筆耕を賴んでも手に筆胼胝ある人ならば確かである。また着物を一枚賴んでも、手に針胼胝のある女ならばそんなに寸法など間違へるものではない。

馬に乘つても鞍胼胝のある人は達者だ。按摩を呼んでも手に胼胝のある奴ならば兎に角一人前には揉む。易者に一寸トらせて見ても手に噬竹胼胝のある奴であれば、相手の顏や人相を見て何とか理窟を拵附ける。おなじく銃獵に出かけても畑邊に鐵砲胼胝のある人であれば、そんなにあぶれては歸らない。書を一枚書いて貰つても、手に筆胼胝のある人であれば、矢張何處にか素人の及ばぬ所がある。畫工、小說家、木彫、牙彫、鑄金家その外何でも總て皆同じ事、先づ其の人の手の胼胝を見た後の相談にするが可い。碁打には石胼胝、將棋差には駒胼胝、茶人には茶筅胼胝、植木屋に鋏胼胝、經師屋には刷毛胼胝、槍術家には槍胼胝、弓術家には弦胼胝、凡そ一藝に達した人には必ず何處へか手に胼胝のあるものである。

（二）酒の好きな女

男にしても餘り酒の好きな人間は困る。況んやそれが女であつては、一寸御挨拶に困る譯である。

或る教員の細君は大層酒好きである。旦那さまは至つて小作な男であるが、細君はぶくぶく肥つて居る。「彼は酒肥りだ」と世間では言つて居る。いかさま力も強さうだ。女相撲の力士にすれば、誰も異議のない横綱ものだ。

その身體で酒が強いと來て居るから凄い。貧乏人の內儀さんぢや遣り切れまいが、幸ひ旦那さまに月給以外の收入もあるので、細君が幾ら呷らうと、酒屋の支拂位に困るやうな氣遣はない。

その憂のないためでもあらうが、兎に角細君は大いに飲む。朝飯前に先づコップに冷酒を二三杯引ッかけぬことには心から眼が覺めぬさうだ。

朝飯が濟む、旦那さまが出勤する。物の二時間と經たない中に、熱燗をコップにあけてがぶ〳〵と飲らぬことには、その日の用事を女中達に言ひつけることも出來ぬ。

お晝には大びらに寒暑の別なく二合入のお銚子がお膳の上に立つて居る。これが先づ二本と女中達は心得て居る。午後お茶時になると、これも亦一本は缺かさない。

夜食のお膳には公式にお銚子が付いて居る。これが又二本、多い時は三本以上、旦那さまの御機嫌次第では五本以上に上ることもある。この大奥さまは二合や五合の酒には決してお醉ひなさらぬ。その量一升を越して後、始めてほろ醉機嫌におなりなさるさうだ。いざ御機嫌になつたとなると、旦那さまは大迷惑、一般の家庭とは反對に、

「良人、チトお酌でもなさいな！」

此方は又生れ付いての石下戸、酒の氣のある物と來ては奈良漬も鼻が嫌ふ、最う大分禿げて來た頭を撫で〻、

「今夜は何うか勘辨してくれ！」

「いけませんよ、お酌をなさいと言つたらなさい！」

「それぢや今夜は一度切で御免被るよ」

ぐいと引いて、

「良人お逃げなすつちやいけませんよ」

「今夜は少し用事を持つて歸つたからな」

「嘘おッしやい！」

「マア〳〵今夜は許してくれ！」

逃やうとすると捕まへる。捕へられたが最後此方は小男、女でも横綱には敵はない。帶を掴んでぐいと引寄せ、母が子供を扱ふやうに、

「マア少し此處におとなしくして居らツしやいよ」

膝に抱いて光る頭を撫でゝ遣る。斯んな時に逃げると怒つて暴れ出すので、旦那さまは俵を二俵列べたやうな奥さまのお膝の上に、じつと子供のやうに腰かけて居る。晩酌に一升以上遣つた時でも寢酒は二本と極つて居る。

この奥さんには酒に就いて奇談が多い。快く御銘釘遊ばすと、小さい旦那さまを玩弄物のやうにしてお遊びなさる。

「私が三味線を引きますから、良人何か唄つて頂戴」

「乃公は家を建てるより外にや何にも藝は無いよ」

「ぢやア敎へてあげますからお唄ひなさい！」

「この年になつて外聞が惡いから廢してくれ、後生だ！」

「ぢやア私が引きながら唄ひますから踊つて頂戴」

「猶出來ん藝當だ！」

「ぢあア私が踊らせてあげます」

旦那さまは逃げかゝる。帶を掴んで引戻し、大きな膝の上に抱く。斯うなつては最う逃げやうにも逃げられぬ。

「良人も可愛い老爺さんになりましたね！」

斯んな事を言ひながら半電氣の頭をツルリと撫でゝ遣り、恰是操人形のやうにして後から兩手を持つて唄ひながら踊らせる。踊は何と極つては居らぬ。或る時は「春雨」を踊らせ、或る時は「雨しよぼ」を踊らせ、酷い時には「かつぽれ」なども踊らせる。

人形代りの旦那さまは、悲慘な顏をして、半分泣面を搔いてお居でになる。膝の上の人形が少し我儘でもしやうものなら直ぐにコンと光る頭を叩かれる。

或る時「すてゝこ」を踊らせて居ると、何うした機勢であつたか、旦那さまが腦貧血を起された。奥さんもこれには度胸を拔かれ、その儘じつと抱いて居ると、其處にお醫者さまが御見えに成つた。

「如何成さいました」

お醫者さまは容體を問ふた。奥さまは臆面なく、

「私が今膝ですてゝこを踊らせて居りましたら、急に氣分が惡がりましてね、何時も斯んな事はないんでどさいますが……」

「ハ、アー」

お醫者さまは苦しさうな顏をしたが、流石は職業、辛と堪へて脈を見た。

酒の上とはいひながら、この婦人には時々斯んな面白い話がある。これは四五年前のことだが、或る夜この奥さんが産氣付いた。急報に接して産婆が駈着けて見ると、「前景氣だ」と言つて既に熱燗を三本倒し、更に又一本呑まうとして居る所であつた。

産婆は驚いて辛く制めた。産婦は醉つて管を卷きながら丈夫さうな男兒を産み落した。後の汚露が酒臭かつた。「斯んなお産婦さんは始めてだ」と産婆は膽を潰したさうだ。

(三) 口先て物を言ふ人

世にはたゞ口先で、いかにも輕く物を言ふ人と、また一々確乎と、腹で受答をする人がある。人は必ず此の中の、その何れかに屬するものである。

たゞ口先で物を言ふ人は、概して腹も無ければ、亦誠意も乏しいものである。併し、斯う云ふ人は一寸會つて見た所では、ひどく人附の好いものである。斯う云ふ人に何か相談を持ちかけると、自分の懐から金錢を出さずに濟む事であれば、決していやな顏はせぬ。直に輕く受込んで、「宜しい承知致しました。イヤ大きに、極力運動致しませう」などゝ、いかにも親切らしく言ふ。

斯う云ふ人は、何事でも直に承知はするが實行は出來ない、只口先で承知したばかりで、後に成つて聞いて見ると、「ハア左樣でしたかな」と言つた樣な事が往々ある。

人間は腹で言つたことは忘れぬが、口先で言つたことは、兎角忘れ勝のものである。何故だといへば、腹から出るのは事實であるが、口から出るのは虚僞である。事實は何時まで經つても消滅せぬが、虚僞は如何に巧みに言ひ爲しても、譬へば一時人目を眩する虹のやうなものである。

實に油斷も隙も成らぬ世の中で、今日の世間大多數の人の口先には虹が立つ。併し直に消えて了ふ。言つたことも仕たことも決して長く頼みには成らぬ。その人の腹に誠意が無いからである。

人を使ふにも、人に使はれるにも、又は人と仕事を共にするにも、徒口先で虹のやうに華やかに物を言ふ人を頼みにして居ると、後で飛んだ馬鹿を見て、おのれ獨りで痛い思ひをしなければならぬやうなことになる。徒口先で其の時その場に應じ、巧く調子を合せる小才子を餘り信用し過ぎた結果、後に喜劇を演じつゝある人は、世間に決して少なくはない。

これに反して、一々おのれの腹で確乎と受答をする人は誠に少ない。口先で無く腹で受答をする人は、おのれの責任を重んずるので、假令何んな些細な事であらうとも、人から相談を受けた場合には「オット宜しい承知しました。ナニ雜作ありません」などゝいふやうな輕い口の利き方は斷じてせぬ。「左樣でございますな」と腹の底から聲を發して、先づ疑ひを存し、篤と己れの腹で、我が成し能ふや否やを考へて見る、その顏容からして重々しく見える、だから此方はたゞ口先で出鱈目を言ふ人と違つて、概して人附の好くないものである。人附は好くないが、斯ういふ人が腹を据ゑて「宜しうございまする、承知致しました」と答へた時は、その人の言を信じても先づ以て後日悔なきものだと見なければならぬ。昔は此一言に武士は已れの一命をかけて口を開いたものだといふが、今日の人は武士に非ずして紳士である。多くの人に接するには、その邊の覺悟も亦大切である。

總じて人に使はれるにしても、たゞ口先の人よりも腹の人に使はれたい。また人を使ふにしても口先の人よりも、腹の人を使つたが賴母しくもあり安全でもある。人と事を共にするにも亦その通りである。

要するに、たゞ口先で物をいふ人は、その性概して輕佻浮薄で、兎角事を過り易く、腹で物をいふ人は謹嚴崇重で大事に堪へる。初めて人に接した場合には、相手の人物如何を見ることが大切である。

（四） 夫の元氣を沮喪させる女

おなじく人の妻にしても、その一言一行に依つて、夫の元氣を沮喪させる女がある。大事を成さんと欲する者は、漫りに妻帶してはならぬ。一度妻女の選擇を過まると、男兒一生の大運命に大障害を及ぼすやうなことになる。

夫を慰め夫を勵ます能力のない女は、いかに美人であらうとも正可な時には賴みないものだ。若氣の至りに色惚をして、こんな女と虛然三々九度の盃を取交したが最後、可惜男子の一生を棒に振らねばならぬやうなことになるから堪らない。

或る女の夫は今が働き盛りであるが、何うも思はしい境遇に立てないで、この節の生活難の辛味酸味を身に泌みて味はつた。何とかして今の苦しい生活を整頓しやうと思つても、肝腎な相談相手の細君に、その分別と勇氣がなかつた。

世の中は火ばかりではいかん、水もなければ米があつても飯は食はれぬ。夫ばかりが如何にヤキモキ思つても、男の働きばかりでは家の中は暖になつては來ん。

夫は生活に疲れ工夫に疲れた。子供は既に三人もあるし、收入が生活に伴はんので、この儘無理押に押して行つた分では、最う程なく行詰つて、何んな悲劇の主人にならふも知れなかつた。夫はこれを怖れて發憤し、窃に新運命を求めて居ると、兼て賴んで置いた友達から太く有望の話を聞いた。「吾の知人が一隊の漁夫を率いて墨國の東海岸に行つて漁業を遣る、君その船の事務長になつて行つてはどうだ。二三年も辛抱して來たら相當の金を持つて歸られるだらう」と言ふことだつた。

彼は直ちに決心し、「それでは何分お賴み申します。奮發して是非參ります」と言つて歸つて來た。

家に歸つて來て此の話をすると、「それは結構なことです。是非お出かけなすつて下さいま

し」と言つてくれるかと思ひの外、夫を勵ます勇氣の乏しい女は直に悄氣かへり、「そんな遠方に三年もお出かけなすつて家は何うなさるお積りです。私が病ふか子供が病ふかした時は、誰も面倒を見てくれる人はなし、早速困るのが目に見えて居るぢやありませんか、妻子を棄てゝそんな事をなさらないでも、何とか方法がありさうなものぢやありませんか」と泣付いて止めた。

夫はこれに氣が挫けた。折角の奮發心も鈍つて了つた。行くには行きたいが、然う言はれて見れば、可愛妻子を振棄てゝ天涯萬里の征途に上る氣にもなれず、「少し事情がありまして行かれぬことになりました」と言つて斷つた。

此方に居て、何か好い地位は得られまいかと、絶えず心がけて居たが、別にこれと云ふ思はしい口もなく、不遇の間に二三年の月日は過ぎた。この間に殖えたものは子供と借金、今では殆ど其の日の口も濡しかねて居るさうだ。

（五）目先の利かぬ人

世には目先の利かぬ人がある。斯ういふ人は何に成つても、使ひ道がない。實に困つたもの

である。斯ういふ人には、同情したくも殆ど同情のしやうがないであらう。何時も餘りに氣の利かぬことばかりして、物の用に足りないからである。斯ういふ人は、世間に甚だ少ないかと云ふと、何うも左樣では無いらしい。論より證據、世には「お前は何うも目先が利かんで困る。今日の人間が、それぢや仕方がないぢやないか」と、言つて目上の人に叱られて居る人が少なくない。

全體目先の利かぬ人といふのは、何んなな人を云ふのであらう。鼻の利かぬ人といへば、病氣の爲に嗅覺の鈍く成つた人に違ひないが、目先が利かぬといふのは一寸妙だ、試みに字書を見ると、口先といふ語は出て居るが、目先といふ語は見當らぬ。而て見ればこれは、世の學者には餘り知られぬ語で、或る必要上から世の實務家に依つて作られた語かも知れぬ。

然らば何と解釋を附したら宜からう。ヨシ來た一番目先を利かして、彼の話を以て行つたら何うだらう、或は巧く壺に欲るかも知れぬ。

昔、或る國の山中に一人の長者が住んで居つた、その長者が或る年の冬、大層雪の降つて居る日に、急に鯛の刺身が食べたいと言ひ出した。

海邊までは大分土地が隔つて居るので、執事は大きに當惑したが、一度言ひ出しては中々承

知せぬ主人のことであるので、執事は一人の僕に金を持せて、遠い濱邊まで鯛の無鹽を買ひに遣つた。

三日目の夕方に僕は長者の館に歸つて來たが、折角の御用はお生憎樣であつた。

「何うもこの頃は太く海が暴れて漁がないので鯛はございませんでした」

執事は大きに失望し、恐々其の譯を長者に申すと承知せぬ。

「何うあつても鯛の刺身を食はねば成らぬ。直に又探しに遣れ」

執事は又一人の僕に金を持せて、濱邊を差して遣した。何しろ此節は太い雪で、海の物は愚か山の物も、總ての肉が絶えたので、長者は毎日不機嫌で居つたが、或る日のこと海に遣つた使の歸るのを待ちかねて、

「それでは切めて鴨でも食ひたい。今日の夕飯には是非鴨の肉を出せ」

鯛もない上に鴨も間に合はぬと云ふことになると、長者は何んなに暴れ出すかも知れぬ。執事はハラ〳〵思つて一人の僕に弓矢を渡して、

「その方これより何れへなりと參り、是非主人の今夜の御晩餐に間に合ふやうに鴨を射て參れ」

「畏まりました」

僕は直ちに出發した。遣るには遣つたが執事は不安で堪らなかつた。

「首尾よく鴨を射止めて歸れば好し、若し又空手で悄々歸つて來ては、それこそ何ともしやうがない。こりや斯うしては居られぬわい、最う一人誰か鴨獵に遣らねば心元ない次第ぢや」

早速又一人の僕に弓矢を持せて、前のやうに言ひ含めて、直ちに館を出發させた。出發させると殆ど同時に、雪が段々烈しく成つて嵐がドツと吹いて來た。

「この樣子では何うだらう」

執事は實に氣が揉めた。去る程に烈しい雪と嵐との間に追々時刻は移つたが、鴨狩に出かけて行つた二人の僕は、この雪に凍えたか、但しは谷に落ちでもしたものか、何方も歸つて來なかつた。執事は益々心を痛め、とつ置いつして居る中に、冬の日は暮るゝに早く、既に夕方に成つて來たが、おなじく何の便りもなかつた。

「これは所詮望みがない？」

執事は遂に絶望した。

「さて鴨が手に入らぬとすれば何うしたものか。譯を言つても聞き分ける主人でない。いよ〳〵

鴨も手に入らぬといふことに成れば、叩き出される位では、或は事が濟まぬかも知れぬ。それでなくとも此節は太く御機嫌の惡い所にお望みの鯛も手に入らぬ。鴨も差出すことが出來ぬとあつては、それでは執事の役目が立たぬ。假令打首に合つても仕方がない。主人が惡い譯ではない、全く自分の不行屆きぢや。最う斯う成るからには運の盡き、人力の及ぶ所でない？」

執事は既に覺悟はしたが、それとも何うかと、猶二人の便を待つて居つたが、何方も姿を見せぬ中に、日は早既に全く暮れて、長者が晩餐の時刻は最う眼前に迫つて來た。

「最ういかん！」

一縷の望みも今は絶えて、執事は直然と起上つた。同時に最初館を出かけた僕が狩から歸つて來た。執事は顏を見て打喜び、

「ヤア御苦勞であつた！何うだ、鴨を射て參つたか」

「今日一日狩りくらして參りましたが、鴛鴦は屢々見當りましたが、鴨には終に見當らず、それ故空しく歸りましてございます」

執事は怨めしさうな顏をして、

「然らば何故鴛鴦なりとも射て參らなかつた！」

「鴨との仰せでございましたので・・・」

「さて〳〵汝は愚かな奴！同じ水鳥の事故に、鴨がなくとも鶯でもあらば、また何とか御前の御意を得られる工夫もあつたであらうに、種がなければ手品も使へぬ！おのれ悪い奴、若しこの方にお咎めあれば、汝も決して此儘には差置かぬぞ！」

一日寒い思ひをして、雪を浴び嵐に吹かれ、殆んど生命がけの仕事をして戻つて來た僕こそ好い面の皮、撫恤られでもすることか、この儘では差置かぬぞは餘りに酷い、酷いやうではあるが執事の身に成つて、見れば、これも亦無理はない。

その中に時刻は愈々迫つて來た。執事はハタと當惑し、眞青に成つて居ると、其處に第二の僕が同じく狩から歸つて來た。執事は又生き復り、

「ヤア何うであつた？鴨は射て參つたか」

「執事殿の仰せに從ひ、今日一日心當りの場所を捜しましてござりますが、生憎と鴨は一羽も見當らず・・・」

「や、や、さては汝も空手で今頃歸り居つたと見えるな！」

執事は堪らず、腰の一刀に手をかけた。二人の僕は逃出した。

この時一人の僕は實際館を逃出したのであつた。また逃出さずには居られないのであつたが、一人は何か賴む所があつたと見えて、程なく大きな包を背負て、のつそ〳〵と執事の部屋に遣つて來た時は、執事は失望の餘り最う死んだやうになつて未だ死んで居なかつた。死んで居らぬ證據には、此方の顔を見るが早いか、おのれと呼んで跳り立ち、跳り立つと共に又一刀に手をかけた。僕は制して、

「イヤ執事殿先づ暫く！」

執事は拳で一刀の柄を叩いて眼を瞋らし、

「生命が惜くば、何故鴨を射て參らなかつた？」

「いかに執事殿の仰せでも、居らぬ鴨は射やうがござらぬ！さりながら折好く鶯は見當りましてござりまする！」

「然らばその鶯を射て參つたか」

「左樣にござりまする。おなじ水禽の事故に何れでもお役に立たぬことはあるまいと存じ、見事な鶯鶯二匹偶射止めて歸りましてございまする！」

「何と！」

「まだその上に雁も一羽……」
「何と！」
「鶴も一羽……」
「何と、何と、何と汝は目先の利いた男であらうな！然う智慧が走らないでは、このお館の御奉公は勤まらぬ」
「執事殿、これがその鶯でござる！」
「成程！」
「これが雁でござる！」
「いかにも！」
「コレがその鶴でござる！」
「ヤアこれは見事なものぢやのう！イヤこれ丈あれば御前は上首尾……」
「兎に角既にお夜食の時刻も迫つてござりますれば、これをこの儘御前の御覽に入れましては如何でござりませう？」
「オ、好いところに氣が附いた。然らば左樣致すであらう」

長者は此等の獲物を見て大きに喜び、二人を賞して今夜の晩餐を樂しんだ。目先の利く人は手先も利く。僕は早速以上の獲物を見事に解き、皆それ〴〵に調理して長者の食膳に上せると長者は非常な御機嫌であつた。

執事は大きに喜んだ。これで先づ一ツの難場は切抜けたが海の使は何うであらうと氣遣つて居ると、これも其の翌日雪を踏んで遙々濱邊から歸つて來た。

「鯛はあつたか」
「何う探して見ましても、鯛は生憎見當らずに戻りました」
「然らば汝も空手で來たか」
「イヤ遠方態々參りました事故に、お氣に召す召さぬは格別、見事な比目魚と、魴鮄と鮞と鮪とを得て歸りました」
執事はホツと息を吐き、
「イヤ汝も中々目先が利くわい！よく智慧を使ふ男ぢや！さうなうては此のお館の御奉公は勤まらぬ」
鯛はなかつたが、これも亦長者の意に滿ち、二人を厚く賞したとのことである。

お話は變りまして、おなじく人に使はれても、萬事に目先の利く者でなければ到底立身出世は出來ぬ。何となれば事の間に合はぬからである。また人を使ふにしても、目先の利かぬ者を使つて、それに仕事を頼んで下手に安心して居ると云ふと、鴨と命ずれば鵞鶏は居つても捕へて來ず、鯛と注文すればそれ以外には目が利かず、空手でスゴ〳〵歸つて來て、此方も詰らなければ向ふでも骨折損といふやうなことになる。

さて愈〻結論に迫つて來た。目先の利き人に成るには何うすれば好いか、萬事萬物に接して卽ち其の時の其の場合々々に臨んで、縱からも横からも自己の智慧を使つて見ることが肝心である。換言すれば、萬事萬物に當つて、能く自己の常識を活用するのが、目先の利く人になる練習である。

（六） 夫の勇氣を鼓舞する女

それかと思ふと世には又、その一言一行に依つて、夫の勇氣を鼓舞振作する女が居る。大事を成さんと欲する者は、その容貌の美醜は第二、先づ第一の要件としては、斯う云ふ資質を具へた婦人を妻に有たねばならぬ。

この實質を具へた婦人を妻に持合せた人は眞に幸福な男子である。大事に臨んで機會を逸する場合が少ない。

話は前のと關聯する。その時細君に泣付かれて前の男は勇氣が沮喪し、漁船の事務長として遠征することを斷ると、當にして居た方では少からず迷惑した。斯う云ふ女があると、諸方に累を及ぼすものだ。獨り其の夫の腰を弱くさせるばかりでは納まりが付かぬことになつて來る

誰か適任者はあるまいかと、急に人を探すことになつたが、多いやうで少ない者は其の道々に使ふ人物、サア要ると云ふ事になると、世は誠に生憎なものだ。

併し人は有餘る世の中である。その中續々候補者が出て來たが、「この男なら」と云ふ人がなかつた。イヤあつた。一人適任者があるはあつたが、知人の話によると、二人ある子供が二人とも目下百日咳に罹つて太く疾つて居り、搗てゝ加へて細君が病後で、これも大分弱つて居ると云ふことだつた。

無理とは思ふが此方も急場のこと、早速その人に話を進めて見ると、無理はない考へ込んだ何とかして御都合が付きますまいか、お留守中のお手當は及ぶ丈遣りますが」と企業者は更に相談をかけて見た。

行きたいには行きたいですが、何分家が只今もお話しましたやうな譯でございまして……。併しまあそれ程おツしやつて下さるやうなら、一度歸つて家内の考を糺いた上で御返事することに致しませう」

「それぢや何うか左樣云ふことに」と云ふ話になつて其の場は別れた。男は默々として歸つて來た。歸つて來て細君に話して見た。所詮六ケしい相談だと思つて話して見ると、結果は實に意外なことになつた。

肺炎を病つて、辛く助かつて後で、まだ元氣の回復して居なかつた細君は、この話を聞いて嫣然と笑ひ、「それぢや何うかお出かけなさる事にして頂きませう！ナニ良人、私は最うこれで五日か十日も經てば身體は本の通り丈夫になります。子供も二人斯うして病つて居りますが、質の知れた病氣でございますから御心配には及びません。何うかお留守中のことは御安心なすつてお出で下さい。萬事は屹度私がお引受いたします！」

妻の一言によつて、夫はぐつと强くなつた。

「それぢや奮發して行つて來るぜ！」

「何うか行らして下さい。何も可愛子供達のためです。お留守は私が大丈夫引受けます！」

夫は勇んで海の上の人になつた。妻は夫の留守中月々受ける手當の金で二人の子供を大切に看護して居る中に子供は幸ひ二人とも本復した。

細君は子供の病氣が治ると、早速家を疊んで間借をし、月々受ける五拾圓の手當の内から參拾圓宛貯蓄して、六ケ月目に婢を一人雇つて安飯屋を始めた。段々に繁昌して來た。神聖なる努力の効は怖ろしいものだ。開業後二三ケ月目には手當の五拾圓は其儘殘り、他にも幾分宛貯蓄が出來るやうになつた。

足掛四年目に夫は無事に戻つて來た。貳參千圓汗の價値を持つて來た。留守中に細君も殆ど夫と同額の金を拵へて居た。夫婦は其の金を合せて立派な商賣に取着き、今では結構な生活を遣つて居るさうだ。

（七）常に歎息する人

世の中には何事に就けても、常に歎息を吐いて、愚にも附かぬ泣事ばかり言つて居る人がある。例を擧げて見れば——

（一）「吾は何うして斯んなに仕合が惡いだらう！」

(二)「吾は何うして金に縁が無いだらう！」
(三)「吾は何うして斯んなに身體が弱いだらう！」
(四)「吾は何うして人に嫌はれるだらう！」
(五)「吾は何うして斯んなに智慧がないだらう！」
(六)「吾は何うして何時も損ばかりするだらう！」
(七)「吾は何うして斯んなに借金ばかり殖えるだらう！」
(八)「吾は何うして人に信用が無いだらう！」
(九)「吾は何うして斯んなに自分の嬶にまで愛想を盡されるだらう！」
(十)「吾は何うして斯んなに糞が固いだらう尻が痛い！」

斯う云ふやうに一々悲觀した日には、人間は遣り切れたものでない。所が世には好んで萬事を悲觀して、斯う云ふやうに泣事ばかり毎日言つて居る人がある。

斯う云ふ人は、少々仕事は出來ても、秋口の蛇のやうに人から淋しがられるやうになる。淋しがられる丈で濟めば結構だが、自然人に嫌はれて、出來る出世も出來なくなる。それで自分は面白いかといふと左樣でない。自分も面白くなく人にもいやな思ひをさせる。さうして何にも得る所は無いと來ては、世の中にこれ程つまらぬ事はあるまい。

笑ふ門には福が來るとすれば、泣く家のお客さまは貧乏神に違ひない。

世人記憶せよ。イヤ好く覺えてお居でなさい！悲哀の百ポンドよりも快樂の一オンスが世は貴い！

總じて歎息は人間の大敵である。

總て話は早いが好いが、國民全體が歎息を吐いたならば、その國家は何うなることであらう。また一家擧つて歎息を吐き、泣事ばかり言つて居つたならば、その家は何うなるであらう。個人としても其の通り、何時も歎息ばかり吐いて居つたならば、その身の末路は何うなるであらう。イヤ末路の事は暫らくおいて、歎息ばかり吐くやうな者は、現在に於いても既に失意の人であるに違ひない。

歎息は我れ一人に止まらず、人に傳染するものである。人の上に立つ人で歎息を吐けば部下の者も自然と歎息を吐くやうになる。上下擧つて歎息を吐くやうに成つては、最う其の事業はお了ひである、少くも發展する氣遣は無い。

一家にしても其の通り、主人が歎息を吐けば細君も自然と歎息を吐くやうに成る。主人夫婦

が歎息を吐けば、譯も分らずにお三どんも歎息を吐き、小供までが其の氣を受けて、自然と悄氣るやうになる。斯う成つた日には、最う其の家はお了ひである。少なくも其の家の繁昌する氣遣は無い時である。

仍ていふ、常に歎息を吐く人には使はれぬが宜い。立身出世の見込が無い。常に歎息を吐く人は使はぬが宜しい。一人の爲に十人の勇氣が沮喪せぬとも限らぬ、また常に歎息を吐く人には近寄らぬがよろしい。此方も自然と其の氣に感じて、常に歎息を吐くやうになる。また斯ういふ人と仕事を共にすれば、何時も消極主義に流れて、鯉の迯跡ばかりを押へるやうなことになる。

歎息の吐かゝつた時は、下腹にウンと力を入れて、「ナニ糞ッ！」と全身に氣を滿し、朝日を睨んで天に昇る鷹の强さを思ふが宜しい。さうすれば我も段々强い人になつて、終には歎息が出ぬやうになる。常に歎息を吐かぬやうになれば、少なくも我れは既に一人前の男になり得た時である。

（八）　貪ふより外には能のない女

「女は尻と言はれるとも口と言はれるな」と云ふ諺がある。

成程女だてら始終口をムク〳〵動かして居るのは餘り見好いものではない。見好いものではないが何うかすると世間には、おそろしく食ひしんばうな女がある。都會には殊に多いやうだ、一ッは全く食物の便利な爲もあらう。何にしても餘り褒めた話ぢやあるまい。

この惡癖のひどい女になると、亭主の收入を食ひ盡して尙口淋しがつて居るのがあるから呆れる。この上胃が惡いとか頭痛がするとか言はれた日には、亭主こそ好い面の皮である。全く以て浮瀨があるまい。

斯う云ふ女は何時も食ふことばかり考へて居る。今こそ朝飯を喰べた癖に、今日は洗濯の一ツも仕やうと思つて、井端に盥を出して二三度チャボ〳〵遣つて見ると、最う何か口に入れて見たくなる。辛抱仕切れず內に入つて、何か食べる物はないかと搜して見ても生憎と品切れだ。斯んな女には貯蓄とか準備とかいふ氣がないので、有れば目の敵、何でも片つ端から平げて了ふからである。

併し何か口に入れて見ぬことには承知が出來ぬ。何か〳〵と思つて根氣に探して居ると、小さな砂糖壺に極めて少量の砂糖が殘つて居るが、匕で掬ふ程はない。湯を注ぎ込んで振つて見

ると、少々芥も動いて居る。お闕ひなしに壺の口から呷つて居ると、何うした機勢か鼻吼に入つた。大騒ぎして後仕末をして居ると、水口の腰高障子が開いた。

「八百屋でございますが、何か御用はありますまいか」

兩袖で紅くなつた鼻を隠し、

「おさつがありますか」

「ハイ有ります。外に御用は・・・・」

「蜜柑がありますか」

「今日は本場の好いのを持つて參りました」

「此間のやうな串柿がありますか」

「串柿はお生憎さまでしたが、林檎の好いのがありますが如何でございませうか」

「ぢやアそれを十個ばかりも貰ひませうかね」

「畏まりました！」

最も洗濯も手にはつかん。早速長火鉢の前に坐り込んで、林檎を食べる。蜜柑の袋をチュウ〳〵吸ふ。これで先づ幾分口の滿足したところで、夫に感付かれぬ用意に、今度は蜜柑や林

檎の皮を芥箱の中に棄てに行く。歸りは盥の前に蹲むかと思へば左様はせぬ。何はおいても芋を蒸し始める。芋の溫かいのを吹き吹き二三本も食べて見ぬことには何にも手には付かぬ。

斯んな女に限つて、現行犯を押へられぬことには、何があつても隠して置いて、おのれの亭主にも食べさせぬ。況んや其の他の者には何があつても知らぬ顔をして居る。月末になつて、

「今月は八百屋の拂が馬鹿にあるな」と詰問せらるれば、

「この節は八百屋物が馬鹿にお高くなりましてね」と澄して居る。

例を擧ぐれば斯う云ふ女は幾らも居る。夫は此節の世智辛い世に立つて、その日その日の生活に安い思ひもして居ないのに、連れ添ふ妻は何ふかと云ふと、窃に己れの口ばかり可愛がつて、夫に重い荷を背はせ、別に氣の毒とも思つて居らぬ。斯う云ふ女の心理狀態は、一寸想像がつきかねる。無暗に飲食物に金錢を濫用して、少しも恥ぢない所を見ると、一種の病的とし か思はれぬ。

斯う云ふ質の女になると、食物を見ると何を見ても忽ち食慾が起つて來る。實に因果なことであるが制し切れぬ。金が無ければ盜んでゝも食ひたくなる。

始めは別にそんな積りでも無かつたが、一寸その邊まで用達にでも出かけて、何か食物を見

ると直に最う食べたくなる。一方には此の金は使つてはならぬと思つても、食物を見ては口の方で承知せぬ。「食べやう食べやう！」と云つて誘ふ。つひ我慢仕切れなくなつて、「ア、此の金を使つては困るがな」と知りながら、我れ知らず蕎麥屋の暖簾でも潜らぬことには口も足も承知せぬ。さうして後では後悔もする。自分の口を怨めしくも思ふが、さて其の場に於いては左様せぬことには動きが取れぬ。

斯う云ふ食ひしんばうの女になると、女は外見に着るよりも食ふ方が忙がしい。着る物は着んでも食ふ。口淋しくなつて來ると、着て居る物を脱いでも口を動かさぬことには生甲斐の無いやうに思ふ。

子には食はせんでも自分は食ふ。毎日食ふことばかり考へて居る。今日汗粉を食べれば明日は天麩羅を食べたい。明日天麩羅を食べれば今度は鮓が食べたくなる。鮓が濟めば鰻丼、蕎麥好し、親子丼結構、餅菓子、燒芋その他何でも關はない。勿論女の事だから一時に太した散財も出來まいが、一錢、二錢、五錢、十錢、二十錢も月に積り年に積れば少なからぬ金額に上つて來る。終には夫の生命まで食つて了ふやうな算盤になつて來る。斯んな細君を持合せたが最後、夫は炒豆同様で生涯芽の出る時はない。

斯う云ふ女は下層社會に多く見かける。イヤ左様でない、中以上にも隨分あるから堪らない。此方は身分の高い丈金の使ひ方も荒いので旦那殿は遣り切れぬ。つまりはこれも細君に食はれて了ふことになる。

東京で一二流の飲食店に入つて見ても、素破らしい服裝をした若い女客が一人で入り込んで居るのを見る。三越、白木の歸りでもあらうか、それ等は大方食道樂の夫人連中であるさうだ。中には男のやうに盃を取つて、唇の紅の手前も恥かしくないことか、人中で平氣で呼つて居るのもあるから堪らない。充分飲んで食べて口に十分滿足を與へ、紙幣を撒いて歸つて行く。姫御前の身としてあられたことか、實に沙汰の限りである。氣の毒なのは旦那殿、妻女は容姿よりも性行を選ばなければならぬものである。古い理論だが何うも實際だから仕方がない。

或る青年法學士が東京で嫁を貰つて一家を成した。

我が子の世に出るのを待ちかねて居て、國元から母親と妹が早速出て來て此の新しい家庭に入つた。

嫁が恐ろしい食いしんばうで、毎日間食に少なからぬ金を使ふので、多年地方で質素に暮して來た姑や小姑は目を瞋くし見て居つた。

地方者の姑は遠慮して默止つて居ると、嫁の惡癖は益ゝ增長して行つた。長い間には姑も遂に見かねて、悴は毎日外に出て働いて居るのに、内を預る嫁がこれぢや一方が可愛さうなものだ。少しは窘んだら好からうに！」と愚痴を溢すやうになつた。

これを聞いた嫁は甚だ憚ばなかつた。併し大平に反抗ふ譯にも行かなかつた。姑の機嫌が好くないと感付いては、急に流儀を變へて内證で胡鼠々々食べるやうになつた。

姑はこれを知らんでは無かつたが、他の事と違ひ食物に就いて彼此言ふのは如何にも吝しい今に子供でも生れたら其の癖も治るであらうと、未來を頼んで目を閉り、見て見ぬ振をして居つた。

辛抱の仕甲斐があつて、その中に子供は男女二人まで生れて、兄の方は今年早三歳になつた孫は何方も可愛かつたが、嫁は餘り好ましい方では無かつた。

何故だと云ふと、既に二人の母になつても、嫁は相變らずの食ひしんばうであつた。イヤ相變らず所の話でない。子持になつてから後は、更に相變つた食ひしんばうになつた。人の妻たり母たる任務は、常に口を動かして居るにあると心得て居るやうに見受けられた。食べるは食べるは根氣に食べる。流石辛抱强い姑も呆れかへつて、終には小言を言はずと居られぬやうに

なつた。

家庭には悶着が持上つた。嫁は悲憤慷慨して、私は食物に就いて、彼此言はれるやうな家には居られない」と言つて騒いだ。間に立つて困つたのは主人、餘り人聞の好い話でないので、母親と妹を別居させることにした。姑は心外な事に思つたが、嫁に取つては目の上の瘤がポロリと二ツとも落ちて跡なく取去られたやうな思ひがした。

姑は嫁には何の執着も無かつたが、可愛二人の孫の顏は三日も見ずには居られなかつた。今日は何うやら雪でも降りさうな日であつた。「この寒いのに孫は二人共何うして居ることか」と急に其の顏が見たくなつた。行けば嫁に喜ばれぬ事は知つて居るが、孫の愛に引かされて出かけて行つた。時刻は午後三時頃だつた。

今日の天氣では大丈夫と思ひの外、不意の襲來に嫁は殊の外狼狽した。何だか慌てゝ炬燵から飛んで出て、「アヽ姑さま此のお寒いのに好くお見えになりました。サアまあ何うか此方へ」と今日に限つてお客さま扱ひにし、急いで座敷の方へ通さうとした。

「ナニ最う此處で澤山ですよ」と姑は炬燵に近く座を占めた。

「イエ何うかまあ此方へ！」と嫁が座敷へ火鉢を出す間に、明けて三歳になつた可憐孫が、炬

燵の蒲團を卷つて何か見せやうとする。「はてな？」と何氣なく覗いて見ると、嫁が無理に自分を座敷へ通さうとするのは讀めた。今ヌク〳〵と炬燵に入つて食べかけて居たらしい西洋料理の皿が三皿、おとなしく蒲團の下に隱れて白い息を吐いて居た。

姑は淺間しく思つたが、見ぬ振をして座敷へ通つた。斯んな事も珍らしく無かつたが、この嫁は遂に內政の任に堪へず、二人の子まで成しながら其の後離別されたと云ふことである。

（九）金を欲がる人

世の中には明けても暮れても金ばかり欲しがる人がある。

ドツ來いそれは問題に成らぬ。今日の世の中に一人たりとも金を欲がらぬ人間があるか。併しそれも程度問題で、こゝに言ふのは義理も人情もお關ひ無しに、たゞ〳〵己れの懐に掻き込まうとする强慾非道な人間を言ふのである。

勿論人間は慾には離れ切れないもので、「泣く泣くも好い方を取る形見分」とか云ふ位であるが、それにしても一面に於いては、人間としては亦多少は物の哀れも知らねば成らぬのもである。

さも無くして人間が、たゞおのれの欲一方に固つた日には、親に食はせるのも惜しいであらう、子に着せる物も無駄なやうな心持がするであらうが、世間の人は悉く皆左樣では無い所を見ると、人間は强ちに慾ばかりに生きるものでは無くて、少なくも半分は情に生きるものである。

所が世には義理も人情も顧みずに、たゞ己れの慾ばかりに生きやうとするやうな不心得者も亦少なく無い。

一例を擧げて見やうならば、或る地方の者で東京に出て、高利貸を始めた者があつたさうな。高利貸と云へば、ちよつと世間普通の人間には出來難い離れ業である。何となれば高利貸の生命は冷酷無慈悲な點にあつて、多少涙のある者には人の喉を縛つて置いて、その背中を叩くやうな事は出來ぬからである。

さて其の男は高利貸でもして、おのれの慾心に滿足を與へやうと云ふ位の人間であるので、他人に無慈悲なばかりでなく、おのれの親に對してまでも殘忍であつた。この男が高利貸をやつて居る眞中に、國元から母親が見物がてら會ひに來た。

世間普通の者であれば、「アヽ、おツ母さん好くお出で下さつた！田舍などに歸らうより何うか

最う東京でお暮しなさい。吾もおかげさまで何うにか遣つて行けるやうに成りました」と云ふのが普通の人情であるが、この男は左樣でない、母親が來ると顏を顰めて、「マア上れ」とも言はなかつたが、母親は直ぐ歸る譯にも行かず、二三日厄介に成つて居た。

悴は其の夜仕方無しに飯を出したが、彼は其の時母親の御飯を食べて居るのを見て、「ア、惜しいもんだ、東京で飯を一椀食はるれば幾らに當るが」と心で積つたさうである。

親に食べさせる物を惜しがる位の了簡の奴であるので、この畜生は東京で終に四拾萬圓高利貸で金を拵へた。所が後がうまくは行かぬ。夜はうツかり外に出かける事も出來ぬやうに成つたので、そツくり其の金を持つて國に歸り、家藏を建て列べて我が鄕黨に誇る積りであつたが、土地の人はおろか身內の者まで一人も寄り附かぬ。

其處で一寸お古い語を拜借致しますが、「天に口無し人をして言はしむ」で、土地では誹言ふと無く彼を罵り、

「彼の野郎は東京で高利貸をして人を泣かせて金を拵へて來たさうな、彼奴の爲にや死んだ人が幾人もあるさうな、アンナ奴を此の村に置くのは土地の穢れだ、畜生闕はぬ擲つてやれ！」

村人擧つて憤り、夜中は此處でも大きな石などが飛んで來るので、家も屋敷も其儘にして

村を立退いたさうである。

人道を無視し、たゞ金ばかり欲しがると、得て斯んな結果に成り易いものである。人間の幸福は斷じて金錢ばかりには無い。

結論は何時も同じ所に行くが、斯んな人間に使はれると、散々痛い思ひをしなければ成らぬ。また過つて斯んな人間を使ふと、屹度帳尻を胡麻化される。また斯んな人間と仕事を共にすると、屹度此方の生血を吸はれる。御用心〳〵。

（一〇） 近所の噂に日を暮して居る女

世には誠に閑な女が居る。ナニ閑な譯ではない。人の家に何かなすべきことのないと云ふ道理があらうか。爲せば爲すべき仕事は幾らでもあるが、斯んな女には、飯を炊いて子を產む位が精一杯の働きである。

朝飯を濟して主人が何處へか勤めに出かけて行くと、膳も片付けずに直と子を負つて表へ出て立つて居る。

誰か顏を知つた人が通りかゝると只では通さぬ。暑さ寒さの挨拶を切掛けに屹度餘計な話を

仕かける。斯んな女は氣味が惡い。臆病らしく四邊を見廻し何か一大警報でも傳へるやうに近寄つて來る。

勝手を知つた人になると、「ソレまた始めるな」と警戒し、好い加減にして逃げやうとしても顏を見たが最後逃さない。さも親しげに耳に口を差寄せて、「マア家のお隣ぢや大變でございますよ。世間では不景氣不景氣と言つてる中に去年の暮何處からか大層お金が入つて來ましてね、押し詰つてから急に大工が入る、疊屋が入る、植木屋が入る、お風呂場が出來るやら物置が立つやら、お餅も澤山お搗きになる、お酒も菊正の菰被を一本お取りになる、呉服屋が切々とお出入する。不景氣知らずでございますの。マア眞個に好いわねえ！」

「マア結構ですね！」

今日はこれから皆さんで演劇にお出かけ成さるんでございますよ」

「貴女も御一緒に行らツしやいな。歌舞伎の春狂言は好うございますよ。私もう見て來ましたの。早いでせう。オホ、、、」

冷かして行つて了つた。物足りなく思つて居ると、また通りかゝつた。得たりかしこしで、

「お寒いぢやありませんか、何方へ？」

「ちよいと其の邊まで……」

「貴方の前のお家ぢや女中さんがお腹が大きいと云ふぢやありませんか」

「へエ、私存じませんよ」

背中では子が咳嗽をして居つてもお關ひなしに、態〻人を引止めて下らんことを密々と喋つて居る。これもまた好い加減にして行つて了うと。相手欲しげに今度はそろ〳〵歩き出して、垣根越に近所の臺所の樣子など覗いて廻る。この中に何處かで相手を見付けて話し込み、飽かれて家に戻つて見ると、この節は日が短かいので最う正午になつて居る。朝飯の膳は未だ其のまゝ茶間に所在なく出て居る。長火鉢の火は何時の間にか消えて了つて內は何となく物淋しい。

斯んな女は子供にも連合にも垢だらけの着物を着せて、女の癖に自分も裾に襤褸を下げて居る。髪には白く埃を溜めて首筋は黑く汚れて居る。夕方夫がさも寒さうに顫へながら戻つて見ると、家は極めて不秩序で、何となく空家にでも入つたやうな氣持がする。希望もなければ趣味もなく、慰安もなければ生氣もない。最う光も點れやうと云ふのに、夫の顏を見た後始めて、

「良人少し此の子を見て居て下さいましな、夕御飯の準備を致しますから……」

世には斯うした女も居る。

（一一）酒ばかり飲たがる人

世には無暗と酒ばかり飲みたがる人がある。明けても酒、暮れても酒、雨が降つてるからと言つては飲み、天氣に成つたからと言つては飲み、不幸があるからと言つては飲み、慶事があるからと言つては尙飲み、氣持が惡いからと言つては飲み、身體の調子が好いからと言つては飲み、金が手に入つたからと言つては先づ飲み、懐が淋しいからと言つては自暴自棄に成つて飲み、忙しいからといつては飲み、閑暇だからと言つては飲み、景氣が好いからと言つては飲み、不景氣で困ると言つては又飲み、細君の御機嫌が好いからと言つては好い氣に成つて飲み、また左樣でないからと言つてはふて〻飲み、客が來たからと言つては客をダシにして飲み、歸つた後では獨りで飲み、淋しいからと言つては飲み、賑かだからと言つては踊つて飲み唄つて飲み跳ねて飲み、明くる日は頭が痛いと言つては迎酒を飲み、昨日の酒は好くなかつたからと言つては飲み直し、好かつたからと言つては又大いに飲み、その他日常萬事に就けて、手に杯を抱へねば承知せぬ。

斯ういふ人は酒を己れの生命にして、何かに就けて飲まう〳〵と苦心することは、丁度金ばかり欲しがる人間が、人の家の不幸に際しても、誠にお氣の毒さまでございますと言ひながら其の不幸に就け込んで「オヤット來た私が行つて參ります」と眞先に飛出し、早桶代の棒先でも切つて若干か隱然と己れの懐に入れやうとするのと同じことである。實に至れり盡せりで、何か事あれかし、何うかして飲まう〳〵と苦心する。

世には昔から「酒乞食」と云ふ語がある。斯う云ふ人間は親讓の身代も忽ちにして飲んで了ひ、自分の物も飲んで了ひ、遂には嬶の褌まで飲んで了ふやうなことになる。最早自身の力では飲めなくなると、勢ひ「酒乞食」に成らざるを得ない。「酒乞食といふのは人の酒を貰つて飲むのである。人間も此處まで墮落して來ると、最早人間の資格はない。人が酒を見せると、丁度犬が魚の骨を見せびらかされたやうに、それこそ忽ち尾を掉づて、イヤ形ばかりは人間だから尾はあるまいが、鼻をヒク〳〵動かして近附き、杯を頂いて空世辭を言ひながら、嬉しがつて貰つて飲む。その心の中の卑しさは、實に沙汰の限りである。斯う云ふ人間は何處へ行つても卑しまれ、何處でも鼻を摘まれる、實に因果なことである。

斯う云ふ人間は假令身に立派な藝能を具へて居つても、決して立身出世は出來ぬ。況んや身にこれといふ能力もない者に於いては申すまでもないことである。酒故には昔から身を亡ぼし

家を亡ぼし、中には國を亡ぼした人達さへもあるが、これは實にさもありさうなことである。

何故かと云ふと、酒を以て己れの生命とするやうな者は、宿酔、梯子飲、その外何んなことでもやる。斯ういふ人間は酒にかけると、自己の大切な職業は愚か酒の前には生命も關はず差出して、酒さへ見れば朝好し晝好し夜も好し、その間間何時も好しと云ふ事に成つて、時も場合もお關ひなしに飲む。だから斯う云ふ人間には規律もなければ秩序もなく約束もなければ責任もない。同時に金もない藝もない世間の信用もないと來ては、その人間は最う首でも縊るより外には道がない。酒故に身を亡し家を亡ぼし國を亡ぼす原因は、全く此處に在るのである。

無暗に酒ばかり飲みたがる人間に仕事を頼んだり、仕事を共にしたりして居ると、實に飛んだ事になる。斯ふ云ふ人間が酒を見ると酒の前には如何なる大事も忘れて了ふ。自分の事まで忘れて了ふやうな人間で、他人の爲に忠實に盡しさうな道理が無い。だから斯う云ふ人間は誰も信用しなくなる。即ち酒故に我が總ての物を奪はれて自分で自分を罪むるやうなことになる。

（一二）近所隣に迷惑をかける女

近所隣に迷惑をかける女と云ふのは、前に擧げた近所の噂に日を暮して居る女の一種で、それより遙に念の入つた、質の惡い女である。

斯う云ふ女は實に迷惑千萬なもので、何か近所隣の人に向つて仇をせう仇をせうと、間が暇がな心がけて居るやうに見える。

近所の女中が前を通つて居ると無理に呼び込み、いやだと言ふのに無理に菓子の一ツも遣つて、

「お前さんは眞個に好く働きますね、お給金はお幾ですか」

「貳圓五拾錢頂いて居ります」

「それは又馬鹿にお安いぢやありませんか。この節は何處でも女中が少なくて、幾らお安くても四圓や五圓は當然ですよ」

婢は虚然釣込まれる。

「左樣でございますかね、未だ好く東京の樣子が分りませんので・・・・」

「私が好い所へお世話をして上げませうか」

「ハア若し好ささうな所がありましたら何うか」

「有りましたらちやない今現にありますが行つては何うです？　初めから直に五圓とは行かないまでも、四圓は屹度出しますよ。月に五拾錢違つても大きいです。今の所では全くね・・・・」

「左様でございます、月に五拾錢違ひましてもね。ちやア何時から向ふさまへ上られませう？」

「今夜にも何とか巧く言つて暇を取つて出てお出でなさい。私が直に連れてつて上げますから」

「ちやア何分何うか宜しくお願ひ申します！」

此方では好い女中を雇つて喜んで居ると、それが急に暇を取つて出て了つたので早速差支を生じて來た。この節はおいそれと云つては代が無いので、誠に困り切つて居ると、內證で人を困らせて置きながら此方では笑つて居る。殺生な話である。

實に妙な癖もあつたもので、方々で此の手を遣らうとする。次には又或る家の女中を無理に呼び込んで、前の手で誘惑しかけて見る。すると今度は勝手が違ふ。

「私は別にお給金には望みはありません。私共の御主人は好く撫恤つてお使ひ下さいますので何時までもお世話さまに成らうと私は思つて居ります！」

「それは感心な心がけですね。だが此節の御主人の御新切は當にやなりませんよ。全く何處でも女中さんが少ないですからね・・・。餘所さまのお噂をする譯ぢやないが、お前さん所の前の

女中さんも、初めは矢張お前さんのやうに言つてお居でだつたが、何うして何うしてお前さん所の御主人は、昔は彼で掏摸の親分までして來たさうですからね、虛言甘口に乘つて餘り力に仕過ぎると飛んだ目に遭はされますよ」

「へエー掏摸の・・・」

「女中さん達でも初めは優しくして手懷けるんが彼の人達の手なんですからね・・・」

「マア左様でせうか」

「お前さんは幾つですか」

「二十二になりました」

「それぢや何うです好い所があるが、お嫁に行つちや何うですか、最う早くはありませんよ」

「これも又到頭巧く口說き落して、碌でも無い所に嫁に遣つて了つた。その媒妁人は此處に出入する屑屋の老爺さんであつた。主家では急に女中を失ひ、此處でも又太く困つて居る。此方では罪な事をして置いて、獨りで嬉しがつて居る。實に厄介な女である。

（一三）酒癖の惡い人

序に最う一つ酒癖の惡い人を行かう。前には極端な飲酒家の例を擧げたが、今度のは左樣ではなくて、酒を飲めば直に發狂して、人に飛んでもない迷惑をかけたり、又は極めて不愉快な思ひをさせたりする人に就いて二三の例を擧げて見るのである。

不斷は好く働きもする、相當に役にも立つ、また信用もおける男でありながら一杯飲むときるで人變りがして、人に喧嘩を吹ッかける、腕を振舞はす、又は物を取つて投げるといふやうな人がある。これも實に又困つたもので、おのれの價値を大いに傷つける。

昔しから酒には三上戸あるといふが、これは實に左樣である。前に述べたやうな人は、おこり上戸に屬する人で、その中の最も忌むべきものである。

また不斷は別に厭味のない人でありながら、一杯飲つたとなると、妙に肩肘を張つて自分のことばかり褒め、他を貶す癖のある男がある。これも實に聞き辛いもので、同席して居つてもいやになる。

また一杯やると、好んで他の密事を發く癖のある男もある。

「イヤ誰は何う云ふことをした」

「イヤ某は今斯う云うことを遣つて居る」

これも實に好くない癖で、御本人は得意かも知らぬが、聞き手に依つては、實に其の人の腹の中が思ひ遣られるものである。

酒にも都合四十八癖あるといへば、實に色々な癖を有つて居る人があるだらう。中には此處にお話しをすることの出來ぬやうな癖もあらうが、其邊は先づお預かりにして置いて世には一杯飲ると、相手の如何を問はず、大言壯語して、おのれを誇る人がある。また不斷は何にも言ひ居ずに居つて、酒を飲むと、酒の力を拜借して、妙に人に突ッかゝるやうな人もある。その臆病さ加減と來てはお話しにならぬ。議論をするなら素面で來い！金を借るなら銀行に來い！戰爭をするなら大砲で來い！男子には此の意氣が欲しいものである。

世間には又何うかすると、一杯飲めば客の前で、盛んに嬶の棚おろしを始める癖のある男がある。それこそ客は好い迷惑、折角の御馳走も誠に興の覺めるものである。

また一杯飲むと、苦しい金の札びらを切つて、家に歸れば借金取が詰めかけて、細君は頭痛膏を張つて惱んで居る事も打忘れ、酒の景氣で、

「ヤア皆來い〳〵、アトはおのれの懐ろが知つて居る！」

妙に大盡がつて、それからそれと梯子酒などを飲み廻り、醉の覺めた後は青くなつて、「ア、

馬鹿なことを遣つた」などゝ後悔する者もある。成程これは馬鹿である。

また酒を出すと馬鹿に尻の長い男がある。不斷は能く物を辨へた人でありながら、酒の前には時間を無視し、家人の迷惑を察せずに、夜の深けるまで飲みつゞけ、臺所の隅に箒を立てられるなどは、餘り感心した癖ではない。

また一杯飲むと男の口から散々泣事を言つて、果は細君の色の黑い事まで歎き、御念入に手巾を出して、涙を拭き〳〵矢張口には盛んに飲む男もある。斯んな男と同席しては、實に酒の味も無いが、これは三上戸中の泣上戸族に屬するもので、餘り陽氣な癖ではない。

また一杯飲むと、馬鹿に不平ばかり言ふ男もある。それかと思ふと酒を呑みながら、餘計な苦勞をする男もある。

「君來年の作物は何うだらうか。君百年後の日本は何うだらうね、我輩は實に痛心の至りに堪へん！」

これも亦實に妙な癖である。酒は狂人水で、これを餘り飲み過すと、何んな謹慎深い者であつても、兎角おのれの腹の底の見はれ易いものである。人の交際の圓滿を保たうと思ふ者は、斷じて酒癖を見はしてはならぬ。慎しむべき事である。

（一四）子供の喧嘩に飛出す女

自分の家の飼犬が喧嘩に負けても腹の立つのは人情である。況んや可愛い我が子が餘所の子供に酷い目に遭はされては、親として腹の立つのは道理である。

併し子供は何方も頑是ないものだ。餘所の子が家の子供を苦めるなら、優しく諭して仲好く遊ばせるのが大人の分別である。此方の取るべき道である。假令何んなに腹が立たうと、大人が子供を相手に取つて爭ふのは非理である不法である。

然るに世には氣の暴い女が居る。子供の喧嘩と言へば直に飛出す。若し此方の子供が泣されでもすると、「何故家の子をそんなに苦めるのだ？」と言つて、口汚く罵しるばかりか女だてら餘所の子供に手を加へる。すると向ふにも親がある。向ふでも我が子が可愛から默止つて居らぬ。果は大人同士の喧嘩になる。實に馬鹿々々しい話である。斷じて眞面目な沙汰とは言へぬ。

或る所に斯うした女が居る。その家の子供が又至つて弱蟲の泣蟲で、その上意地の悪い事がおびたゞしい。近所の子供達に惡まれる。此方で舌を出して見せてもヒーと泣く。誰も泣蟲泣

々と言つて居る。

その癖この兒には盜癖がある。或る時餘所の子の獨樂を盜んだとか云ふので、その子も怒つて取返さうとした。

例に據つて泣出した。子供の事だから容赦はせぬ。泣いても闘はず其の子の袖に手を突込んで、無理に獨樂を取返さうとした。一方では返すまいとヒー〳〵泣く。

母親が其の泣聲を聞きつけて、早速表に飛出して來た。譯も聞かずと我が子を庇ひ、何故そんなに苦めるんだ?」と言ふが早いか相手の子供を力任せにドンと俯向に突倒し、おまけに頭を三ツ四ツ强く張飛した。

大人には敵はない。その子はワツと泣出した。突倒された拍子に强く擊つたから、鼻血がタ〳〵流れ出した。

女は知らぬ顏をして側に立ち、猶口汚く罵しつて居た。

一方には近所の人が其の親に知らせた。一度や二度の事でないので、父親が血相變へて飛んで來た。かねて其の女を憎んで居る近所の人達も飛んで來て二人の周圍に集まつた。忽ち親と親との物爭になつた。

女は減らず口を叩いて

「家の子を酷い目に遭せるから突退けたが何うしました?」

相手が女であるので一方は猶穏やかに出た。

「たゞ突退けた丈で斯んなに鼻血が出ますかい?」

「此方の知つた事ではない。他にそんな言掛を言ふ暇で家の子供に氣をお付けなさいよ」

男は腹に据ゑかねた。ズツと近寄つたと思ふと、女の頰の碎ける程打擲り、ドンと其處に突倒し、振向いて睨みながら我が子を連れて歸つて行つた。皆笑つて止めもせず、「好い氣味だ」と思つて見て居つた。心柄だ、是非がない。

(一五) 責任を避ける人

世には已れの責任を避けて仕事をしやうとする人がある。責任を避けるといふのは、矢面に立つて働かずに、他人の身體の蔭に身を隱して、うまい仕事をしやうとする人のことである。これは實にコスイ人間で、その心事の陋劣さは、てんでお話しにならぬ。

斯う云ふ人間は態度が常に曖昧である。何事にも飄箪鮗を極め込んで、何んなことがあつて

も「宜しい、それぢや此の事は何處までも拙者が責任を負うて遣らう」と云ふやうな大丈夫的言語は用ゐぬ。而も何だか遣りたさうな心持は見える。

そんな場合に此方が一本突ッ込んで「それぢや君が責任を負うて遣るかね、何うだ」と迫つて其の男の眼を見ると、ニヤリ笑つて眼を外す。即ち自分で責任を負うて遣る勇氣はない。

其處に一人の毅然たる大丈夫が現はれて、「宜しい然らば拙者が遣らう、遣る以上は何處が何處までも責任は此方で負ふ、斷じて諸君に御迷惑は及ぼさぬ」と云ふことになると、前の飄箪鮟屋は大いに此方の爲に盡すやうな顏をして、その仕事に關係する。さうして事の成就した時は福音の分前に與からうし、若し失敗に了つたならば、「拙者は別に深く關係したことでもなかつた」と云ふやうな顏をして空嘯いて居る。

元來、自分が進んで責任を負うて、矢面に立つて働くといふことは損である危險である。第一非常に骨の折れることである。だから世の飄箪鮟屋は、なるべく責任を避けるやうにして、自分はこれを以て人間處世の要を得たものと考へて居る。併し斯んな旗色の不鮮明な人間に大事の出來さうな筈はない。怜悧者のやうで其の實馬鹿の怠惰者とは、何を隱さう此の種の人間を云ふのである。

人間は進んで正直に矢面に立つて、自分で確と責任を負うて事に當るやうな人間でなければ、斷じて人にも信用されねば、また仕事も出來るものでない。

見込は誰にも多く外れ勝のものである。否、當る方が寧ろ異數である。人間の見込が一々當つた日には、おそらく世界中に失意な人は一人もあるまい。

見込の當る當らぬを恐れて、人間が一々責任を避ける日になると、人が來ても虛然と飯も出せぬといふことになる。萬一客に出した物の中に毒でも入つて居らうものなら、それこそ實に飛んだことになる。併し家人が出來得る限り注意して客に侑めた物である以上は、假令その中に毒が入つて居つたにしても、それを咎めるのは客の方が無理である。それでは主人の好意を全く無視するといふことになる。併し意外の出來事は仕方がないとして、事に粗略の無いやうに存分に注意して、客の食物の調理に從事することは、主人の最も大切なる責任である。この責任を無視しては、決して好意を以て客を遇する人とは言はれぬ。

責任といふ詞は、決して「出鱈目」又は「無鐵砲」の別名ではない。責任を避けるのは宜しく無いからと言つて、「ヨシ來た、ヨシ來た」で受け込むのは、實に危險千萬な話で、その結果たるや前に言つた飄箪鮟屋先生よりも宜しくないことになる。そんな柄にも無い無責任なこと

をするよりも、卑屈ながらもまだ前の瓢箪鯰屋を極め込んで、幾らでも人のお慈悲に與かつた方が安全でもあり、人に迷惑を及ぼすことも少ないと云つたやうな形になる。

其處で責任を負うて、矢面に立つて働らかうと言ふ場合には、非常な確信を有つて懸らなければならぬ。それでも何か不時の障害に出會して、萬一事の破れた時、「何うだ、いかなかつたぢや無いか」と言つて、此方を責むる人があるとすれば、それは丁度最上の好意と準備とを以て客を遇した食膳に意外な事のあつた時、「これは何うも怪しからん」と言つて、主人を咎めるのと同じことである。

人間は責任を避けるやうではいかん。進んで責任を負うて事に當り、その責任を何處までも完うし能ふやうにならねばいかん。これは骨が折れるからと言つて成るべく責任を避けて、人の袖のかげで仕事をして一生無事に過さうと云ふやうな卑屈な人間は、斷じて人の上に立つて人を統率するやうには成り得ない。それは丁度彈丸を恐れては眞の軍人には成り得ないのと同じことである。

若し人を使ふやうならば、責任を避けるやうな卑屈な人間は用ゐぬが宜しい。彼は斷じて此方の爲に誠意を盡す人間ではない。また人と仕事を共にする場合に於いても、斯んなズルイ人

間は避けるが宜しい。斯くの如き人間は利益があれば己れ一人の手柄のやうに言ひ、萬一失敗に了つた場合には、其の責任を此方ばかりに擦り附けて、己れは知らぬ顏をして居るズウズウしい人間である。斯んな質の人間は何時も上手に立廻つて居るやうではあるが、決して人の信用も得られなければ尊敬も得られない。同時に大した立身出世も斷じて出來ぬものである。

（一六）近所の人の身元調査をする女

矢張前の二人と同じ種類の女で、これは又一々根氣に近所の人の身元調査をして暮す女が居る。

何の家の主人は何縣何處其處の生れで族籍は何で年齢は幾ツで、職業は何で月給は幾ら、以前は何う云ふことをして居つた人で、その道樂は何で、何う云ふ人と交際して居る。細君の生家は何處で、年齢は幾つで、兄弟は幾人あつて、生家の生活向は斯うで、今彼の家には子供は幾人あつて、その子は幾歳と幾歳になつて、細君には餘所行の着物がこれ〳〵あつて、彼の家では月に八百屋物は何位買つて、魚屋や米屋や酒屋の支拂は何位ある。女中の給金は幾らで、

宿車にもこれ位は乘る。

また何の家の主人は何處の人で、彼は養子で、細君の兩親から學資を貢がれて世に出た人丈あつて、家では小さくなつて居る。今何處の會社に勤めて、毎日何んな仕事をして、月給はこれ位貰つて居る。細君の着物ばかり買されて、自分は何時も汚ない服を着て、滅多に電車にも乘らぬやうに節約して居る。その癖細君は今年もまた新しいコートを新調へた。主人は無口な人であるが、細君は丁度私見たやうな饒舌家で、おまけに機嫌買で、氣の向いた時は馬鹿に御機嫌が好い。「良人の服も大分ひどくなつたわねえ。一着お拵へなさいな」などゝ言ふが、未だ其の火照の冷めない中に、氣の風向が變つたとなると、直に夫の胸座を摑んで武者振り付く。それで男の癖に荒い聲一ッ立てず、固く平和主義を把つて縮んで居る。

總て斯う云ふことまで一々細かに立入つて穿鑿するのを仕事にして居る。何の家の内情でも透いたやうに調査べて居て何處か近所の噂が出ると、それは斯うだと說明して得意がり、人に舌を捲せるのを無上の愉快として暮して居る。實に氣の知れぬ女である。

そんなことに趣味を有つやうなら、いつそこれを職業にして、今日流行の女事務員になり、興信所か何處かの探訪員にでも行けば好いのに、この種の女は働くことは大嫌で毎日門に出て

立つて居り、男女老若の差別なく人を捕へて立話を遺つて居る。

去る所に此の種の女の一人があつた。その近所に妙齡の娘があつて、或る時おもひがけない所から人を以て緣談を申し込まれた。此方では媒妁人の人格を深く信じて居つたので、緣談はスラ〳〵進んで行つた。ところが結納を交換さうといふ間際になつて、貰ふ方から人を以て、「彼の娘には好くない蟲が付いて居るさうだから」と云ふことで、突然媒妁人の所に破談を申し込んで來た。

媒妁人は何方へ向いても顏出しが出來なくなつた。大いに怒つて段々穿鑿して見ると、實に飛んでもないことであつた。事の起源は貰ふ方で、媒妁人の人格を信ずると共に娘の性行その他も信じはするが、大事な事故猶内々人を以て娘の身元を調べて見ることにした。

このことを託された人は、「某の細君が彼の邊の家の内情には能く通じて居る」と云ふことを耳にして、早速その女に就いて娘の身元を内々探つて見ることにした。

飯よりも好きな話ではあるし、女は得意になつて述べ立てた。その中についい口が滑り過ぎて自分の想像說を加へたが、それは全く此方の感違で事實無根のことであつたが、これから嫁に行かうと云ふ娘に取つては大事な顏に燒鏝でも當てられたやうな大創になつた。處女の純潔な

節操は汚ない血汐を以て塗られたことになつて了つた。

それ故の破談と聞いて媒妁人も慍り兩親も慍り、早速その家に直接談判に出かけて行つて、「何を證據に娘に瑕瑾を付けたか」と嚴重に詰問した。勿論その時調子に乘つての出鱈目であつたので、女はグウの音も出なかつた。亭主諸共平蜘蛛のやうになつて謝罪つた。後で夫は大いに慍り散々手痛い目に合せた。これで懲りたかと云へば懲りぬ。相變らず近所の內情を探つては、人に物知顏をして誇つて居る。世間には隨分厄介な女も居るものだ。

（一七）無暗に事を引受ける人

世には何でもお需めに應じて無暗に事を引受ける人がある。無責任も實に甚だしい。併し、斯う云ふ人に話を持つて行くと、實に惚々する程口當りが好い。或る一人の男が來て、

「先生何處か私を使つてくれる所はありますまいか。實は目下浪人して太く弱つて居りますが」

「イヤそりや幾らもある。早速好い所にお世話をしやう、時に月給は當分の所百圓位で我慢が出來るかね！」

「イエ百圓は愚か、下宿料丈貰へれば結構です！」

「ヨシ承知した！明日にも話を極めて置かう」

「何うも有がたうございます！」

歸つた後に又一人遣つて來る。

「先生、私も長く流浪して居りましたが、今度まあやつと金山を發見致しました。何處か好い金主はありますまいか」

「イヤそれはある、幾人もある！」

「小さく始める積りですから最切は澤山の金は要りません、四五萬圓もあれば結構です」

「宜しい承知した！誰にか早速出させよう」

「何分お賴み申します！」

「安心してお居でなさい！」

また遣つて來た。

「先生、何處か嫁は一人ありますまいか」

「イヤ嫁ならば幾らでもある！諸方から賴まれて困つてる」

「それぢや何うか好ささうなのを、一人お世話は願はれますまいか」

「宜しい承知した！今夜早速話をして置く」

「ちやア何うか何分宜しくお賴み申します」

また來る。

「先生何處か下婢はありますまいか下婢は！急に今までの奴が飛び出して行つて困つて了ひます！」

「イヤ幾らもあるよ」

「ちやあ早速お話を願れますまいか」

「宜しい承知した！今夜にも君の方に遣るやうに然う言はう」

「何うかお賴み申します！」

「宜しい受合つた」

斯う云ふやうに、何でもお手輕に引受ける人に物を賴んで安心して居ると、それこそ飛んだ事になる。自己の責任を何處までも重んずる人であれば、オイそれとお手輕に、決して事を引受けるものでは無い。

人間は一度人から賴まれて承諾した事は、何處までも成し果して、賴んだ人に滿足を與へ、

「彼の人は實に親切な人だ、彼の人は確かな人だ、彼の人が引受ければ何事も大丈夫だ」といふ信用を人に置かれるやうで無ければ、人は斷じて人に重んじられる事は出來ぬ。

これに反して責任を無視し、受合ふは受合つたが、何人に對しても約束を實行せぬと云ふ事になると、「イヤ彼奴の言つた事を當にして居ると大變だ、君にも似合はぬ何と云ふ迂濶な話だ！」と他の人の信用まで傷つけさせるやうな事になる。人間が斯う成つた日には、何處へ行つても人が相手にしなくなる。人間が人間から棄てられた時は、最早飯の上つた時である。

何でも宜し〳〵で無暗矢鱈に輕く事を引受ける人には事を賴まぬが宜しい。また無暗に安受合をして來るやうな人間は使はぬが宜しい。また斯んな肌合の人間と仕事を共にする事は危險である。此方の信用も終には棒に振つて了ふやうな事にある。不斷餘り安受合をして世の人に迷惑をかけて居ると、偶に本氣で引受ける氣に成つても、人が信用しなくなる。それは丁度人が不斷餘り貧乏ばかりして居ると、偶に青い紙を持つて居つても、「イヤ危險だ、彼奴のは贋札かも知れんぞ」と、世間の人に疑はれるのと同じことである。

（一八）夫おもひの女

夫を思はぬ女はあるまい。皆おもふには違ひ無いが、さて眞に夫を鼓舞し、夫を慰藉し、能く其の家事家政を取締つて、内助の功を歴々と擧げて行く女は案多少ないかも知れぬ。

其處に行くと矢作君は良い妻君を有つた。君が渾身仕事の人として常に愉快に働くのは因つて來る所がある。君の細君を見ては誰も皆感心する。感心せずには居られない所がある。全く完き妻女である。或る一人の友人が矢作の細君は、何う云ふ母親に育てられた人だらう？その母親と云ふ人が今も世に居るなら是非一度會つて見たい！」と言つたのも有理な次第である。

人は容易に人の事は褒めぬものだが、君の細君は何人にも褒められる。それには何か深い仔細が無くてはならぬ。君等夫婦の間には既に五人の子供がある。皆未だ手のかゝる最中だが、君の細君は小婢一人使ふ程の資力も家に無いかと云ふと、既に少なからぬ貯金も有つて居るさうである。小婢一人も使はぬ代りに君の細君は何時も襷の武裝を解いたことがない。

その家庭は何時行つて見ても秩序整然として一糸を紊さぬ。何時何んな客があらうとも細君は驚かぬ慌てぬ。時分時であれば心持好く物も出すが、總てに好く行屆いて客に不快な感を與へず、夫の面目を毀損せぬ。

何事にも、身分に過ぎた贅澤はせぬ。住居や衣服や食物にも整然と統一が保たれて居る。つま

り入るを計つて支出する捉が嚴守されて居る。君の内政の紊れぬのは、全くこれが爲である。而も其の衝に當るのは君自身では無くて君の細君である。

君の細君に就いて佳話がある。或る時妹が訪ねて來て、「姉さん私はお召の着物を一枚買はうと思ひますが、何んな柄にしたら好いでせう」と相談した。

「お高いお金を出して、熊々お召の着物なぞ買つて何にします？」と姉さんは問ふた。「着るわよ」と妹は笑つた。「そんな物を着なければ生きて居られませんか」と姉さんは又問ふた。

「生きて居られない事はありませんが」と妹は又笑つた。姉さんは感心せぬ顏をして、「それぢや贅澤品ぢやありませんか。失禮だが和女の家は未だ新世帶で、贅澤品よりか萬一の場合には貯金の方が必要ぢやありませんか。必要でないお金を使つて、身分に過ぎた綺麗な着物を着ると云ふ事は、取りも直さず其丈自分の夫を弱味に陷れるのだと云ふ事を能く考へて見ないと、女の道に背く事になりますよ」と言つた。同じ血を禀けた此の婦人の妹丈に「姉さん實際ですね！」と感じて餘計な着物を買ふことを思ひ止り、その金を銀行に預けたと云ふことである。

妹は今年芳紀十九、去る青年農學士の細君である。姉さんは言ふまでも無いが、姉の一言に忽ち其の心を翻へし、した妹も天晴見上げた女である。

この一言に依つても君の細君の平生は何人にも略想像することが出來やうが、君の細君は日常萬事に亘つて、常に我が夫の身を强くするやうに强くするやうにと考へて居る。イヤ徒考へるばかりではない、一々實行して居るから偉い。

負債が出來ては夫が活動仕辛くなる。即ちそれ丈夫の身が弱くなる。これに反して貯蓄が出來ると夫は活動仕易くなる。即ちそれ丈夫の身が强くなる。

君の細君は早くから此處に意を留めて居つた。だから夫の收入に伴はぬ支出は斷じてしたことがない。身分に添はぬ贅澤な支出は固くこれを禁じて、必らず夫の收入以内で其の生活を立てゝ來た　イヤ收入以内で生活を立てゝ來たばかりでない。少なくも其の内の二割づゝは、これまで必らず貯蓄して來た。

君が月給を取つた翌日は面白い。細君は必らず銀行の通帳を示して、

「何うか確りお勤め下さい。今月は良人は又貳拾圓丈お强くなりました！」

矢作君は細君の愛に渾身潤うて晩餐のお膳に向ふ。向つて見ると質素な中にも何か知ら一品位は、屹度君の口に適ふ物がある。君は喜んで箸を着け、勇んで飯碗の數を重ねる。

「何うか確りお勤め下さい。今月は良人は又貳拾圓丈お强くなりました！」

矢作君も腹の立ちさうな道理はない。

「ウン左樣か」

「サアまあ御飯を召食れ！」

石炭を惜んで汽車が走るか、食物を減して人間が働かれるか。

君の細君は能く此の消息に通じて居る。無闇に金を溜めやうとする愚な細君になると、一日奮闘して來た夫に芋の煮ころがしより外食はせない。つまり夫を乾し殺すやうなことをする。近頃神經衰弱の男が世間に多いのは、一ツは全く細君の情操的觀念が乏しいからである。若し神經衰弱と云ふ文明病、イヤこの惡むべき野蠻病に、若し神經衰弱菌と云ふ黴菌が居るとしたならば、それは即ち此の種の細君菌である。この菌の原名は、「シワンボー菌」又は、「ケチンボー菌」とも云ふさうだ。世の生活難の激しくなるに連れて、この菌は殖ゑるので、別に「セイカツナン菌」とも云ふさうだ。

併しながら、細君としての常識に達し、心情に饒んだ矢作君の細君の心には、斷じて斯う云ふ病菌は居ない。贅澤は一切省いて退けるが、大事な夫の身體を養ふ丈の支出には相當の金をかけて惜まない。君の健康の健全に保てるのは、一ツは全く此の爲ださうだ。

その被服の如きも贅澤な物は着て居らぬが、何時も瀟洒した服裝をして居る。勿論君も無駄

錢は使はぬが、假令月末にならうとも、君の衣襲に小使錢の絶えるやうなことはない。萬事とも斯う云ふやうに細君の注意と手當が屆くので、君には何時も活氣がある。强い人として世に立てる。眞に奮鬪して自己の事業に大成せんと欲する男兒は、斯うした細君を有ちたいものだ。

（一九）知らずに知つた振りをする人

世には何にも知らぬ癖に、何でも知つた振をして、それで自分は勝いと誤解して居る人がある。

斯う云ふ人は、盲蛇に怖ぢずで、人中に出ても兎角知つた振をしたがつて、相手の如何を見ずに臆面なく口を利くので、斯う云ふ厄介者と同席して居ると、側で實にハラ〳〵思ふことがある。何故かと云ふと斯う云ふ質の男になると、藥物學者の前で藥物の話をし、鍛冶屋さんの前で鞴の構造を批難し、哲學者の前で宇宙萬有を談じ、船長さんの前で海圖の講釋をし、富豪の前で致富の要訣を說き、お坊さんの前で三世因果の理法を語り、子の一ダース以上も產んだ婦人の前で、產前產後の注意を述べるやうなことになり易いからである。

斯う云ふ人間は實に物騷である。斯んな人間の言つたことを虛然信用しやうものなら、それこそ何んなことにならぬとも限らぬ。或るところに何にも碌に知らぬ癖に、何でも心得て居るやうな振をして口を出す男があつた。ところが世の中は又色々なもので、そんな男の言つたことを信用するお人好もあるに至つては、眞に驚かざるを得ない次第である。

お話は色々に變るが、或る一人の俄か分限殿が、趣味も糸瓜も無い癖に、人の眞似をして骨董品を集め始めた。先づ陶器から先に集めやう、成るべく古い形の變つた物が欲しいといふので、暇さへあれば諸方に出かけて搜して居ると、或る古道具屋の店の隅ッこに、頗る古さうな而も形の極めて珍なる物を發見した。

大將大分お氣に召し、「ホウこれは古さうな物があるな、而も餘程形が變つて居る！」と言つて、手に取つたのは圓い陶器で、妙な所に穴が一ッ開けてあつた。大將これを眺めること半時許り、色々に考へて見たが何うも分らぬ、終に閉口して主人に向ひ、「これは大分古さうな物だが、全體何に使ふ物であらう！」と問うて見た。

道具屋さんなどは人が惡い。「サア皆さん左樣おツしやいますが、餘りお古いので、手前には目が屆きません！旦那お召し下さいませんか、思ひ切つてお安くお負け申します」

「幾らだな！」

「左様でございますな、先達てお客さまに參圓に附けられましたが、貳圓にお負け申しませう」

「何うだい、壹圓五拾錢ならば道樂をしやう」

「實は手前の買が壹圓五拾錢でございますが、宜しうございます、お負け申して置きませう、また何分御贔負に願ひます！」

ヨシ來たで早速買ひ、大切に風呂敷に包んで、持つて歸るは歸つて來たが、何に使ふものやら一向分らぬ。

ところに何でも知つた振をしたがる男が遣つて來た。

「ヤア今夜は！」

「ア、入らツしやい！大分暫らくでございました」

「最う本年も押詰りました！」

「左様でございます！」

「エ、貴下は近來大分お古い物をお集めのやうに承はりましたが、何かお珍らしい物がお手

に入りましたかな！」

「イヤ何う致しまして！」

「少々拜見を願ひたいもんですな！」

「別にお目に懸けるやうな物も手に入りませんが、實は今日妙な物を一ツ買つて參りましたよ」

「ホオ、ぢやア是非何うか拜見させて頂きたいもんですな！」

「ぢやア一ツ御鑑定を願ひませうかな」

其處に丁度女中がお茶を持つて來た。

「オイ〳〵裏の座敷へ行くとな、床の間の上に風呂敷に包んだ物があるから大切に抱へてお出で、陶器だから氣を附けてな！」

「はい、畏まりましてございます！」

女中はそツと抱へ來て、下に置く機勢に轉げ出した。主人は肝癪持だと見えて、

「コレ氣を附けんか、この貴重な物を割つたらお前何とするの！」

「何うも相濟みません！」

「これでございますがな！」

「成程！」

「大分古い物のやうに見受けます！」

客は直に持前の知つた振をして、

「これは餘程時代物です！」

「全體何處燒でございませう？」

「左樣――瀨戸、備前、イヤ左樣でない。これは確かに南蠻です！」

「ヒエ、、、」

「實に結構な物です！」

「何うも貴下はお目がお高いなア！」

「陶器などは、これで中々分らんものですよ」

「イヤ大きにな！時に先生、これは何に用ひる物でございませう？」

「左樣、色々用ひ方はありますが、まあ普通の使用法は花器でせうな！これに寒牡丹か、水仙でも惡くない。何か一寸花を入れて、お正月に床脇若くは違棚の上にお置きに成りました

ら、それこそ數寄者は涎を垂しませうなア！」

主人は膝を打つて、

「成程！」

急いで女中を呼んで、

「早く御酒の用意をしろ！イヤこれは好いことを敎へて頂きましたわい！ぢやア早速正月に使ひませう」

「私も御年始がてら是非拜見に出ます！」

主人は大いに喜んで、暮の內に早速寒牡丹を取寄せて、右の珍器に挿し、整然と塗板を臺にして、裏の新築の座敷の床に飾り附けて眺め、

「好いなア、如何にも好いなア！」

實に大滿足であつた。年は明けて新年と相成つた。多少骨董趣味のある者が年始に來ると、無理無體に引ッ張り上げて裏の座敷に通して屠蘇を出す。その度毎に主人は直に花器の方を見て、

「如何でせう、彼んな惡戲をして見ましたが……」

物の分らぬお客さまは、「成程變つた花器でございますな！」と言つて行くが、少し眼の開いた人間に成ると、誰も彼も同じやうに皆驚いて、「やア！」と反り、「成程隨分惡戯を成さいますなア！」と言つて歸る。

主人は譯は分らずに、「ハテ何奴も此奴も驚いて行くわい、こりや好い物が手に入つた！」と喜んで居つた。元日は濟んで二日の日になると、好く物を辨へた主人の叔父に當る人が年始に來た。一番叔父を驚かして遣れと言ふので、早速裏の離座敷に案内した。

「叔父さん如何でせう、一寸變つた物を手に入れましたが……」

「ア、これかな？」

「左様でございますよ」

褒めると思ひの外興を覺し、

「何だ、これは漏瓶の把手の取れたんぢやないか。正月早々縁起でもない、早く何處へか打棄つて了ひなさい！」

「エーッ、そんなことはないでせう！」

「整然と此處に手の取れた跡があるぢやないか、巫山戯るにも程がある。早く打棄つて了ひなさい！」

「成程然う聞けば漏瓶のやうでございますなア！畜生め、何にも知りもせぬ癖に南蠻も莫もあつたもんぢやない」

知りもせぬ癖に濫りに知つた振をすると、自分一人が恥を搔くばかりでなく人にも飛んだ迷惑を及ぼさねば成らぬやうなことになる。斯んなことは笑つて濟むが、濫りに知つた振をすると、後で取返しの附かぬやうな損害を人に及ぼすことがある。總てのことに口を出して、何でも知つた振をしたがる人と見たならば、決して信用せぬが宜しい。そんな人間の言ふことを虚然信用しやうものならば、漏瓶を花器にして人に笑はれる位では治まりの附かぬことになる。

（二〇）常に夫の勢を殺ぐ女

前のと反對に、世には常に夫の勢を殺ぐ女がある。勢ひを殺ぐと云ふのは取りも直さず弱めることである。その心がけ其の行ひの如何に依つて、夫の身を強くさせると弱くさせるでは其處に太した相違が出來る。

何うすれば我が夫が強くなるかといふことは、既に前にも述べた通り、少しでも夫をして有

利な地位に立たしめることである。おなじく働くにしても、人間は有利な地位に立たなければ、骨ばかり折れて効果が擧らぬ。おなじく石を打付けるにしても、高い所から投げるのと低い所から高い所に投げ上げるのでは、ただ骨の折方の違ふばかりでなく、その効果に於いても亦著しく違つて來る。

眞に我が夫の身の爲を思ふ者であるならば、我が夫をして少しでも有利な地位に立たせるやうに、常に工夫し實行することが肝要である。日常萬事に亘つて此の工夫實行の無い者は、斷じて內助の功を完うすることは出來ぬ。夫は外に出て切ツつ斬られつして働いて居るのに、內を預かる妻にして、「今日は寒いから」と言つて炬燵にヌク〳〵手足を溫めて居るやうな女には斷じて內助の功績を擧げることは出來ぬ。

然るに世には人の妻たる身であつて、この邊には頓と心も力も用ひて居らぬ女が居る。自分は夜を日に次いで働きながら生涯生活に追はれて居るやうな不幸な男は、おそらく斯うした不心得千萬な女房を待合せた人に違ひない。

この種のズボラな女になると、自分の夫は月に五十圓しか貰つて居らぬ人と知りながら怠け放題に怠けて居た上に、食べたいと思ふ物を食べ、着たいと思ふ物を着、見たいと思ふ物を見

經費一切お關ひなしで、實に無責任極まる生活を遣る。月末の仕拂日になると、何處にか穴が開かねばならぬ。

今月の米屋の支拂を參圓殘した。魚屋にも貳圓殘した。八百屋その外にも拂ひ殘して月を越した。來月も亦おなじくと云ふやうな始末にならずには居られない。斯うして段々無理押に押して一年通すと、主人は知らぬ間に年末には大穴が開く。

主人は小言を言ひながらも女房の開けた穴ならば埋めぬ譯にも行かぬ。泣面をかいて無理な金策をして、やつと埋めた形にして大晦日を越したは好いが、その爲一方には高い利息の附く借金が百圓出來た。而も一方には前年度の支拂殘りが新しい通帳の最初の行に明々と殘つて居る。斯うなると前後に借金の出來た形になる。

これも一年間丈ならば又何とか跡始末も附かうが、斯うして二年三年五年と無理に進んで行く中には、年々負債が溜つて行つて、主人は首が廻らぬやうに成つて來る。

男も斯うなつた日には誰を見ても頭を下げねばならぬやうになる。男が出入の米屋酒屋にまで頭を下げるやうになつては、決して强い人間とは言はれまい。人に向つて言ひたい事も言へぬ。斯うしたいと思つても出來ぬ。その爲いやが上にも逆境の深みに沈んで行つて、終には

手も足も出なくなる。斯うして滅ぶる人は世間に多い。

我が大事な夫をして此處に到らしめた者は誰か。「ア、全く自分の至らぬ爲であつた！」と、その場になつて思ひ着いても最う遲い。徒らに生活を飾ることを以て生命として居る今日式の女性には、斯うした女も少なくない。

（二一）知つて知らぬ振をする人

世には又知つて知らぬ振をして居る人がある、此方は至つて無事である。出過ぎて耻を搔いたり、又は人を過まつたりするやうな憂ひはない。

總じて善く物事を心得ぬ人間に限つて、兎角出しや張つて知つた振をしたがるものであるが、「良賈は深く藏めて虛しきが若くす」で、善く物事を心得拔いた人に成ると何事も深く腹の底に藏めて、決して知つた振なぞはせぬものである。

歌聖素聖法師、倜中の消息を詠うて曰く、

そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀨にこそあだ波は立て

と。實に最う此のお坊さんの言はれた通りである。知らずに知つた振をする程見辛く聞き辛い

ことはないが、知つて知らぬ振をして居るのは、誠に殊勝にして奥床しく見えるものである。

何一ツ滿足に心ても居らぬ癖に、餘り知つた振をして、調子に乘つて喋り過ぎると、心の奥行が冬の林のやうに空き渡つて見えるので、「ハアこの男の腹は空だな！」と、直に此方の人物の內容を見透される。斯ういふ腹の淺い人間では山が利かぬ。直に此方の胸の兵數を敵に見拔かれるからである。

これに反して知らねば知らんで默つて居れば、非常に得な場合がある。昔、或る儒者の子息に馬鹿があつた。或る時父の塾生共と同行して、父が門下の一人の家に遊びに出かけた。その家は名家であつたので、色々珍らしい書幅など取出して一同に見せた。書生共は我れ先にと或は讀み、又は詩や書の品評を下す中に、先生の子息さんだけは獨り群を離れておとなしく坐りそんな物には見向きもしなかつた。主人は其の落着いた態度を見て大いに褒めた。同時に自分の子息に諭した。

「アヽ、流石は先生の御子息さんだけあつて違つたものだ。少しも知つた振などは成さらぬ。お前も學問をするからには彼樣なければ成らぬ。實に彼樣あつて欲しいものだ！」

その實先生の子息は馬鹿で、讀まうにも讀むことが出來ぬので、獨り離れて退物に成つて居

たのであつた。總て世の中は斯うしたもので、知らぬ事は默つて居ると、そのため却つて人から重々しく見られることがある。

いくら人に重々しく見られても、御本人樣が何にも御存じなくては問題に成らぬが、眞に知つて知らぬ振をして居る人は、いざといふ場合に臨んで、物に動ぜぬ人である。斯う云ふ人は己れに信頼する所があるので、如何なる場合に遭遇しても、おのれの智識を活用して、斷じて人におくれは取らぬ。また事を遣つても充分に遣り果せるものである。

斯う云ふ人には事を頼んでも、又は使つて仕事を遣らせても、先づ以て安心して居ることが出來る。何となれば、斯う云ふ腹のある人は、萬事に就けて心を用ひ、決して非常識なことは遣らぬからである。何事にもあれ知らんで知つた振などをするよりは、知らぬ事は知らんで人に糺すが宜しい。さも無くして、濫りに知つた振をして、自分流儀で事を遣ると、火を消す爲に石油を打ツかけたやうな結果に兎角成り易いものである。斯う云ふ非常識なことをする人間には何にも頼まれぬ」と云ふことに成つては、最早その人は廣い世間にも立場の無い時である

お話は少し横丁に入り過ぎたが、以上を要するに、知らずに知らぬ振をして居るのは馬鹿である。また知りもせぬ癖に、無暗と知つた振をしたがるのは生意氣である。知つて知らぬ振を

して居る人にして、事は始めて共に談ずべきである。

（二二） 夫に不快の念ばかり起させる女

夫は外征の勇士で妻は家庭の女王である。外征の勇士が一日の戰鬪に疲れて夕方戻つて來たならば、妻は迎へてこれを撫恤り、好く慰めて疲勞を脫かせ、また勇しく翌日の戰線に立たせなければならぬ。妻の任務は此處にある。

然るに世には妻の任務を盡さぬばかりか、朝から晩まで夫に腹を立てさせて、その戰鬪力を殺ぐやうな不心得千萬な女が居る。過つて斯うした妻を持合せた男は終生浮く瀨がない。實に氣の毒なものである。

斯う云ふ女は朝起立てから膨れ面をして居る。夫は朝からうんざりする。夫は面白くない。腹が立つ。此方もつひ大きい聲がしたくなる。

「オイ未だ飯は出來んか？」

默止つて居る。

「愚圖々々してると今朝も亦後れるぞ！」

「今炊いて居りますよ」

夫を睨みつけて慳貪に言ふ。此方は舌打して、

「仕方の無い奴だ」

默つて居れば濟むものを、何處までも氣持を惡くさせやうとする。

「私見たやうな者は何うせ仕方がありませんよ。仕方の無いものと思つて居て下さい！」

緣起でもあるまいに、朝から噴嚏を買つてかゝる。此方は其の性質を知つて居るので蟲を殺して居る。此方が讓れば向ふも折れて機嫌を直すかと思へば左樣でない。いやが上にも夫に腹を立てさせぬ事には承知が出來ぬ。實に因果な性分である。何かぶつ〳〵言ひながら手暴く其邊に膳を出して、

「サア早く食つて下さい出來ましたよ」

御飯一ツ裝つて出すでも無く、先づ一服と女の癖に自分は長火鉢の側へ行つて煙管を取る。夫は妻の行屆かぬのにむか〳〵しながら、御飯を食べる。此方は知らん顏をして見て居る。朝からまるで夫婦睨合の形である。今日も忙がしい仕事を持つて居る夫はくさ〳〵して遣り切れぬ。此方も何とか言ひたくなるのは人情だ。

「オイ煙草は後でゆツくり喫むとして、乃公が飯食つて居る間に服でも出して置いたら好いだらう。

「出て居りますよ」

いかにも冷たい挨拶だ。夫は急いで御飯を食べて服を着る。手を添へて遣らうともせぬ。帽子を被つた、鞄を抱へた。早く此の厭な我が家を出やうと思つて玄關に出て見ると、今朝も未だ靴が出て居ない。

「何をして居やがる事か」

また夫を慍らせる。出て行つた後では何が悲しいか泣いて居る。夫は夕方疲れ切つて歸つて來る。家の近くまで歸つて來ると、また何んな顏をして居るかと苦痛になる。互に噴嚏面で居るのも面白くないので、此方が折れて機嫌を直して歸つて來る。がらりと格子を引開けて、

「オイ戻つたぞ！」

返事をせぬ。

「居ないのか」

不性無性に出て來て、

「お歸んなさい」

朝の不機嫌を未だ其儘顏に見せて居る。夫は又うんざりして、茶を一杯飲まうと云ふ氣にも成れねば、口を一ツ利かうと云ふ氣にも成れぬ。毎日これぢや男は續かぬ。

（二三）早合點をする人

世には又早合點をする人がある。これは心に落着が無くて、何時も氣の浮いて居る人である。斯う云ふ質の人は、常に自分の骨折が徒勞に終る事が多い。また人にも飛んだ迷惑を及ぼす場合が少なくない。それ故常に失敗だらけで、何うも物事が甘く行かぬ。さうして人には「彼の周章者が」と言はれる。實に損な話である。

斯う云ふ人は實に甚太しくそゝッかしい。昔から好く話にもある通り、時と場合に寄ると、自分の家と隣の家を取違へて飛び込むやうな事も稀でない。

「オ、寒い、オ、寒い！」と顫へながら物に怖ぢたスッポンのやうに首を肩の間に埋め、「オイ今戻つたぞ、飯は出來たか飯は……、早く何か食はねば遣り切れん飯を出せ飯を出せ、オイ〳〵」と門前から呼んで歸つて見ると、細君が風でも引いたか寢て居る。

大將慍るまいことか、忽ち烈火のやうに成り、「この寒いのに何で寢て居る。裸體に成つて飛んで廻れッ、一日稼いで來た亭主に飯の用意もして無いと云ふ法があるか。そんな事で嬶の役目が濟むと思ふか。この不性者出て失せろッ！」と言ひも終らず蒲團を引ッ張いで打ン擲る。細君は悔りして、

「貴下何を成さるんですお門違ひですよ」

「お門違ひも糞もあるか。おのれ亭主の聲を聞き忘れたか間抜め！」

散々亂暴を働いて居ると、聲を聞きつけて隣から驚いて飛んで來た。

「コレ良人何を成さるんですよう！マア何でも宜いから此方へ入らッしやい、後で此の申譯は私が致します！」

大將無理無體に引ッ張れて行きながら恐れ入り、「何うも奥さん毎々お手數をかけて相濟みません。でも内の妻が餘り横着が過ぎますからな……、默つて居れば好い氣に成つてまだ夕飯の拵へもして無いやうな始末です！其處に行くとお世辭ぢや無いが、奥さん貴女などは見上げた方です、眞個に私も貴女のやうな！細君を持ちたいなヒ、ン」

「良人何をおッしやるんです確り成さいよ。此家が良人のお家で、良人の見上げた此の私が良人

の女房ぢやありませんか。マアお隣に暴れ込んで、彼んな亂暴を成さつて、私眞個に何うしたら好いでせう」

言はれて氣が附き、「オツト違つた。イヤ詫には乃公が行かねば濟まぬ！また駈出して行つては宜いが、右隣で散々亂暴をして置いて、今度は左隣に行き、腰を屈めて手を揉みながら

「何うも奥さん只今は何とも申譯がありません、何うかまあ御主人に内々で、今度の所は最う一度丈御勘辨を願ひます」

「オヤお隣の旦那何う成さいました。」

「オツトこれは又違つた！」と云ふやうな事になる。

斯う云ふ人に物を頼むと、半分聞いて直に飛び出す。

「早田君、一寸使を頼まうかね・・・・」

「畏まりました！」

「ア、、最う行つて了つた！用事も聞かずに彼の男は何處へ行くんだらう、慌てるにも程がある。

笑つて居ると途中から果して飛んで歸つて來て、「只今のお使は何處へ行くんでしたらう？」

斯んな男に限つて、實に頓馬な事を遣る。夜中に細君が少し大きな屁でも落すと、ひよいと目を覺して枕を上げ、入口の方に向つて、「何方です、只今開けますよ」

女中が寢屁を垂れても恂りして眼を覺し、「はい承知しました！」などゝ言ふ。お話は知らず〳〵下卑て參つたが、この種の人間の一人が東京の町を大至急で歩いて居ると、俄に便通が催して來たので共同便所に飛び込むと、既に一人お客さまが入つて居つた。そんな事にはお關ひ無しに無理無體に割込んで御用を濟し、後の清潔法を行ふ段になると、裏門がお隣合せに成つて居つたので、お隣の方を紙で拭き、此方の方は自分の腕で拭いたさうである。

人が隣にお歳暮を持つて行くのを見て、

「ヤアこれは何うもお早々と有がたうございます！此方からこそ早く伺はなければ濟まないのでございますが」など言ふものも、先づ此の種の人間より外には無い。

斯う云ふ人に事を頼んで安心して居ると、婚禮の席に出て弔詞を述べ、葬式の場に行つて四海波を謠ふやうな事になる。決して安心はして居られない。

（二四）上手に夫の機嫌を取る女

夜の明けたのも知らずにスヤ〳〵と眠つて居ると、白い柔かな手が寢卷の肩にかゝつた。それと同時に、

「モシ良人、最うお眼さめになりませんか」

「ウン」

返事はしたが、未だ溫かい寢床が戀しい。

「起きて御覽なさいまし、まあ好い聲で鶯が鳴いて居りますよ」

「左樣か」

優しく言つてくれるのは嬉しいが、今朝は何だか未だ眼が澁い。氣の邪見な細君なら其儘打棄つて置くか、さも無ければ手荒く蒲團を引剝ぐかする所だが、この種の細君になると、決してそんな事はせぬ。

「起きて御覽なさいまし、快い氣持でございますよ。起して上げませうか」

後からそつと頭を抱へて起す。斯うせられてはいかな寢坊も起きざるを得ない。起きて茶間に出て見ると清潔に掃除した後に御飯の用意が出來て居り、長火鉢には火が入つて鐵瓶の湯も沸いて居る。障子を開けて臺所に行つて見ると、流しには黃金のやうに磨き上げた眞鍮の金盥に湯がたつぷり取つてあつて、タオルも出て居る揚枝も出て居る。コツプに含嗽の水まで整然と汲んである。

細君は襷掛の姐さん被り、夫が手水を使ひ髮など梳く間に床を上げ、座敷を清潔に掃除する。掃除して暫く障子を開けて置くと、早春の朝の空氣が入つて來て汚れた空氣と入代る。

夫は手水を使つて來て、長火鉢の前に坐ると、朝の清い空氣に觸れた爲に氣が生々する。成程何處かに鶯の聲が聞えて居る。細君は側に來て、今朝の空より晴々とした顏を見せ、

「お早うございます、今日も亦好いお天氣でございますね！」

「ア、好い空合だね！」

「サアまあお茶でも召食れ！」

ゆツくりと朝茶を飲んでお箸を取ると、側に附いてゝお給仕をする。御飯の工合もお汁の加減も眞に好く夫の口に適ふやうに出來て居る。

御飯を食べて一服喫ひ、「サアそれぢやぼつ〳〵出かけやうかな」と思ふ時分には座敷に整然と服が出て居る。すつぽり脫いだ寢卷は直に疊まれて、服を着るにも半分は手傳つてくれる。持つべき物を持つて玄關に出ると、帽子を持つて先に廻り、障子をスツと開けてくれる。沓脫

の上には整然と磨立の靴が揃つて居る。靴を穿けば帽子を渡し、

「行つて入らッしやいまし御機嫌好う！」

門の潜戸を開けて出るまで見送つて居る。これでこそ女房を持つた甲斐はある。斯うした妻を持合せた夫は全く家庭が懇しい。夕方勤務を終つて我が家に向ふ足は燈心よりも輕い。

既に我が家に近附くと、何と無く嬉しい樂しい。早く歸つて見たくなる。朝夕夫に斯う云ふ愉快な氣持をさせる女でなければ、夫は其の日の生活に疲れて奮闘力が鈍つて來る。

（二五）妻君本位の人

世には細君本位の人がある。細君本位の人と謂ふのは何事も皆細君の思召に從つて行動する鼻毛の伸び過ぎた人を言ふのである。

男の癖にそんな間抜が世にあるかと、一概に否定するのは誤つて居る。そんなお人好は、世に一人もありさうには思はれぬが、事實は全く反對で、萬事細君の御意見を伺ひ奉つた上でないことには、金錢は勿論手も足も口も顏も出さぬやうな人が少なく無い。

そも〳〵夫婦は一心同體のもので、夫婦互に精神の共通を有して居なければ、決して眞の夫婦

とは謂はれない、夫は夫妻は妻で其の考へが別々に成つて居つては、その家庭は萬事圓く行きさうな道理はない。

されば男の胸の駈引一ッで遣らねば成らぬことの外は、細君の意見も一應糺いて見たが宜しい。イヤこれは必ず一應糺いて見るべき筈のものである。併しそれも程度問題で、餘りに御念が入り過ぎると、滑稽に陷り物笑になることがある。總じて斯う云ふことは理窟で彼此言ふよりも實例を擧げた方が勝負が早い。

「オイ〳〵今夜は猿目さんの所に呼ばれて居つたが行かうか行くまいか」

「行つて入らッしやい」

「ぢやア行く事にしやう。オイ〳〵何を着て行かうかな」

「着物を着て行らッしやい」

「それは分つてるが、何の着物を着て行つたら宜いだらうな。誠に相濟まんが何うか一寸出しておくれよ。また何時かのやうに箪笥の抽斗を引ッ掻き廻して叱られると困るからな……」

「ぢやア此の襦袢と、この下着と此の綿入と此の羽織を着て行らッしやい」

「有がたう、有がたう、この寒いのに態と立せて何うも氣の毒だつたな。時に土産は何うしや

うね」
「土産なんか要るもんですか」
「でも向ふは此前二度も相當な物を持つて來て居るよ」
「向ふは何うしやうと向ふの勝手です。此方は此方の勝手にして差支は無いぢやありません か」
「それは左樣だが少し義理が惡いな」
「少々義理は惡くても得が行けば宜いぢやありませんか、こんな時にでも少し息を吐かなくちや遣り切れんぢやありませんか。良人は元來幾ら月給を取つて居らツしやるんです？少しは世帶向の事を考へて頂かんぢや困りますよ」
「イヤ分りました、分りました、それぢやお前の言ふ通り土産は廢めます。時に何うだな今日は大分雨が降つて居るが、車で行かうか歩いて行かうか」
「歩いて行らツしやいよ。紙細工の身體ぢやあるまいし、雨位が何で怖いんです」
「ぢやア歩いて行く事にせうな。時に小遣は幾ら位持つてつたら宜からうね」
「ナニ小遣なんか要るもんですか、蟇口は私に預けて行らツしやい。持つてるとつひ蟇口の口

を開けたくなるもんですよ」
「イヤ大きに、全くだ！ぢやアこれを渡して行くよ。何時頃に歸つて來やうね」
「出た物を食べて了つたら直とお歸んなさい」
「ぢやア左樣しやう。最う徐々出かけて宜からうかな？」
「お出かけなさい。アヽ良人股引を穿いてお居で、せうね？」
「アヽ穿いてるよ。ソラ此の通り！」
「ぢやア尻を端打つて行らつしやい。さうすればハネも上らねば裾も切れませんよ」
「オツト來た。ぢやア斯うして行けば宜いな。時に小便をしたいが、家でして行かうか、向ふまで辛抱しやうか、何うしたら宜からう、何うしやうな？」
細君の御意見を伺ふのも、斯んな事ならば太した害もあるまいが、少し念の入つた事になると、それこそ忽ち大事件が出來する。それは何んな場合だと云ふと、早い話が斯んな場合である」
「オイ〳〵一寸來い！」
「何でございます？」

「マア坐れ、お前の考へを糺かん事にはな・・・」
「何う成さいました？」
「今こゝに手紙で、氷山さんからの相談だが、これは何うしやうな？」
「氷山さんから・・・、何か又うまい御相談でございますか」
「所が今夜のは左様でないよ。或る手違を生じた爲に、この暮は金に困るから來年の三月頃まで、是非五百圓許金を間に合してくれろと云ふ相談だが、何うしたもんだらう？」
「それは良人別にお考へに成る事は無いぢやありませんか」
「だつて何うする？」
「他さまからとは違ひ、何とかしてお間に合せなければ濟まぬ事は善く承知致して居りますが昨今の不景氣につれまして、私共でも非常な大手違で、實は此節毎日飛び廻つて居るやうな始末でございますから、何うか悪しからずと云ふ事にして、斷然と斷つてお了ひなさいよ」
「でも彼の人には隨分世話に成つて居るがなア！」
「馬鹿な事をおつしやい、人間が前の事を言つた日には一生頭の上りツこはありませんよ。昨日は昨日、今日は今日で遣つて行くのが當世ぢやありませんか」

「そりやまあ左様だな！」
「そんな時にや向ふを慍らせる位にこツぴどく斷るが宜いですよ。左様すりや二度と再び言つて來んかも知れません。彼奴は義理知らずだと慍る位に手紙で斷つてお遣んなさい！」
「成程、それも左様だな！」
「この節良人義理人情を言つて、何うしてお金が出來るもんですか。論より證據世間の金持は皆左様ぢやありませんか」
「全くだ、ヨシ來た左様せう！」
お話變つて又一人、細君本位の人があつて、
「オイ〳〵何うも病人が大層わるいさうだよ。一寸見舞に行かずば成るまいかね」
「知らして來ましたか」
「知らして來たよ」
「宜いぢやありませんか、生憎留守でございましてと云へば・・・」
「ぢやアまあ左様しやうかなア？」
「それで澤山ですよ。何うして良人、今日の此の忙しい世の中に・・・」

「オイ〳〵到頭死んだと言つて來たよ」

「へエ…そりや又大層思ひ切つたもんですね！」

「行かん譯には行くまいなア？」

「死んだ所に行つて見ても、お氣の毒さまでございますと極文句を言つて、線香の一本も上る位のものですよ。それよりか生きた羽振の好い人の所に行つて、お世辭の一口も言つた方が得ですよ、お廢しなさいまし、行けば香奠の一圓も懸るぢやありませんか」

「左樣だな、ぢやアまあ御免蒙らうよ」

萬事斯う云ふ工合に成つて來ると、その男は段々世間が狹く成つて此方の身の榮えて居る間は差支へんにしても一旦過つて躓いたが最後、手足を酷く引捩れた蟹のやうに成つて、最う何とする事も出來なく成る。世に其の例は幾らもある。

併し絶對に細君の言ふ事を聞くが惡いと言ふのでは無い。前に擧げたやうな細君の言ふ事を一々聞いて守るのは善くないが、善良なる細君の言ふ事を能く聞いて守る人は、その爲世間の義理張も缺かず、また家事その他も調子好く行つて大いに我が身を起し、また家を興す事がある。要するに大切は事は細君の意見のみには從はず、男子は男子の常識に訴へて判斷する

事が肝要である。さも無くして萬事細君の、イヤ宜しく無い細君の思召ばかりに從つて事を遣ると、後で必ず後悔する時があるに違ひ無い。心すべき事である。

（二六）夫に恥を搔せる女

二人の男がひよいと出會つた。

「ヤア！」

「オ、これは…。先日は出まして、何うも大變御馳走さまになりました！」

「イエ何ういたしまして…」

「太くお寒いことでございますな！」

「左樣でございます、何うも此の兩三日は太く感じます！」

「今日は何方へ？」

「一寸御方角まで參りましたが、つひ向ふで長話をしましたんで、今日はお訪ねもいたしませんでした」

「併しまあ如何です、お急ぎでございませんなら、一寸お立寄り下さいませんか。私も只今歸

るところでございます」

向ふは遠方の人、最う彼此夕飯時でもあるので、無理に家に誘つて來た。ところが細君が喜ばぬ。茶を一杯出すにも愚圖々々して居る。客の相手をして居る主人は氣が氣でない。話中途に幾度か立つて臺所の方に遣つて來ては、「オイ何を愚圖愚圖してるんだな、早く何うかしてくれんぢや困るぢやないか。何はおいても早く酒を出すやうにしてくれ、斯んな寒い晩に何時までも、客に寒い思ひをさせて置いちや不可ぢやないか」と小言を言ふ。

主人は座敷に歸つて、いろ〳〵話を仕掛けて時を移して見ても酒が出て來ぬ。手を鳴して見ても返事がない。終に堪り兼て又此等に來て見ると細君が居らん。自分で炭取を持つて來て、火鉢に炭をつがねばならぬやうな仕合、全く以て赤面する。

最う我慢仕切れないと云ふ時になつて、辛く唐紙が開いたと思ふと、餘り御機嫌の好ささうにも見受けられぬ細君の顏が見えた。夫はホッと息を吐くと、細君はお膳に一ッ天丼を戴せて出し、

「何にもございませんで……」

夫は默止つて居られない。

「オイ初めからそんな物を差上げても仕方がないぢやないか。お酒は何うした、お酒？」

「生憎今夜は切らしまして……」

主人は穴にも入りたくなる。主人よりお客の方で居堪まらぬ。

「イエ今夜は少し取急ぎますので御酒は頂戴致しませぬ。それぢや早速これを頂戴致します」

巧く調子を合せて逃げるやうに行つて了ふ。サア主人公は遣り切れぬ。最う其の人には顏が合せ辛くなる。併し此の種の細君になると、おのれの都合を主にして夫に散々赤恥を搔せても平氣で居る。夫にまるで同情がない。そのために夫は段々世間が狹くなるので、物の道理を嚙んで含めるやうに言つて聞せても世間の事情が分らない。何んな大事な客が來ても同じ調子で待遇つて居る。幾度諭しても分らぬので、夫は自分の面目を保つためには、客を餘所に誇つて行つて、つひ餘計な散財もせねばならぬやうなことになる。

（二七）細君に使はれる人

萬事細君の仰せを承つて行動する人の外に、世には又生涯細君に扱き使はれて滿足して居る男もあるが、これも亦實に因果な話である。

例を擧げて見れば、晝間は外に出て一生懸命に働いて來て、晩から朝にかけては家に居て、最も忠實に細君の御用を勤めて居る。世には昔から「嬶孝行」とか云ふ詞があるが、それは或は此の種の人の別名かも知れぬ。

お人好の旦那どのは、辨當腹で夕方テク〳〵歸つて來た。格子を開けて、

「今歸つたよ」

炬燵に入つてヌク〳〵と溫まり、男と女の痴々繰話しか書き得ぬ小說家の書いた姦通話を聖書よりも有がたがつて讀んで居つた嬶どの〻横着さは何うであらう。最う歸つて來る時分だと待つて居つてお歸りなさいとも言はず、

「良人上に上らない中に、何か少し買つて頂戴な、今日は何うしたんかお腹が空いて仕やうがないの」

「オツト來た行つて來よう、何が好いかい？」

「燒芋でも好いわ！」

辨當箱をおツ投り出し、風呂敷丈片手に掴んで飛び出すのを呼び止めて、

「良人、それから序に、夜のお菜に牛肉でも少しばかりね……」

「ア、好し〳〵」

程なく歸つて來て、芋の包を炬燵の櫓の上に置くと、「マア良人も一ツ召食れ」とも言はず、

「直にお米を磨いで置いて頂戴な」

『ア、直に磨ぐよ」

服を冷たい着物に着換へて何時もの通り臺所に行つてシヤキ〳〵磨る。すると落語家の言ふ通り、

「良人、その白水の濃い所を棄てないで置いて、一寸私の腰卷を漬けといて頂戴な」

「ア、宜いよ」

「良人最うお米を磨げて？ぢやア直に御飯を溫めて、その後で今の牛肉を煮るやうにして頂戴な」

「最う遣つてるよ」

「お漬物を忘れないやうにね、私糠味噌なんかいぢると手が荒れるから……」

「ヨシ〳〵！」

悉皆お膳拵をして、炬燵の傍に持つて來て、先づ細君に御飯を裝つて遣り、甘いの辛いの

言はれながら自分も傍で頂戴する。それから又後を片付けて、朝のお汁のお味噌まで摺つて置き、

「サアこれで最う用事は濟んだ！」

始めて炬燵に入らうとすると、細君は苦痛に堪へぬと言ふやうな顏をして、

「何うして私は斯んなに肩が凝るでせうね、今夜は我慢仕切れないわ！」

「ヨシ〳〵、ぢやア少し手を溫めて又肩を揉んで遣らう！」

朝はまた先に起きて御飯を炊き、起きれば直に食べられるやうにして置いて、炬燵に火まで入れて遣り、そつと寢かして置いてテク〳〵出て行く。日曜には朝早く髮結を呼びに行く。

「良人、髮が出來ましたから、一寸お湯屋を覗いて來て下さいな。最う女湯が入れるでせうか」

「オイショ！」

尻輕く飛んで行つて來て、

「最う入れるよ」

ゆツくりお湯に入つて來て、

「良人今日はお天氣が好いから留守をして頂戴な、私少し出かけて來ますから……」

「ア、好し〳〵」

これぢや男も助からぬ。おのれの嬶に生涯斯うして扱き使はれるやうな人間は、世間に出ても人に活地なく使はれて居る。妻を愛するのは男子の權利であるが、斯うまで嬶に甘く成つては男の光は少しも放たぬことになる。所が下層社會の人ばかりで無く、上流の人に成ると未だ〳〵太い「嬶孝行」のお人好が多いさうな。さうして人の前では大きな顏をして居る。何處までお芽出たいのやら常識では判斷が出來ぬと云ふ事である。

（二八）夫に花を咲せる女

客の種類や場合の如何を考へず、不作法千萬なことをして、大事な夫の顏を潰すやうな無考な女が居るかと思ふと、世には又何處までも心を用ひて、夫の身に花を咲せるやうな感心な心掛を持つた婦人も居る。

こゝに某と云ふ一人の男がある。彼は仕事も相當に出來るが、以前は友達仲間でも評判の吝嗇家であつた。その遣方が如何にも野卑なので、彼の友達は誰も愛想を盡して、自然と彼を疎んずるやうになつた。そのため人より出世の仕方も遲かつたが、彼自身は其處に氣が着かず

に居た。兎に角人から厭がられて、獨り除物にされて居た。

卑吝な男のことであるので、妻帶すれば費用が澤山かゝると云ふことを太く怖れて、男は三十二三になつても、安下宿の二階にごろ〳〵して居つた。さうして此の月は幾ら貯金が出來たと獨り潛に嬉しがつて居た。

青い柿でも時節が來れば自然と紅く色附いて來るものだ。何うした時の機勢であつたやら、不斗したことから此の男が妻帶することになつた。つまりは紅く色附く時節が遣つて來たので自分も男一人に生れて來た因果には、逃げたくとも逃げられぬ時節が來たのだ。

世の中は何もそんなにくよ〳〵したことはない。斯んな男でも幸ひ女に棄てられず、勝れて良いお嫁さんが頗る安直に手に入つた。何んなお嫁さんであつたかと云ふと、緣は異なもので彼の妻には不似合な程、美人で而も愛嬌に饒んで居た。まだ好いことには太く苦勞して來た女で、能く世態人情に通じて居つた。

この女が彼の妻となつて一緒に暮すやうになると、彼が四圍の境遇は何時とは無しに一變して來た。これまでは濕つぽい暗い所に獨り淋しく住んで居る人間のやうに見えて居たのが、おひ〳〵明るい賑かな男に成りかゝつて來たのは實に不思議であつた。

第一此の男の許に友達が繁く出入をするやうになつて來た。獨り、下宿の二階に轉がつて居た頃は、友達が遊びに來ても碌に茶も出さなかつたのが、世帶持になると茶を出す菓子を出す時分時には飯も出す、時に依つては酒さへ奮發するやうになつて來た。

併しこれは此の男が何か深く感ずる所あつて宗旨を改へた譯では無かつた。男自身は依然たる吝嗇家であつたが細君が左樣でなかつた。傍から好く氣を付けて、夫の友達を優待するのであつた。その爲夫は追々世間が廣くなり、始めて交際の趣味も感ずるやうになり、同時に人に交際する道も少しは解するやうになつて來た。友達も皆この男を褒めるやうになつて來た。

細君が此の男を此處まで導くには、初めは中々骨が折れた。人の知らない苦勞もした。例へば餘所に進物をせねばならぬやうな場合があつても、男は澁つて容易に金を出さうとしなかつた。

「それぢや幾ら位の物を持つて行く？」

「この節良人壹圓位の物は持つて行かなければ世間體が惡いぢやありませんか」

「ナニ壹圓だ？そんなに遣る必要はない！五拾錢位の物でも持つて行けば澤山だよ」

そんな場合には逆らはず、「ぢやア左樣致しませう」と言つて置いて、內證で夫の體面を損ぜ

ん丈のことをした。これがために夫は段々評判が好くなつて、以前とはまるで變つた立派な人になつて來た。全く細君のお蔭である。

（二九）細君に叱られる人

世には又絶えず細君に叱られて居る人がある。

「良人最う起きないと時間がありませんよ」

「未だ早いよ」

「早くありませんよ、最うお隣では御出勤に成りましたよ」

「コレ最少し蒲團を被せて置いてくれ寒いよ」

「そんな事をおツしやらないで、整然と時間通りに御出勤成さらないちやいけませんよ」

「だつて未だ眠いよ」

「活地の無い事をおツしやるな、そんな事で女房子が養へますか」

「養へなくても好いよ」

「好くありませんよ、早くお起きなさいね」

「オ、寒い〳〵、酷い事をしやがるなア！」

「サア早く顏を洗つて御飯をお食んなさい。マア煙草などは後の事に成さいよ」

「マアそんなに言はなくつても好いぢや無いか」

「好くありませんよ、良人のやうな能力の無い人は、切めては時間丈でもキチンキチンと出なければ、お使ひに成る仁が御迷惑成さいますよ」

「酷い事を言ふなア」

「ちツとも酷かアありませんよウ！ア、其處で又そんなに頭を搔いちやアお汁の中に頭垢が入るぢやありませんか。眞個に仕樣がありませんねえ！サア早く顏を洗つて、早々と御飯をお食んなさいよウ！」

顏を洗つて來て御飯を食べる。氣の勝つた細君の目には、お箸の持方からしてだらし無く見える。

「サアもつと早々とお食んなさい、最う二十分しかありませんよ。稼ぎ人は朝御飯などは立つて〻食べるやうで無くつちやいけませんよ」

「煩いなア！人間は何をする爲に生きてるんだ？」

「働く爲に生きてるんですよウ！」
「馬鹿言ふな、食ふ爲だよ。飯をくれ」
「オヤ未だですかい、最う好いでせう、此節はお米が高いですよ」
「だつて石炭を惜んぢや汽車も動かんぢや無いか」
「聞いた風な事をお言ひなさい。サア最う煙草など吸はないで、早々と服をお着なさい！良人それぢや襯衣が裏ッ返しぢやありませんか。見た所からして活地が無いね。だから良人丈は月給が上らないんですよ。霜を被つた菜葉ぢやあるまいし、男はもつとちやんとなさい」
「煩い奴だなア！」
靴を穿いてテク〳〵出て行く。
「ア、また帽子も被らないで……」
「ア、左様か」
「今日月給を貰つたら、其儘ズッと歸つて入らッしやいよ」
「來るよ。煩い奴だなァ！」
「眞個に世話の燒ける人だよ。また辨當も忘れてるぢやありませんか」

「ア、左様か取つてくれ……」
細君は無事に歸つて來れば好いがと思つて居ると歸つて來ぬ。ブウ〳〵言つて居ると、遲くにひよいと歸つて來た。
「今まで何處に何をしてたんです。サア月給袋をお寄來しなさい！オヤツ二十圓か入つて居ませんよ。殘餘の三十圓は何うしました」
「使つたよ」
「何に使ひました？」
「おれだつて、少しや小遣も要るよ」
「五十圓しか取れない男が、三十圓も小遣を使つて何うするんです！また飲んだんでせう？」
「飲みやしないよウ！」
「ぢやア何にしたんです？この月は不斷と違つて、小供の着物の一枚づゝも出して遣らなきあ成らない月ですよッ！」
「そりや知つとるよ」
「眞個に仕様が無いね、この人は……」

細君も少し口喧しいが、斯んな人間は生涯税は上らない。高給取にも斯んな人があるそうな。

（三〇）夫に友達を失はせる女

妻たるものゝ心がけ次第では、夫の運命が色々に變つて行く。

前に擧げた女のやうに、夫の運命を一變して幸運に導く女もあれば、これとは反對に我れ故夫の運命を破つて了ふやうな不心得千萬な女も居る。

こゝに又某と云ふ男があつて、この男の獨身で暮して居つた間は、太く友達仲間の評判が好くて、この男の許に一番多く友達が集まつたものであつた。

彼は誠に金錢に淡泊な男で、人に飲食させることを惜まなかつた。否、進んで人に飲食させることを喜び、また餘所に進物などするにしても、吝嗇れたことをするのは大嫌ひな男であつた。

皆その男らしい氣前に惚れ込んで、某と云へば友達仲間の幟利であつた。これには深い仔細のあることで、困つて居る友達には金も貸す、貸しても決して催促などはしたことがなかつた。

また物を遣る。遣つても決して恩に被せるやうなことはなかつた。だから人にも立てられて決して引けを取らなかつた。

ところが此の男が妻帶すると、何時となく評判が悪くなつて、「彼の男は女房持になつてからまるで人變りして了つた！あゝも變れば變られたものか」と皆眉を顰めるやうになつた。

妻帶したからと言つて、この男が急に吝嗇家になつた譯では無かつた。友達が來れば相變らず歡迎して、彼は連りに優待するやうに細君に勸めた。

併し細君の心が美しく無かつた。菓子を持つて來いと言付くれば茶より外出さぬ、酒を出せと言へば、何とか文句を列べて飯丈しか出さぬ。「誰の所に赤坊が生れた。切めては貳參圓が所も祝つて遣れ」と言つて金を渡せば、その内の貳圓はそつと自分の懐に入れて置いて、向ふへは精々壹圓位の物しか持つて行かぬ。

「友達の某が病つて居る。これで菓子折の一ツも買つて、お前が先に見舞に行つて置いてくれ私は會社の歸りに見舞ふ」と言つて金の貳圓も渡すと、「ハイ畏りました」と口では言つて置いて、向ふへは五拾錢位の物しか持つて行かず、殘る壹圓五拾錢丈は、如才なく猫糞を極め込んで知らん顏をして居つた。

その爲追々夫の評判を惡くして、次第に訪ねて來る人が少なくなり、以前とは打つて變つて夫はまるで孤獨の人になつて了つた。

何んな勝れた人間でも、人は一人では仕事は出來ぬ。友達に離れた彼は、誠に弱い男になつた。

「全く嫌の惡い爲だ！」

彼の友達は皆その妻を憎んで居る。

「實に好くない家内を持つた」

彼自身も今日では太く後悔して居るさうだ。

（三一）細君に心配させる人

世には又絶えず細君に、我れ故不安な念を起させる人がある。これも亦實に困つたもので、斯う云ふ人に連れ添つた細君は、一日として安心しては居られない。

何時も家を留守にして、毎日碌な事はして居ないので、内に居る細君は氣が氣でない。今日は又歸りが大分おそいやうだが、何處へか行つて花でも引いて居りはせぬか。今日は又何處へか

行つて惡い仲間と一緒に酒でも飲んで居りはせぬか。今日は又人と喧嘩でもして歸りはせぬか今日は又何處へか行つて强請詐僞でもして來はせぬか。その外毎日何かに就けて、一日として心の安まる暇はない。實に氣の毒なものである。

こんな人間は一歩外に蹈み出せば、何か必ず事件を惹起して來て、細君に何時もハラ〳〵思はせる。何うせ善いことはして來ぬ人と思ひながら、こんな男に連れ添つたが因果で、可愛子供を振棄てゝ今更何處へ我れ獨り逃げて行きやうもない。

偶に家に歸つて來る、意見がましいことでも言へば、直に打つ蹴る、髮を掴んで引摺り廻す夫ではない鬼である。

こんな人間は極端だとしても、既に妻子を控へた身の上でありながら、大切な職業を餘所にして、或は惡所通をしたり、又は酒に身を持ち崩したりして、細君に心配させて居る人間は、世に相當な地位を占めて居る人の中にも少なくない。

また無理な借金ばかり仕散して、詰らぬことに使つて了ひ、一方には食つた後の始末もせずに、自分は何時も借金取を逃げて居り、細君にばかり辛い言譯をさせて、おのれは毎日のらりくらりとして居るやうな者もある。

それかと思へば相當な手腕を有つて居りながら、毎日怠けて酒を飲み、太平樂ばかり列べ腐つて、盆が來やうが正月にならうが、妻子のことなどは氣にも止めぬ男もある。

或は又おのれ一人は思ひ切つて贅澤な生活をして、そんな身分でもない癖に妾などを外に圍ひ、一家族の食物を己れ一人が取つて食ひ、妻子の所には寄附きもせずに、細君一人に散々臘を煎らせるやうな薄情極まる人間も世間にはある。

また己れ一人は旅から旅に渡つて好きなことをして暮し、國に殘した妻子には三文の仕送もせぬやうな不心得者もある。こんな冷酷無慈悲な男に連れ添つた細君こそ好い迷惑で、毎日殆ど身の浮く瀬はない。

併し、總じて斯う云ふ質の人間は、何を仕やうと何處へ行かうと、決して人の信用は得られない。何となれば我が最愛の妻に對して、そんな獸的行爲をする者であつて、獨り他人に對してのみ人の道を全うしさうな道理はないからである。わが最愛の妻に對して「ア、酷い人だ、情ない人だ！」と怨まれるやうな事をする人間は、言ふまでもなく他人に對しては、おのれの慾望を滿す爲には、何んな無理非道なことでもやりかねぬものである。

人を用ひるにしてもこんな人間は使はぬが宜い使つたが最後、屹度此方の生血を吸はれるや

うなことになる。また斯う云ふ質の人間とは、斷じて仕事を共にしてはならぬ、斯う云ふ人間に限つて口先は如才ないものであるが、虚然それに乘らうものなら、それこそ此方の生命を棒に振るやうな結果になる。斯う云ふ人間と見たならば、觸らぬ神に祟りなし、上手に逃げて附合はぬが宜い、朝夕の挨拶をすることだけでも危險である。所が今日の世の中には、斯う云ふ質の人間が幾らも居る。實に油斷も隙もあつたものでない。

（三二）針の持てない女

男で文字が書けなかつたら嘸不自由な事であらう。女で針が持てなかつたらそれより一層不自由であらう。

ところが世には無筆な男も居るやうに、針の持てない女も居る。而も立派な着物を着て居る婦人にもこれが居る。不斷でも縮緬ずくめで居られるやうな婦人ならば家にお針も置いてあらうし、自分で針が持てんでも差支はあるまい。イヤそれにしても女で針が持てんでは、男で文字が書けぬのと同じやうに勝手が惡いに違ひない。

家にお針を抱へて置く程でなくても、總ての仕事を外に出し得る家の主婦であるならば、自

分で針が持てぬとも困ると云ふ程のことは無いかも知らぬが、その日の生活に忙しい家の主婦で、若し自分で針が持てなかつたら、不自由を通り越して何んなに困ることであらう。何んなに差支へることであらう。

或る一人の男が親讓の身代を未だ豐かに有つて居た頃、大金を出して落籍した妻は、去る所で或る商賣をして居た女であつた。行春の庭を飾る山吹の花のやうに、成程色には富んで居つたが、この女には肝腎な實が無かつた。

實が無かつたと言つても、子の無いと云ふ譯では無かつた。子は大有に有つて今は既に男女六人續いて居る。主人は法學士で去る會社に勤めて居る。俸給は餘り澤山取つては居らぬ。

この男、親讓の物のあつた間は、馬鹿に其の生活を飾つて居つたが、入つて來ずに使ふばかりでは身代は減らずに居らぬ。段々減して行く間に家屋敷まで無くなつて、終には借家住居をする身になつた。

始めは四人も使つて居た女中が追々に減つて、今日では一人の女中を使ふことも出來なくなつた。月々の收入は幾らも無い所に持つて來て、義理の惡い借金は溜つたし、家族は八人もあると來ては、自然と此處に落ちて來たのも無理はない。

斯うなつて來ると、困るのは主人ばかりでなかつた。これまで奥さまで立つて來た細君は、急に煮炊の業に當らねばならぬことになつた。それはまあ何うにか間に合せるにしても、この細君は育ちが育ちで針を持つことを稽古して居なかつた。子供の着物の綻び一ツ滿足に縫へなかつた。況んや子供の着物が何んなに汚れやうと、それを解いて洗張して、仕立て直して着せるなどゝ云ふことは、おもひも寄らぬことであつた。

その爲六人の子供には、何時も酷い服裝をさせて置かねばならなかつた。子供に一枚着物を拵へて遣れば、綿が出やうと破れやうと裾が切れやうと其儘着せて置く。愈ゝ着られぬやうになれば屑屋に賣つて新らしく買ふ。それが一々夫の懐に響く。子供は好いとしても細君が何時も襤褸を下げて居るのは實に見辛い。夫にしても同樣である。何んな美人であらうとも、斯んな女を細君に有つては男もお了ひである。

（三三） 細君に物を言せぬ人

それかと思ふと世には又、頭から細君を叱りつけて、細君には一切物を言はせぬ人もある、これも亦實に困つたものである。いかに自分の妻だと言つても餘りに壓制が過ぎるといふと、自

然夫に反抗する傾きが出來て、夫婦の情合が薄らぐので、獨り家庭の圓滿に行かぬばかりでなく、總ての點に亘つて弊害と損失とが伴ひ起るやうなことになつて來る。

斯う云ふ人は、總て自分の思ひ通りに遣つて、細君の忠言などには少しも耳を傾けぬ。何か細君が言はうとすると、直に頭から怒鳴りつけて、まるで口を開かせぬ。

「汝達に何が分るもんか、女が餘計なことに口を出さんでも宜い！」

「だつて貴人、そんなことをなすつちやお宜しくありますまいよ」

「喧しい、乃公が知つてる」

「ちやア最う何にも申しあげませんが、それぢや餘りお酷いやうに思ひますが」

「默れッ！乃公のすることに餘計な口を出すなッ！」

「善くないことゝは思ふが、強つて是非を爭ふことになれば、最後には痛い思ひをする丈である。細君は凝然と忍んで何にも言はぬ。夫婦の間が何時も斯う云ふ狀態になつて來ると、夫婦の間に精神の共通といふものは全くなくなる。精神の共通を有せぬ夫婦は、例へば木に竹をついだやうなもので、一寸見たところでは一本のやうに見えるが、善く〳〵見れば半分宛物が全然違つて居る。言ひ換へて見れば、夫婦の心が何時も別々になつて居る。斯う云ふ夫婦は戸籍

の上丈の夫婦で、決して眞の夫婦ではない。

斯ういふ人の家にはお客さまが見えても、實に妙なものである。主人の方では「サア何うぞ！」と歡迎しても、細君は知らん顏をして居る。また細君の方では「好く入らしつて下さいました！サア何うぞ」と言つて歡待の意を表しても、主人は一向平氣で居る。たゞ平氣で居る丈ならば未だ無事だが、時としては閻魔が千振を飲んだやうな顏をして座つて居る。これでは何方のお客さまも困る。夫婦一齊に「サア何うぞ！」と言ふやうでなくては、人の家に人は來るものでない。然るに夫婦の心が背中合になつて居つては、その行動は斷じて一致すべきのでない。これでは仕事も出來なければ、家も繁昌しさうな道理はない。大いに考へものである。

また世間には何うかすると、獨り細君の心添を用ゐぬばかりでなく、細君の忠言の反對々々と出たがる癖の人がある。これは更に困つたものである。

「良人今日は一寸橋本さんにお顏をお出しに成つたらお宜しいでせう！」

「ナニ行く必要はない！」

「でも一寸顏丈お出しに成らないぢや、彼方さまでお氣をお惡く成さいましやうよ」

「イヤ行かぬ！お前が左樣言へば乃公は斷じて行かぬ」

「オヤ良人何方へお出かけですか」

「一寸北山の所に行つて來る……」

「お廢しなさいましよ、彼の仁は隨分ちやありませんか、何も此方から態〻暇を潰して行らツしやることはないでせう！」

「イヤ行く。行つたからとて何も仔細はない話ちや……」

果して飛んだ恥を掻いて來るやうなことがある。勿論細君も細君に依りけりであるが、一々斯う云ふ風に否定して了ふといふと、一方では自暴自棄になつて了つて、總ての助言を試みぬやうになつて來る。その爲に物を取逃すやうなことも珍らしくない。後で「それなら何故その時に言はなかつた？」と叱つて見ても追ツつかぬ。人は不斷が大切である。また細君に向つて斯んな癖のある人は、世間の人に對しても、何か必ず妙な癖のある人である。然う思つて先づ間違はないものである。

（三四）縫針の達者な女

其處に行くと縫針の達者な女は、一家の體面、經濟、衞生、又は家族の精神上に亘つてまで

大いに益する所がある。

家族が何時も垢の付いた物ばかり着て居ると、その家の體面に關はる。主人も主婦も如何にも檢束の無い人間に見える。また着物は時々洗張して仕立て直さぬと、二年着られる物も一年しか保たぬ。實に不經濟極まる。獨り不經濟なばかりでなく、衞生上から見ても甚だ宜しくない。また家族の精神上にも少なからぬ影響を及ぼして來る。

細君の手が利かぬと、おなじく着物を仕立てゝも、家族の着物がぴつたりと身に合はぬ。裄丈が整然と身に合はぬので、何だか人の借着でもして居るやうな氣持がする。人の見た所も着物の身幅や裄丈などが一枚々々違つて居つては、何だか其の人間は間が脫けて見える。斯んな着物を着せられては、或る時は袋でも被つて居るやうな氣持がし、或る時は又身體を縛られるやうにも感ずる。斯う云ふことは本人の精神上に少なからず影響する。殊に子供などには其の影響を及ぼすことが烈しい。子供に何時も不潔不規律な着物ばかり着せて置くと、その子は屹度心に檢束のない人間になる。注意すべきことである。

こゝに某と云ふ男がある。學問は少々出來るが、至つて檢束のない男で、何となく間が脫けて見えた。人の家に來れば直ぐ横になつて寢る。寢ながら茶を呑む菓子を食ふ。それも可い

として身體は何時も垢だらけ、着物と着ては鹽垂れて何時來てもムツと不潔な臭氣がする。何處でも嫌はれものであつた。

併し何處にか棄て難い所のある男ではあつた。貧乏はして居るが、この節の金持のやうに內證で惡い事はしなかつた。「何うかして勵みを付けて、彼の男を働く人間にして遣りたい」と云ふので、或る人が大分骨を折つて細君を貰つて遣つた。

細君は小學校を卒業した丈の女と聞いたが、中々身體の活きた女で、殊に針仕事には達して居つた。この細君が來ると間もなく、第一に改まつたのは此の男の着物であつた。品の善惡は別問題として、何時も整然と衿丈の身に合つた、垢の付かぬ着物を着て居るやうになつた。

藁人形も作りからで、何となく其の面目を一新し來つて、以前のやうな不快な感じを人に與へぬやうになつた。「オイ細君を持つと違つたもんだな！」と友達が袖を引張ると、「ウーン」と言つて笑つて居た。

人は妙なもので、着物が立派になつて來ると、湯にも好く入るやうになつた。泥だらけの靑芋が眞白に皮を剝かれたやうに變つた。同時に精神的にも同じやうな著るしい變化を認めて來た。これまでは去る小學校の前の文房具屋の二階を借りて、大きな男が目立つて小さい机にか

ゝり、五枚十枚の飜譯をして月々貳拾圓足らずの金を貰ひ、後は友達の所を廻つて、人の仕事の邪魔ばかりして居つたのが、細君の御濟度に預かつて急に發心入道し、文部省の英語科教員檢定試驗に及第した。これは三年前の話で今は英語の敎師になり、山陰地方の或る小都會で、誰に見られても恥かしくない生活を遣つて居るさうである。

（三五）細君に感心させる

餘り細君に關する話ばかりが續いたが、序に最一ツ參らうか。世間には又何うかすると、我が妻をして我が日常の言行に感動させるやうな人もある。

斯う云ふ人は、自分の大切な職業に身を入れる事は申すまでも無く、總ての點に亘つて誠に善く人の道を守るものである。

言ひ換へて見れば、親兄弟にも優しい、女房子にも亦優しい。友達にも信義を盡し、目下の者をも善く愛する。中々出來ぬ事である。

斯う云ふ人は、決して自分で贅澤な事などはせぬ。「身を殺して仁を爲す」で、我が身に關する費用は成るべく切詰めて、少しでも我れ以外の人の方に廻すやうにする。

「お父さん、何うか此の帽子をお被り下さい、何だかお暖かさうですから買つて參りました」
老人は頂いて、
「オ、これは見た所から暖かさうな帽子だな。併し老人は何を被つて居らうが差支は無い。マアお前のを買つて來れば好かつた。お前の帽子は最う大分酷いぢや無いか」
「ナニ壯い者は働らくが一番です。帽子などは何であらうと關ひません」
「勿體ないな！」
「何うかお被り下さい！」
老人の喜ぶのを見て、この上も無く滿足する。ところが自分の身ばかり庇護ふ者になると左樣で無い。老人が坊主頭を撫でゝ寒がり、
「お前は又立派な帽子を買つて來たね！今度若し機會があつたら、吾にも一ツ何んなんでも好いから買つて來てくれぬか、何にも被らずに外に出ると冬向は誠に寒い！」
「老人なんか何だつて關はないでせう、若い者は少しは見外も張ら無くつちや此節は世間が出來んです！」
斯んな人間は、誰に對しても殘酷である。併し親に優しいやうな人は、總ての人に對して皆

優しい。
「オイ〳〵お前の春着を一枚買つて來たよ。何うだ、柄が面白く無いかい？」
「いゝえ結構でございますが、私よりかまあ良人のをお先にお買ひ下されば宜しうございましたに……」
「ナニ吾は服があれば澤山だ」
これと全然反對に行く人もある。
「良人洋服屋さんが參りましたが、また何か御注文に成るんでございますか」
「ア、此方に上げろ、オヴアコーをト一枚作らせんければ成らぬ」
「ぢやアお序に私にも外套を一枚願はれますまいか」
「贅澤な事を言ふな、お前などには何だつて澤山だ！」
これぢや細君が怨みはするが、夫の情に感動する氣遣は斷じてない。
「坊や早くお出で！お前のマントを買つて來ましたよ。ホーラ暖かいだらう、これがお帽子、これがお靴、ねえ好いでせう！」
「マア坊やお前は何うしたの、そんな好いのを買つて頂いて……。良人まあ小供に斯んな物を

買つてお遣り成さらんで、何故御自身の物をお買ひに成りませんでした？」

「ナニまあ小供にさへ寒い思ひをさせねば、親は何を着て居らうと關はんぢや無いか。ソレ見ろ喜んで飛んでるぢや無いか」

斯う云ふ人は、獨り己れの家族を愛するばかりで無く、他の爲にも好く盡す。友達が若し職業を失へば、骨を折つて何か口を求めて遣る。人が無心にでも來れば、身の皮を剝いでも救ふ。その情深い行爲には「好くもまあ人の爲に彼んなに厚く出來るものだ！」と細君が先づ感動する。斯う云ふ人には他人も何時か感ぜずには居られない。現在は兎に角將來は必ず多數の味方を得て、斯う云ふ人は自然と立派な地位を造るものである。

（三六）何かと言へば直に泣く女

男は快活な男子が好ましい。女も餘り陰氣なのは好ましくない。

いかに涙は婦人の武器だと云つても、無暗にこれを振廻されては男子は甚だ迷惑する。何んな辛い場合にも、凝然と悚へて顧はくば女は嫣然笑うて居て欲しいものだ。

美人の泣いて居るところを見たいなどゝ言ふのは馬鹿か狂人、何んな美人であらうとも、泣

いて居る相好は斷じて人に快感は與へない。況んや美人ならぬ女で日かげの濕地を見たやうに何時もジメ〳〵泣いて居たならば、誰も餘り快い氣持はすまい。

然るに世には何かと言へば、直に泣く女がある。泣くべきところに泣くのは好いが、何も泣くべき詳れのないところに泣かれた日には、夫も全く困るであらう。

某の細君に泣蟲だと人に言はれる女が居る。この細君は誠に好く泣く。根氣に泣く。感心に泣く。夫が何か話をしかけても、二言目には屹度泣くので、夫も殆んど持餘して居るさうだ。餘り泣くので鼻の下が赤くなり、背が爛れて居るなどは、餘り感心した話ぢやあるまい。

それは人の惡口だとしても、この女の泣くのは全く事實である。嬉しければ嬉しいで泣く。悲しければ悲しいで猶泣く。歌人でもない癖に、花に泣き月に泣き、暑さに泣き寒さに泣く。朝泣き晝泣き夜も泣く。その外何時でも泣くのを仕事のやうに心得て居る。實に厄介な女もあつたもの、何うせ眞面目の沙汰ではない。病的だとは知つて居ても、夫も自然その氣を受けて何時も悄々して居るさうだ。

或る時一人の友達が此の家に遊びに來た。時しも正月松の內であつたので、友達甲斐に酒の一ツも出すことになつた。成程見たところから何となく打濕つて居る細君は、お膳を拵へて

客と主人の前に出した。何うした機か生憎と客のが左箸になつて居た。誰も幸先を祝ふ正月のことであつたので、主人は默つて居られなかつた。

「オイそれは左箸になつてるぢやないか」

嫣然笑つて、

「御免下さい！」

斯う行けば何でもないのに、泣蟲の細君は左樣でなかつた。夫に一言注意されると、さあ大變始まつた。客の前に坐り込んで、正月早々泣出した。主人は困つた。客は更に恐縮した主人が何と言うても、細君の涙は止らなかつた。客は終に這々の體で逃出して行つた。主人も全く泣きたくなつた。

この女の妹が嫁に行つた。姉妹の好みで姉さんも式の席に列なつた。新郎さんが馬鹿に優しさうな男に見えた。姉の身に取つては嬉しかつた。すると又初めた。芽出たい席のことであるので新婦始め全く困つた。姉さんはそんなことには頓着なしに、妹夫婦が三々九度のお盃をして居る側で、泣いたも泣いたが大いに泣いた。樣子を知らぬ先方では、新郎始め其の意を解しかねて居た。この女は始終斯う云ふやうに泣いて居つたが、終に死んで了つたさうだ。

（三七）貸しさうで貸さぬ人

金錢問題は別物で、容易に當に成るべきものでない。金錢ばかりは受取つて、自分の懷に確りと入れて見ぬ事には安心は出來ぬ。「彼の人の所に行けば、金は何時でも借りる事が出來るなど、思つて居ると、それは大きな心得違である。

第一人の懷を當にするのは間違つて居るが、人は兎角人の懷を當にしたがるものである。人がそんなにお易く金を貸すものならば、「それ大晦日が來たぞ！」と言つて、何もそんなに驚く事は無いが、何處へ行つても「それはまあお生憎さまでございますが」をのべつ矢鱈に食ふので、世間大多數の人は、昔から江戸も長崎も同じ事、今日は最う極月の幾日と云ふ頃に成ると、青く成り赤く成り、頭は急に白く成つて、飯も食ずにフウ〳〵スウ〳〵鍛冶屋の鞴の音ぢや無いが、借つても貸さん、借つても貸さん、馬鹿言ひなさんな、そんな鞴の音があるかい。オツト宜しいドウカ〳〵、何うか〳〵言つて駈摺り廻るのである。

兎に角他人の懷程當に成らぬものは無い。それを當にして失望するのは、向ふさまよりは此方の了簡の方が不確である。人の言ふ事など當にして居ると、實に飛んだ手違が出來する。

何故かと言ふと世間には、「金なら何時でも私共へお出でなさい、お易い御用でございます」と云ふやうな口を不斷は親切さうに利いて居つて、イザ鎌倉と云ふ場合に成ると、「それはお生憎さまでしたねえ、先月あたりならば大分遊ばして居りましたのに」と逃げて此方に口を開かせる人がある。イヤ世間の金持は大方斯うしたものである。

斯う云ふ連中は、先月來ても來月伺つても、此方に約束通り取れる見込の無い以上は、決して金の相談などには乘つてくれるものでは無い。その癖口先では何時も甘い事ばかり言つて居る。借りたさには向ふの言ふ所を眞に受けて、また其の人の所に訪ねて行き、

「何うも誠に相濟みませんが、少々ばかり御融通は願はれますまいか」

「左樣でございますな、今月はチト手元の都合が惡うございますが、來月では如何でございませう、來月ならば他から返つて來る筈に成つて居る約束のがありますが……」

折返し〳〵行けば行く程段々と不得要領に成つて來て、終には斷然御斷り申上候ふと云ふ事に成つて來る。

斯う云ふ人は貧乏人を玩弄品にする人で、元より血も涙も無い唯金一遍の人である。不斷は何と口和かに言はうとも、斯うした質の人間は、決して此方の便宜を圖るものでは無い。斯う

云ふ人間と見たならば、早く見切を附けんと云ふと、たゞ〳〵恥を掻かされるばかりである。

此方は弱さに泣寢入する丈の話であるが、向ふは實に罪である。手元の不如意な者に向つて貸しさうな事を言へば、可哀さうに尾を掉つて遣つて來るのは人情である。そんな事をして騙すよりか、貸さぬものなら初めから口に出さぬ方が慈悲である。

人間は實に樣々で、それかと思ふと世には又、不斷は親切さうな顏色も見せぬ人で、イザと云ふ場合に成ると、好く此方の情實を酌み分けて「左樣云ふ譯ならばお用立て申しませう、貴方も嘸お困り成さるでせう！」など〻意外な言葉を聞せる事もある。併し斯んな事を度々當にする譯には行かぬが、何うかすると世間には、斯うした質の人もある。併し人は誰しも實は皆斯うあつて欲しいものである。

（三八）無暗矢鱈に笑ふ女

泣癖のある女も困るが、さればと云つて馬鹿笑をする女も亦同じやうに困る。つまり泣くも加減もの、笑ふも亦加減もので、物は總て加減を無視しては調子外れになる。何をするにも加減と云ふことに注意すれば、飛んだ失敗はせずに濟む。

某の妻には馬鹿笑をする癖がある。これには夫も大いに迷惑をすることがあるさうだ。或る年の夏のことに、隣の主人が行水をして、其處に脱いであつた浴衣を着やうとすると、何か浴衣に蟲が止つて居たやうに思つた。氣持が悪いので浴衣を緣先に持つて行つて力任せに振つて居たが、ウンと云つて緣先に打倒れた。成程その原因には悲劇の滑稽とも言ふべき仰きはあつた。その時浴衣の袖に貳錢銅貨が一個入つて居つた。浴衣を烈しく振ふ樣勢に、その銅貨が强く男の急所に當つた。さてこそ大の男がウンと言つて其の場に倒れたのであつた。

忽ち大騒ぎになつた。家人は勿論近所の人まで駈着けて、水よ藥よと天手古舞をした。隣の細君も見舞に來たが、それと聞くより笑ふ笑ふ大いに笑ふ。本人は眼も開け切らずに苦しがる人は騒いで居る中に、隣の細君は轉つて笑つた。

場合が場合であるので、近所の人達も「彼の女は馬鹿だ」と罵り、隣の家族は大いに慍つた その當座詰らんことで隣の人達から睨まれて、主人は甚だ迷惑した。

時々斯んなことがあるので、夫は大いに警戒し、大事な席などには成るべく細君を出さぬことにして居る。或る時主人が近頃懇意になつた人で、而も非常に自分の仕事に興味と同情を有つて居てくれる人で、「私は只今蜂に刺されました」と云ふやうに、太く上唇の膨れた人が

あつた。おまけに其の膨れた部分が紫色に變色して居つた。

この人が一日自分の家に或る人からの返事を持つて來てくれることになつた。自分に取つては大切な人であるので、夫は自分の妻を其の人に挨拶させぬ譯には行かなかつた。併し又萬一のことがあつては回復が付かぬので、主人は豫め十分に警戒して、「お前明日は決して不斷の悪い癖を出してはならんぞ！」と吳々も戒しめて置いた。

妻は十分承知して、「決して御心配なさいますな」と答へた。

明くる日になつた。主人は朝から待ちに待つて居たお客さまが見えた。挨拶の濟んだところで細君がお茶を持つて來た。主人は振返つて、

「これが家内でございます。何うか何分宜しくお願ひ申します」

「ア、左樣でございますか」

客は會釋して向き直つた。細君も挨拶はしたが、客の顏を見ると、さあ又持病が起つて來た。笑ふは笑ふは念入に笑つた。夫がハラ〳〵思つて睨んでも關はず笑つた。客は不興、身體がブル〳〵顫へて見えたが、大いに理窟を言つて歸つて行つた。事は終に敗れて了つた。夫は今でも此の細君を持餘して居るさうだ。

（三九）返しさうで返さぬ人

世には又直に返しさうな事を言つて人に金を借りて置いて容易に返さぬ人がある。容易に返さんでも返しさへすれば未だ好いが、散々手數をかけた上に摺つたの揉んだの言つて終に返さず。結局は借得と云ふ事にして、蔭では舌を出して居るやうな横着者がある。

斯う云ふ人間に限つて、借りる時は實に甘い事を言ふ。それこそ眞個に手を揉んで腰を屈め「何うも誠に相濟みませんが、直にお返し致しますから…。イヤこれは何うも有がたうございます。お蔭さまで助かります。死でも此の御恩は忘れません！」

ニコ〳〵して斯んな言葉を列べ散す人間に限つて、一旦貸して遣つたが最後、決して素直に持つて來る氣遣は無い。斯んな人間の心は實に横着なもので、借りた時は貰つたやうに思つて居る。催促すれば横に向き、返すやうなら餘所で借りますと澄して居る。

斯んなズウ〳〵しい人間に成ると、實に手の着けやうの無いものである。催促すれば返さぬ上に此方の事を惡く言ふ。果は狂犬に手を嚙まれたやうな形に成つて泣寢入するより外仕方の無い事に成つて來る。人を見ずに濫りに金を貸すと云ふと、結果は兎角斯んな事に成り易いも

のである。

總じて人は金を借りる場合には決して怖い顏はして來ぬものである。何んな怖ろしい顏をして居る者であらうと、金の相談に來る場合には誰も必ず莞爾して遣つて來る者である。所が返す時は其の反對で、何んな優しい顏をして居る者でも餘り喜ばしさうな顏はせぬのが人情である。これは獨り今日ばかりで無い。昔から矢張人は斯うであつたものだと見えて、世話にも「借りる時の地藏顏、返す時の閻魔顏」と云ふ事がある。

金は借るにも貸すにも實に骨の折れるものだと見える。おなじく金を借りるにしても、出來る事なら、好く其の人を選んで借りぬと、實に痛い思ひをしなければ成らぬ。また同じく貸すにしても、好く人を見て貸さぬといふと、結果は飛んだ事に成る、貸すにも借りるにも此の注意を怠つたが爲に、今日大いに頭を惱まして居る人は、世間に決して少なくあるまい。

事情に於いて容す限りは、イヤ少々痛い思ひをしても、借りた物は約束通りに返すが宜しい。人間が此の約束を果さずに世の中を渡つて居ると、遠からずして身の置場が無く成つて來る。世には何うかすると、返せば隨分返せる身分でありながら、兎角金の拂惜をして人に散々贈を煎らせるやうな善く無い辯を有つた人間もあるが、これは實に好ましく無い事で、斯んな

人間は、到底長く人の愛顧を受ける譯には行かぬ。自分で自分の首を縊るやうなものである。

「金は最初の約束通りチヤン〳〵と返して行けば、必要に應じて何處からでも融通が利くが、約束を無視してズボラに流れ、向ふに手足を運ばせるやうな事をして居ると、何處へ行つても全然融通の付かぬ事に成る。人の金を借得にして、それで儲けたなどゝ喜んで居ると、それは飛んだ心得違である。斯う云ふ心事の陋劣な人間は、終生斷じて大成する氣遣は無い。假令一時は便利な地位に立つ事が出來るとしても、一度怪事の附いたが最後、斯んな人間の亡びる時は一枚紙のパツと燃えて了ふやうである。誰も愛想を盡し切つて、一人たりとも我れを顧みる人が無いからである。

（四〇） 法螺ばかり吹いて居る女

男でも餘り駄法螺ばかり吹いて居る人間は人が相手にしなくなる。況んや女の法螺吹と來ては始末に困る。ところが男の中にも法螺で世を渡らうとする馬鹿者のあるやうに、女の中にもこれがあるから堪らない。

某の細君と來ては有名な法螺吹だ。偶に豚の一片も買つて食ふと、「昨夜は麒麟の味噌漬を食

べて見ましたよ」などゝ言ふ。何うかして鶏の雑物でも食はうものなら「今日は鳳凰の剝燒を頂いておいしうございましたよ」と吹く。

子供に紡績絣の一反も買つて遣らうものなら大騒ぎだ。「少し贅澤だとは思ひましたが、何時もの呉服屋に强請られて今日も亦子供に大島紬を一反づゝ買つて遣りましたが、それは〳〵好い柢合でしてね……」と近所を戸別に吹いて廻る。偶に五圓札の一枚も入らうものなら近所隣を持歩いて、「誠にお氣の毒さまですが、これを細かいのと取換へて頂かれますまいか、この節宅などに入るお金は、五圓より細かいのはないんでございますよ」などゝ大きな口を利く。全く以て困りものだ。近所では皆好く内幕を知つて居るので、子供までが「法螺屋の小母さん、法螺屋の小母さん！」と言つて居る。

この女に就いて面白い話がある。或る時突然知らぬ男が入つて來て、「此方さまの御主人は何方へお勤めでございますか」と問ふた。細君は吹いた。「手前共では先月から無理に賴まれまして、物産會社へ勤めることになりました。彼處は貴下大層社員の待遇が好いんでございますよ」と遣つた。「それは結構でございます、只今月給は何程取つてお居でゝございませうか」と巧く聞いて見ると、「ナニ月給は百圓足らずしか貰つて居りませんが、外に色々餘得がございますん

で、官吏などして居りますよりはねえ貴下・・・」男は何か手帳に記して、「何うもお邪魔を致しました」と言つて歸つた。

その實夫は參拾圓しか貰つて居ないのであつた。それでも夫は否應なしに所得税を納めなければならぬことになつた。前に來た男は税務署の官吏であつた。

或る時この女が小遣錢に差支へて、近所の家にこつそりと金を貳圓借りに出かけた。すると其處の細君が、兼て小面憎く思つて居たので、「奥さん御冗談でせう」と言つた。女は聲を潜めて、「イエ全くです」と言つた。「何うして貳圓ばかりのお金が御入用ですか」と糺くと、「先月宅に内證で人に百圓ばかり貸したお金が戻つて來ませんので、つい斯んな事になりました」と困りながらも猶吹いた。

此方は愈々小面憎く思つて、「それぢや貴下は幾つも幾つも結構な指環をお持ちださうですが何れでも一ツ私にお讓り下さらんか、百圓位のでも貳百圓位のでも宜しうございますが」と言つた。「左樣ですね、何れか一ツお讓りしませうか知ら・・・。マア能く考へて見ませう」と言つて、法螺屋の小母さん悄々と歸つて行つた。此方は後で舌を長く出して居た。

（四一）借金ばかりして居る人

世には人の金を借りる事を何とも思はぬ人間がある。商人は論外であるが、さも無い人間にして斯う云ふ癖のある者は到底大成する氣遣はない。イヤ大成する事において、無難な人間として、到底長く世の中に立つて行く事は出來ぬ。

斯う云ふ人間は、巧みに虚言を吐いて誰彼の容赦なく金を借りる事を仕事にして居る。借りても返せば論は無いが、借りた時は貰つたやうな氣に成つて、片ツ端から借りて借り倒し、借りた金は何うするかと云ふと、斯う云ふ人間は概して無益な事に使ひ棄て、人には散々迷惑を及ぼし、自分でも相變らず困つて居るものである。

斯う云ふ人の金を借りる所を見ると、一種の病的のやうに思はれる。人の顔さへ見れば誰彼の見境無しに、君一寸五圓貸して下さらんか、貴方一寸參圓拜借願はれますまいか。オイ一寸壹圓出して置いてくれ給へ、君一寸五拾錢ないか。君一寸拾錢煙草代を立換へて置いてくれ給へ、オイ一寸郵便錢を貸し給へ、君今月の給料の内から拂ふが、何うか拾圓丈融通してくれんか、君今夜參圓無くつちや大いに困るが一寸出して置いてくれんかと言つたやうに、到る處、

會ふ人毎に幾らづゝか借りて居る。

併し斯う云ふ事は長くは續かぬ。屹度人の噂に上る。「君も彼奴に遣られたか。イヤ我輩も貸したが返さんで弱つて居る」また一人が顔を出して、「イヤ彼奴は何處へ行つても金ばかり借りて居る。彼奴に遣られたら最う駄目だ！」

斯んな人間の面の皮の厚さと來ては呆れかへる。金ばかり借りて居る間は未だ無事だが、更に一歩進んで來ると、實に手の附けやうが無くなる。君の時計を一寸貸してくれ給へ、君の羽織を一寸貸してくれ給へ、君の帶を一寸貸し給へなどと云ふやうに成る。それを突ッぱねると坐り込んで、それちや君の細君の物を何か一寸貸してくれ給へなどゝ言ふやうに成る。

斯んな人間に成ると、實に呆れかへる程押しの強いもので、相手が氣の弱い男と見れば、それに附け込んで色々難題を持ちかけて、褌まで外させて持つて行くやうな事をする。

併し斯んな事が長く續きさうな筈は無い。何處へ行つても鼻を摘まれ、誰も此方の相談に應ずる者が無く成ると、今度は前の癖が一歩進んで、必ず人の物を無斷で使用するやうに成る。人の物を無斷で使用するのは泥棒である。人間は既に此處まで墮落しては、長く明るい所には居られぬ。

無暗に借金ばかり仕散して詰らぬ事に費して居ると、結果は勢ひ此處に落ちずには居られない。

我れも一個の人間として、斯んな馬鹿げた事は出來さうにも思はれぬが、それは眞面目な人間の考へであつて、處世の方法を過まつた自暴自棄の人間に成ると、これ位な事は平氣で遣る。今日は相當の教育を受けた者、又は良家の子弟にして此の手を遣り、親兄弟の顔に泥を塗つて居る者も少なく無い。

大なる前途を有する青年にして、斯くの如き境遇に自ら陷る最も主なる原因は何かと云ふとこれは概して酒色である。

誰彼の區別も無しに、矢鱈に借金ばかりして居るやうな人間を愛して、何時までも己れの配下に使つて居ると、何うせ碌な事は仕出さぬに極つて居る。また斯んな人間と交際して居ると此方の身まで世間に顏出しの出來ぬやうな事に成る。

（四二）誠に謙遜な女

世は色々人は樣々、女の癖に法螺を吹いて、人に冷笑せらるゝやうな者があるかと思ふと、

一方には謙讓の德を積んで人に重んぜられるやうな立派な婦人も居る。

前の法螺屋の小母さんと違つて、こゝに又某氏の未亡人は洵に謙讓の美德に富んだ淑女である。この婦人に依つて育てられた兄弟五人の男子は、何れも當代の秀才揃で、有名な醫師になつて居るのもあれば軍人になつて居るのもあり、實業家として立つて居るのもあれば學者として重んぜられて居るのもあり、また漁業家として遠洋に働いて居るのもある。五人の子供が斯う揃つて、何れ劣らず立身したのは、世間に稀な例である。而も此の婦人は早く寡婦になつて、辛酸の中に五人の子供を養育し、女の手一ツでこれまで敎育仕上げて來たのである。

この婦人の經歷を知る人は、皆深く感動して其の德に心服し、

「流石は貴女のお仕込程あつて、皆さん、大した御出世で、嘸まあ貴女御滿足でございませう！」

人が斯う言つて賞讃すると、夫人は何處までも謙遜して、

「悴共も偏に皆さまの御同情によりまして、何うか斯うか世の中に出して頂きまして、誠に有がたいことであります！この上とも何分にも何うか宜しくお願ひ申します！」

これより外には何にも言はずに愼しんで居る。我が子五人が打揃つて、假令何んなに出世をしやうと、未亡人は一言人に誇るでもない。昔の儘に極めて質素な服裝をして物見遊山などにも出かけぬ。

五人の子供の所からは、皆それ〴〵に毎月少なからぬ金を送つて來る。老夫人は一錢の無駄遣もせず、月々それを其儘纏めて置いて諸方の孤兒院に寄附して居る。

嘗て貧困の間に寡婦生活で、五人の子供を育てゝ居た頃、以前漢醫の妻であつた所から、打身に特効のある膏藥を案出して賣出した。それが一時は大きに賣れて、一家の生計を助けることになつた。

「勝い、貴女は實に男まさりだ！」

人が斯う言つて褒めると、謙讓なる寡婦は手を揉んで、

「いゝえ全く皆さまのお蔭でございます！女一人の力で貴女、何うしてこれが出來ませうに！」

自分の手柄を少しも鼻に掛けぬので、皆進んで此の婦人の便宜を圖つたものださうである。

この婦人は我が子に對しても矢張左樣だ。子供が時々一緒に集つて母を慰め、

「おツ母さんのお蔭で、一同世の中に立つて働くことが出來ます！」

斯う言つて感謝すれば、母は我が子に對しても謙讓の美德を守つて示し、

「何んの、お前達が皆能く勉強して下さつたので、私は今日斯うして結構に過されます、有がたい！」

外には何にも言つたことが無いさうだ。

（四三）借金を逃げぬ人

一口に借金と言つても、これを内譯して見れば色々な種類がある。前に言つたやうな借金は實に卑しむべく悪むべき借金であるが、中には商賣上の目算が外れて、元より返すべき筈であつた金が返されぬことに成り、その爲善後策に苦しんで居るやうな人も世間には少なくあるまい。

斯う云ふ人間を捕へて、時の事情の如何を察して遣らず、頭から不德呼はりして、その人間の信用を剝ぎ取つて了ふのは、餘りに涙が無さ過ぎる。また金主としても決して利益な方法ではあるまい。

然るに失敗した方で、斯う云ふ場合に際し、金主に申譯が無いからと云つて、金主の前に姿を隱し、借金を逃げるやうにするのは、これは十人の内で九人まで遣る事であるが、決して褒

めたことではない。

然る場合には金主は何う云ふ。その男に對して何んな感情を懷く。

「彼の男は隨分不人情だ、借りた金は返さぬ上に、近頃は姿も見せぬ！」

屹度斯う云ふに極つて居る。また言はれても申譯はない。また如何にも顏を持つて行き辛いからと言つて、そのまゝ借金を逃げ隱れして居ると、金主の方では屹度安心はして居らぬに違ひない。

「彼の男が彼切遣つて來ぬ所を見ると、もう返さない積りかな？何うもまるで事情が分らぬ？無い物は無理に取らうとは言はぬから、時々顏位は見せても好ささうなもんだ、實に不都合極まる話だ！」

金主の方では、屹度斯う云ふ感情を有つに極つて居る。金主の考へは何うでも宜いとして、人の金を使つて置いて、その金を返さぬ上に、借金を逃げて居つて時々顏も見せぬと云ふやうな人間は、到底自己の運命を挽回するやうな機會に遭遇することは出來ぬ。一度は失敗してもまた起き上つて榮えるやうな人間には、斯んな場合に於いても屹度何處か世間普通の人とは違つた處のあるものである。

或る一人の男が東京で商業を營つて失敗した。七人の金主に對して、五萬何千圓と云ふ迷惑をかけた。この人が若し世間普通の人間であれば、「何うも申譯がない！」と言つて姿を隱し、借金を逃げたに相違ないが、この男は決してそんな不實な事はしなかつた。

失敗して店を閉ぢると共に、直に新聞の廣告取に成つて、ドシ〳〵金主の許に出かけて行き

「今日は！本年も段々押詰りまして、嘸お忙がしく居らつしやいませう！エ、私も此方樣には非常な御迷惑をお懸け申して居りまして相濟みませんが、御案內の通りの始末で、只今の處では何と致方もございませぬ！今後何とか方法の附き次第、屹度申譯の立つやうに致しますから當分の處は何分共に御勘辨を願ひます！」

腰を屈めて頭を下げ、誠心誠意、少しも僞はりなく詫を言ふ。人情は又妙なもので、斯う言つて來られると、尾を振つて來る犬は擲られぬ。金主は笑つて、

「マア仕方がないさ！時に君何を始めた？」

「差當り新聞の廣告取を遣つて居ります。何うか又多少に拘はらず、何分共に宜しくお願ひ申します」

「左樣か、ぢやアまあ少し出す事にしやうよ」

「有がたうございます！」

「時に君、妙な事を始めたね？」

失敗者は笑つて、

「左樣でございます。自分でも妙な事を始めたものだと思ひます！」

金主は笑つて、

「隨分變り方が烈しいね！何うしてそんな事を始めた？」

「何うしてと言つて、別に深い理窟はありませんが、これならば一番早く遣れる手蔓がありましたんで、飢ゑては職を選ばずで、昨日店を閉ぢる、今日から早速これを始めたやうな次第でございます。マア何うか何分共に御引立を願ひます！」

「併し十人が十人出來ん事だ、昨日まで旦那さまで居た人が好く思ひ切つて始めなさつた！」

「好くも惡くも今日の私には、そんな吟味をして居る暇はありません！皆さんに御迷惑をお懸け申して置いて、一日でも手を袖にして遊んで居るやうな了簡では誠に皆さんに申譯がありません！マア何かして早く事業に取附いて、一日も早く皆さんに申譯の立つやうにしなければ私も誠に必苦しい次第でございます！」

この男は唯自分の商賣用で金主の許を廻るばかりで無く、毎月少なくも一度宛は必ず各金主の許を廻つて、

「何うも誠に相濟みませんが、何とか身に形の付き次第、御返濟の方法を講じますから、當分の處は何分何うか御勘辨を願ひます！」

何時も斯う言つて、必ず顏を出して居つた。或る時一人の金主は言つた。

「何うも御念の入つた事でござる。宜しい、承知致しました！併しお前さんは誠に感心な人だ。平い話が、世間多數の人は金を借りて返せないと、自然此方を避けるやうにするものだが、お前さんは早二年間も好く私を尋ねて下さる。人は誰しも實は然うこそ無ければ成らぬ筈のものだ！」

失敗者は正直に答へた。

「凡そ世の中に人さまに金を借りて置いて、それが返せぬから面目無いとか、又合せる顏が無いとか、申譯が無いからとか言つて、その人の眼を避けて道を歩く程苦しい事はあるまいと思ひます、默つて逃げ隱れして居つて、萬一途中でひよいと出會するやうな事があると、赤い顏をしなければ成りません。それこそ何んなに辛いでせう！」

「それは全く左樣だらうな！」

「私にはそんな苦しい事は出來ません！また拜借した元金は兎に角、切めては利息丈でも持つて上らなければ相濟まぬのでございますが、お耻かしい事ながら今日の私には、その義務さへも果されませぬ！然るに人さまに金を拜借して置いて元も子も拂はずに澄して居られる道理はありません。私は時々斯うして伺ひますのは、何うか當分の處利息の代りだと思召して頂きます。イヤ利息の代りに見られるやうな餘り立派な顏でもありません、この通り色は黑いし痘跡はあるし、鼻も餘り高い方ではありませんが、何うかまあ其の心持丈を買つて頂きます！」

向ふは笑つて、面白い肌合の男だと思ひ他の金主と相談して、「氣の毒だ、彼の男は何うにかして遣らうではないか」と云ふことに成ると、七人は七人ながら同情して、更に幾らづゝかの金を各自出して遣つた。失敗者は大いに感激して、新に新事業を始めたが、人間の奮發心といふは恐ろしいもので、今度は大いに物にして、僅か四五年の間に、前の借金を悉皆返濟して了つたばかりでなく、今では七人の組合人に對し、年々少なからぬ利益を分つて居るさうである。

（四四）だらしのない女

檢束のない男も使ひ道に困るが、檢束のない女と來ては愛想の盡きるものである。檢束のないといふのは心に引締のないことで、例へば飯を炊きながら居眠をして居るやうな不性者を謂ふのである。

檢束のない主婦に依つて支配されて居る家は萬事が不規律に流れて物に統一がない。破れた障子は破れた儘、汚れた疊は汚れた切、家族の着物も垢だらけ、夜具は濕つて綿が固まり、天井には煤が垂下つて、押入の中には汚物が滿され、家一杯に何時も臭氣が漂うて居る。

斯う云ふ家の臺所には貧乏神が住んで居て「滅びよ滅びよ早く滅びて了へ！」と呪うて居るだから斯う云ふ家の臺所は見た所から暗い。不潔と臭氣に滿されて秩序も無ければ準備もない器物は毀れ板間は汚れ、流しは破れて蚯蚓などが長く腹這つて居る。

或る家の主婦は頗る檢束ない女として有名である。「彼の女は便所へ行つても手を洗はぬ」と云ふ噂は嘘でないらしい。何時行つて見ても家の明るく見えるやうに片付いて居たことがない家の周圍の掃除などは何時したものか分らない。內に入つても其の通り、障子は破れ疊は濕付き、其處邊中亂雜に取散して、床には白く埃が積つて居る。座敷がこれでは押入の中や臺所などは覗いて見るまでもない。偶に茶の一杯も御馳走にならうものなら、茶とも付かねば湯とも

付かぬ生溫い物を呑まされる。それも好いとして茶碗の中に髮の毛が入つて居つたり、茶碗の緣に飯粒が食付いて居たりする。

御當人は何うだと云ふと、髮を蜘蛛の巢のやうに亂して埃を被り、顏も襟も垢だらけ、爪が伸びて踵は黑く、着物は汚れ帶は裂け、膝は子供の尿糞や鹽氣などで塗つたやうに汚れて居る

斯んな女は亭主の留守には何をして居る。冬は日向ぼつこをしながら緣先で虱を取り、夏は日かげで蚤を取り、身體をワシ〳〵搔いて居る。その手で直とお料理をされた日には、何んな結構なダシが出ることであらう。

斯んな家に物を貸すと決して返すものではない。貸すなら遣る積りで貸したが宜い。併し近所の交際として物の遣取をせぬ譯には行かぬ。春の彼岸に隣家から五目鮮を重箱に入れて子供が持つて來た。

直にあけて返せば宜いのに左樣はせぬ。器物を其儘借りて置いて食べた。食べた後で直に洗つて返すかと思へば左樣もせぬ。御飯粒の付いた儘その邊に投つて置いた。

二日經ち三日過ぎして居る中に此方では忘れて了つた。隣では忘れずに重箱を取りに來た。おもひ出して探して見ると成程その邊にあるはあつたが、飯粒が付いて居たので鼠が緣を嚙つ

て居た。檢束の無い女になると、時々斯うした事がある。人が愛想を盡すのも無理はない。斯う云ふ女を女房に持つては亭主は頭が上らない。

（四五） 上手に金を借りる人

商人として同じく資本を借りるにも、その借方に上手下手がある。

同一の金主から此方の必要に應じて幾度でも容易に金を借りる人は、金を借るに上手な人で一度切で金主に愛想を盡されるやうな借方をする人は、金を借るに下手な人である。

幾度でも同一の金主から此方の必要に應じて金を借り得るやうな人は、おなじく商賣を遣つても、屹度成功せずには居らぬが、一度切で金主に鼻を撮まれるやうな人は、商賣の道にかけても亦自然と暗いものである。

空手で立つて人の金を融通して、遂に天下の大商人と成り得た或る人の金の借方は人とは又一風異なつて居たとの事である。

その人は何んな借方をしたかと云ふと、支拂期限に少なくも十日は必らず餘裕を見て、三十日で返せると思ふ時は四十日、四十日で返せると信ずる場合には五十日と云ふやうに、必ず向

ふに十日づゝは餘裕を見て、支拂期日を定めて置く。さも無くして支拂期日をかつきりと切詰めて約束して居ると、萬一間違つた場合にはそれ丈直ちに此方の信用を失はねば成らぬ事に成る。

併し十日も餘裕を見て置けば、三日か五日おくれるやうな事があつても、決して期日を遅へるやうな憂ひはない。

次には利息をチヤン〳〵と持つて行く。たゞ利息を持つて行くばかりで無く、必ず利益の幾分を金主に配當して「お蔭さまで今度は、これ〳〵の利益を得させて頂きましたに依つて、これは眞のお禮のお印でございます」と言つて出す。言ひ換へて見れば、自分一人で決して利益を貪らずに、金主にも亦利息の外に金を借りた度に若干づゝか、屹度儲けさせて遣つたものださうである。

期日は何時も約束よりも十日も早目に返しに行く、利息はチヤン〳〵と持つて行く、まだ其の上に利益まで必ず配當すると來ては、向ふで惡い顏をしさうな筈は無い。物の一ケ月も借りに行かぬと「近頃は何う成すつたんです、少しも御用がございませんね？」と向ふから催促して來るやうに成る。

それでも未だ借りに行かぬと、向ふから押しかけて來て、「何うです少しお使ひ下さらんか、

利息がお氣に召さなければ、少しは御相談致しますよ。マアそんな事は何うでも宜しい、ドシ〳〵使つて下さいませんか」と言つて、却つて向ふから此方を攻めるやうに成つたさうである。

兎角資本に苦しみ勝の商人が、最早此處まで漕ぎつければ、金は幾らでも儲かるものださうである。成程一理あるやうに思はれる。ところが金を借りる事の下手な人間になると、支拂期日は約束より十日も遲れる。場合に依つては金を使つた後で利息まで小切ると云ふやうな下手な事を遣るので、向ふは一度か二度で懲々して「イヤ最う彼の男ならば眞平御免だ！」と言ふ事に成る。斯んな人間に金の儲からう筈は無い。儲かる仕事を發見しても、彈藥が無ければ鳥は撃てぬ。鳥を發見する事も肝要であるが、上手に彈藥の工夫をする事も亦必要である。無資本者の身に取つて、商賣上の彈藥は何であるかと云ふと信用である。信用が無ければ金は借りられんと云ふのは後の話で、その信用を得る前には、先づ上手に金を借りる工夫をする事が大切である。先づ上手に金を借り得る人で無い事には斷じて人の信用は得られるべきものでない

（四六） 心に引締のある女

其處に行くと心に引締りのある女は勝い。何時も氣を引締めて油斷なく働いて居るので、家

が自然と秩序立つて寸分の隙がない。福の神は斯う云ふ家を常に探して歩いて居る。

心に引締のある女に依つて主宰されて居る家は一寸見ても直に分る。その家に近付いて見ると、何時も清潔に掃除が行き屆いて居る。入口の格子戸にも蜘蛛の絲が下つたり、格子の棧に塵が白く積つて居たりするやうなことはない。

御免なさいと格子を開くれば、土間も清潔に掃いてある。上に上れば玄關から座敷にかけて秩序正しく片付いて、床も柱も光つて居る。出て來る火鉢の灰も綺麗に篩はれて、假令更紗の表にもしろ、座蒲團なども垢に濕々して居らぬ。

おなじく茶を一杯出されても、茶碗も清潔茶托に汚點も見えぬので、客は愉快に茶の馳走を受けることが出來る。出て來る主人の着物から主婦の衣服まで小ざつぱりとして、子供と雖も膝や胸や袖の汚れた物などは着せてない。その他家庭の總てに主婦の働きが歴々と見えて居る

一寸便所を借りて入つても、斯う云ふ家のは氣持の快い程掃除が行き屆いて居る。手水鉢にも水が清麗に湛へられて整然と柄杓が付き、手拭掛にも古いながら洗つて手垢の附かぬ手拭が懸つて居る。斯う云ふ家の臺所ならば、何時も明るく片付いて、その板間は必ず光つて居るものである。

斯う云ふ質の婦人に就いて面白い話を聞いたことがある。東京の場末の土地に或る一人の老人が大分貸家を有つて居た。その中の二十坪足らずの新築の家を一戸或る若夫婦に家賃拾圓で二年間ばかり貸して置いた。すると家賃が小一年振溜つて何うしても拂はなかつた。

老人は大いに迷惑したが、何うせ取れる見込がないので、つまり一年振の家賃を損して立退いて貰つた。立退いた後を來て見ると、まるで掃除などはした事が無かつたと見えて、家の荒方は夥しかつた。老人は驚いて歎息し、「これはまた飛んだ人達に家を貸したもんだ。斯う荒されては家賃の一割方も下げねばならぬ！」と零し〳〵貸家札を張つた所に一人の若い婦人が來合はせて老人に挨拶し、「お貸家ならば一寸拜見させて頂かれますまいか」と言つた。「サア何うぞ御覽下さい！」と言つて老人は其の婦人に目を止めた。

「御免下さいまし」と言つて、婦人は土間に入つて見ると、古い箒が一本横たはつて居つた。婦人はそれを跨がずに一寸取つて壁に立掛け、それから沓脱の上に上つた。老人はこれを見て感心した。

婦人は内の様子を見て居つたが、「未だお新しいお建物のやうに拜見致しますが、大分荒れて居るやうでございますね」と言つた。「何うも檢束の無い人達に貸して置いたものですから……

……」と老人は零した。

婦人は臺所を見に行つた。老人も附いて行つた。婦人は手に持つて居た小さな風呂敷包を開け始めた。老人は怪しんで見て居ると、中から新しい上草履が一足出た。婦人はそれを穿いて臺所に入つた。「感心な婦人だ！成程貸家を探しに出かけるには上草履が必要だ、細かい所に氣の着く婦人だな！」と老人は窃に舌を卷いて居た。

婦人は家が氣に適つたと見えて家賃を聞ふた。一割下げて九圓だと答へた。「八圓に負けて頂けますまいか。豫算がありまして只今の所それ以上は支出する事は出來ない身分でございます」と婦人は言つた。「ぢやア特別に左様云ふことに致して置きませう」と快く老人は承諾した。

明くる日婦人は借家證と敷金を持つて來て愈々家を借受けた。直に掃除にかゝつたが、何處も彼處も氣持の快い程清潔にして風を通した。後で外を掃除する時家主の家の鍬を借りたが、使つた後では清潔に洗つて返して行つた。「行き屆いた婦人だ！未だ芳紀も若いのに……」と、老人は益〳〵感心して居つた。

翌日の午後越して來た。家族は夫婦に子供が一人、外に姑らしい痩弱さうな老婆さんが居た。主人は何處へか勤める人で、朝は早く家を出て夕方遅く歸つて來るのが例であつた。婦人

は家事の傍に、夜もおそくまで何か内職でもして居る樣子であつた。

別に内證の豊かな家とも見えぬが、家賃は毎月同じ日の、殆ど同じ時刻に向ふから態と持つて來て拂つて行つた。一年經つても二年過ぎても婦人はこれを違へなかつた。「おなじ家子でも以前のとは天地の差がある。好い人に貸した！」と言つて老人は喜んで居つた。

家主の老人に取つては未だ有がたい事があつた。家を大事に住んで、掃除が誠に好く行き屆くので、疊や戸障子などの持も大變な違ひであつた。五年ばかり居る中に、家は段々と繁昌して行つた。近所では感心して、皆この婦人を褒めて居た。

その中に子供も三人になつた。婦人は益々努力した。夫は某の印刷所の事務員で月給は四拾圓しか取つて居なかつた。婦人は刺繍の名人で、家事の傍ら月々貳拾圓近くも稼いで、家賃は月々この内から支拂ひ、殘金は貯蓄して居ると云ふ事を去る人から聞いて、家主の老人は深く其の心がけに感じた。

この老人は一文無しから今日まで仕上げて來た人で、これが又誠に善い心がけの人であつた婦人の内情を聞いて尠なからず感動し、何か此の婦人の爲に便宜を圖りたいと窃に思つて居つた。六年目の暮に家賃を持つて來たのを呼び止めて、「貴女は誠に感心なお方です！私も斯うして皆樣に家をお貸し申して居りますが、貴女のやうに清潔に住んで下さるお方は尠ない。月々お拂ひ下さる物にしても左樣です。金錢の有無に拘らず、貴女のやうなお堅い方に私は多くお目にかゝつた事がありません。何うです奥さん、貴女のお宅で彼の家をお買ひなさいませんか地代も内證で餘所よりお安く致しませうが……」

「左樣ですか、お幾ら位ならばお讓りを願はれませうか」

五百圓とでも言ふかと思つたら左樣でなかつた。

「最うお家賃も大分頂きましたから、お宅さまなら貳百五拾圓でお讓りいたしませう！」

婦人は喜んで我が物にした。これまで月々八圓宛拂つて居たのが、僅かの地代で住めることに成つたので、出ると入るでは非常な違ひで、婦人は明くる年の正月から貳拾五圓宛貯金が出來るやうになつて來た。

斯う云ふ婦人に連れ添ふ夫は自然勤振が好くなるので、夫の方でも俸給が上つて來た。

その後僅か五年の内に貳千圓以上の金を拵へた。それが段々に殖えて行つて、主人は今日では其の印刷所の大株主になり、外に地面や家作なども大分有つて結構な生活を營つて居る。この婦人を娶つてから僅か二十年足らずの間ださうだ。

（四七）無くては成らぬ人

昔、太閤さんが黒田如水に「天下に最も多い物は何だらうな？」と問ふた。如水は答へた。

「左様でございますな、まあ人でございませう」すると又太閤さんが「それでは天下に最も少ないものは何だらうな？」と問ふた。如水また對へて、「左様でございますな、まあ人でございませう」

「いかにも左様だ！」と仰有つて、太閤さんが大層如水の返答をお褒めになつたと云ふ事である。

今日も矢張左様である。世の中に一番多いものは人であるが、選りて見ればさても少しで、人は多いが、さて此の人はと云ふ人物は、何れの社會にも至つて少ないものださうだ。

太閤さんの時代と違つて、今日は立派な學校が數多く出來たので、何博士、何學士、何得業士など云ふ立派な肩書を有つた人達が澤山出來た。而も其の多數の人は何うも思はしい就職口が無いと言つて、中には最う生活力の盡きかけたおやぢさんに田地を賣らせて、その金を東京に取寄せて坐食をしながらお天氣模様を見て居る人も少なく無いと言ふ事である。然らば現

在社會は各方面共に既に人才があり餘つて、最早何うする餘地も無いかといふと、實際は又強ち左様でも無いらしいのは妙である。個中の消息を深く穿鑿して見ると、或は現代も太閤さん時代と同じやうに、天下に一番多いものは人間で、天下に一番少ないものも亦人間と云ふ算盤に成つて來るのではあるまいか。

一例を擧げて見ると、今日は醫士の數が非常に殖えて來て、醫學士は愚か醫學博士の肩書を有つて居つてさへ思はしい口が無くて、金時計の光らせ先に困つて居るさうである。併し其邊のお醫者さまは、最早今日の時代では有つても可し、無くても別に差支は無いと云ふお醫者樣で、是非共無ければ成らぬと云ふお醫者で無いので、或は繁昌しないのかも知れぬ。

若し此に一人の醫士が見はれて來て、眞に肺病患者を救ふ事が出來たならば何うであらう、それでも醫士として矢張飯が食へんであらうか。ナニそんな事があるものか、彼は直ちに無ければ成らぬ人に成つて、それこそ何んなに繁昌するかも知れない。

また一人の電氣學者が見はれて、空中に電力を無線で輸送する方法を發見し得たならば何うであらう。世界の飛行機界は何んな形勢に成るであらう。たゞ飛行機界ばかりでない、この發明が完全に出來れば、世界の實業も軍備も根底から覆へす事が出來るに違ひない。それでも飯が

食へぬであらうか、そんな馬鹿な話はない。彼は直ちに無ければ成らぬ人に成つて、それこそ何の位世人の尊敬を受けるかも知れぬ。

獨り醫士や電氣學者ばかりでない。政治家、軍人、實業家その外何でも關はない。おのれの從事する道々に於いて彼の人は無くては成らぬ人と云ふことになつて了へば、斷じて社會に棄てられる憂ひはない。早い話が、官吏にならうと、會社に勤めやうと、又は個人の雇人にならうと、彼の人は此に必要だと言はれる人物になれば、卽ちなければならぬと云ふ人にさへなれば、斷じて相當な地位の得られぬといふ道理はない。如何なる職業に從事する人であらうとも努力してこゝまで漕ぎつけぬことには、最早今日では到底思はしい地位は得られないことになつて來た。

（四八）妙に物を隱したがる女

世には妙に物を隱したがる女が居る。着物を一枚買つても人に見られることを好まない。泥棒でもして來たやうに人の目を怖がつて隱す。何も人に見せびらかす必要はないが、さまで苦勞して隱すには當るまい。

着物など隱すのは未だ好いが、食物を人に隱すのは野卑である。腹の中が見え透いていかにも淺間しく思はれる。これ程人にいやな思ひをさせることはない。心すべきことである。

或る女は誠に美しい顏をして居るが、可惜ことには此の癖がある。彼の女と交際するものでこれを厭はぬものはない。皆好く此の癖のあるのを知つて居るのでいやな思ひをさせぬために食事時やお茶時には、なるべく避けて行かぬやうにする。實に女子の恥辱の一ッである。

けれども長く交際して居る中には、何うかするとそんな場合に打附ることがある。或る時一人の婦人が尋ねて行つて用談をして居ると、女中が燒芋を買つて部屋に入つて來かゝつた。主婦は大騷ぎで席を立ち、敵を逐ふ鷄の羽根のやうに兩袖を擴げて女中を次の間に押出した。これを見た客の婦人は淺間しがつて話も終らずに歸つて來た。

去る時のことに、また一人の婦人が其の家に行つて用談を始めた。折から座敷には來客の樣子であつた。婦人は主婦と話して居ると、座敷の客は歸つて行つた。後で女中が茶道具や菓子鉢を下げて來た。菓子鉢には菓子の殘りが入つて居つた。女中は其の菓子鉢を主婦の側に置くと、主婦は屹度女中を睨んで、其處にあつた新聞を慌てゝ菓子鉢の上に被せた。客の婦人は餘りだと思つたので、

「奥さんそんなにお隠しなさらんでも大丈夫よ。私は甘いものは大嫌です。サアそれぢやお暇にしませうかね……」

散々苦口を利いて歸つて行つた。斯んな恥を掻されても、因果なことには此の癖が直らない或る時この家に又一人の婦人が行つて居ると、生憎餘所から病氣本復祝の赤飯を貰つた。女中が折を抱へて主婦の部屋に持つて來ると、主婦は又慌てゝ女中を次の間に押出した。病氣だとは知つて居るが、客の身になつては落着いて居られなかつた。而も此の時の用事は主婦の妹の緣談に就いて態ゝ來て居たのであつたが、餘り馬鹿々々しいので其のまゝにして歸つて來た。

後で主婦は大いに弱つた。今度は此方から出かけて行つた。折好く其處に他所から大きな菓子折を貰つた。此方の主婦は得たりかしこしで、御免を被り客の前で水引を解き蓋を取つて見ると、中は見事な羊羹であつた。主婦は見る前で大きく切つて二枚重ねた奉書に高く盛上げて出した。話を濟して歸る時には更に添へて持せて歸した。少しは其の癖が直るかと思つたが、直る所か益ゝ烈しくなるばかり、世には時々斯うした女があるが、その家には自然と人が來なくなる。

（四九）有つても無くても宜い人

何に成つても其の社會々々に於いて、無ければ成らぬ人に成り得た時は、少くも生活に困るやうな憂ひは無いが、さも無くして一人前の人間に成り損ね、彼んな人間は有つても無くても何うでも可い、こゝに居らうと居るまいと、少しも痛痒は感ぜぬ」と言はれるやうな人間に成つては、男も甚だ生榮のせぬ事になる。斯んな人間は折角職業に有りついて居つても、何時糧道を斷たれないとも限らない。實に心細い次第である。この種の哀れむべき人間の一人に就いて、一寸實例を擧げて見れば左の如し。

今日は三十日で、商店は何處も忙がしい。主人は電車を飛下りて店に入つた。

「オイ〳〵子供、大きい人達は皆何うした？」

「旦那お歸んなさいまし、皆出かけました」

「大きい人は誰も居ないかい？皆店を空けちや仕やうが無いね！」

「出毛さんが居ります」

「出毛でも一寸呼んでおくれ！」

「出毛さん」

呼んでも返事がない。

「オヤ何うしたでせう。鶴どん君は出毛さんを知らんか」

「今其處で煙草を喫つてたぢや無いか」

「彼奴仕やうの無い奴だ！」

主人はブウ〳〵言ひながら、奥に入つて見ると、大將長火鉢の前に悠然と坐つて、一生懸命に煙管の掃除を遣つて居る。

「オイ！」

恟りして、

「旦那お歸んなさい！」

「お歸んなさいも無いぢや無いか、今日を何時だと思ふ？店を子供ばかりに任して置いて、煙管の掃除もないもんぢやないか」

「はい！」

返事をしながら一服吸はぬことには立たぬ。

「オイ呆れかへるぢやないか、切めては最少し尻でも輕くしろよ」

主人は先に帳場に來て待つて居ると、鼻から烟を出しながらやつと出て來た。

「金は幾ら集まつたい？」

「サア何うですか」

「内に居て分らんかい？」

「知りません」

主人は舌打して、

「お前何のために店に居るんだ？餘所からの註文は？」

「サア如何でしたらうか、皆出かけて了ひましたが、一寸その註文帳を御覽下さい！」

「馬鹿ッ！サア其處で一算遣つた。願ひましては百七拾壹圓貳拾參錢也」

「旦那々々々々」

「何だい？」

「最一度願ひます！」

「ヨシ來た、御破算で願ひましては百七拾壹圓貳拾三錢也、お次は參百五拾七圓飛んで八

錢也、お次は百拾八圓九拾と貳錢也……」

「旦那々々々、最少しお靜に願ひます！」

「最う宜い、算盤を此方に寄來しなさい、ぢやア一寸金六商會に電話！」

「えゝと、アゝ左樣か、新橋の七百一から五まで……。モシ〳〵貴方は金六商會さんですか」

「いゝえ違ひますよ」

「オヤ可怪な？」

「ぢやア最う宜いから丸一に行つて勘定を貰つてお出で！」

つい其の邊まで行つて來るのに三十分もかゝつた。

「取つて來たかい？」

「受取を持たずに行きました！」

こんな人間は居ても居なくても別にこれと云ふ違ひはない。有つても無くても宜い人と云ふのは斯う云ふ人である。己れの働きで飯の食へぬのも無理はない。

（五〇） 呆れる程寢る女

昔或る人が一人の畫伯に向つて、「何うか福神の畫をかいて貰ひたい」と頼んだら、「宜しい！」と言つて、一家の主婦が朝早く起きて、家の掃除をして居る畫をかいて、「福神はこれだ！」と言つて渡した。「それではお序に今度は何うか貧乏神の畫をかいて頂きたい」と頼んだら、また「宜しい！」と言つて筆を執り、今度は一家の主婦が朝日に足を向けて寢て居る畫をかいて渡したと云ふ話がある。

朝起三文の得ありと云ふが、衞生上から見ても經濟上から見ても、又は一家の秩序體面上から見ても、早起には少なからぬ產物がある。一家の主婦にして早起をする家であれば、概して其の家は榮えて居る家である。假令現在に於いては榮えて居らんでも、近く榮えんとしつゝある家と見て差支はない。これに反して一家の主婦ともあらうものが、朝日に足を向けて朝寢坊をして居るやうな家であれば、假令現在に於いては榮えて居つても、近く衰へんとしつゝある家に相違あるまい。

或る男が妻を貰つた。貰つたは宜いが貰つて見ると、この女頗る附きの朝寢坊、起して見ても中々〳〵起きない。それが爲に夫は毎日出勤の時刻が遲れる。この男元來は有名な勤勉家でこれまで毎年々末には若干宛か月給が上つて來たものだが、この女房を貰つた年には上らなか

つた。その後は毎日遲刻して、何となく怠けるやうに見え出したからである。

男に取つては實に由々しい大事であつた。

「これぢや不可、來年から遲くとも出勤時間までには是非出なければ成らぬ！」

と思つて氣を引締めた。明くる年から朝暗い中に眠を覺し、

「オイ起きんか起きんか遲くなるぞ！」

呼んでも搖つても細君は眼が覺めぬ。

「オイ起きないか、遲くなつちや大變ぢや！」

頭の一ツ位打たれても細君は平氣で寢て居る。鼻を撮めば蒲團の中に潛り込む。蒲團を引剝げば地から投り出された芋蟲のやうに縮れて了ふ。抱へ起せば火の端の飴棒のやうにぐんにやり倒れる。何としても手の付けやうがない。これを起して飯を炊せるには大變な手數が懸るので、夫は毎朝自分で飯を炊くことにした。自分で飯を炊いて食べて、辨當を詰めて、いざこれから出かけると云ふ時にならねば細君は起きぬ。それも獨りで起きるのでない、留守が不用心なので、夫に起されて始めて漸々起きるのであつた。起きるは起きるが床を上げずに居る所を見ると、亭主の出勤した後で、何うも一度寢の夢に落ちて行くらしく思はれた。折があつたら

何時か一度證據を押へて、ウンと小言を言つて遣らうと待構へて居つた。

或る朝出がけに起して見たが、何としても眠が覺めなかつた。面倒臭いので其儘放棄つて置いて出て行つた。一日の勤務を了つて日沒家に戻つて見ると、未だ掃除をした樣子も見えなかつた。幾ら呼んでも返事が無いので夫は訝り「家を空にして何處へ行つた？」と舌打しながら障子を開けて見ると、未だ昨夜床に入つた儘で一日一夜寢續けて居た。夫は呆れかへつて物も言へず、突然に着て居た蒲團を引剝いで退けた。細君は此の時始めて眠を覺し、欠伸をしたが ら四邊を見ると薄暗かつた。

「良人そんなに慌てなくても、今朝は未だ斯んなにお早いぢやありませんか、切めて夜の明けるまでは寢かして置いて下さいな！」

斯んな女は放棄つて置けば、生涯グウ〳〵寢て居るかも知れぬ。

（五一）手の皮の薄い人

世には手の皮の薄い人がある。さうして自分の手の皮の薄いのを誇りのやうに思つて居る。實に飛んだ心得違である。

人間は己れの職分を重んじて、眞面目に働けば働く程手の皮の厚くなつて來るものである。これと反對に人間の任務を無視して、毎日手を懷に入れ、怠けて居れば居る程手の皮は段々薄くなつて來るものである。

手の皮を厚くして、毎日眞面目に稼いで居る人は、少なくも己れの衣食住に差支へるやうな憂ひはない。人間は着ると食ふと仕むにさへ差支がなければ、人の所に度々無心に出かけたりまた人の物を借取したり、それが一歩進んでは、詐僞、强請、窃盗、强盗などまで働く必要はない。

さりながら元來眞面目に働かなければ食へぬ筈の人間でありながら、人間の任務を疎にして、毎日手を懷に入れ、手の皮を赤子の肌のやうに柔軟にして居ると、それと共に段々面の皮が厚くなつて來て、人に向つて何んな厚顏しいことでもしなければ立行かぬやうなことが出來して來る。人間が斯うなつて來た日には最うお了ひである。出來る出世も出來なくなる、第一人が此方を相手にしなくなつて來る。

何でも人は手の皮を厚くする工夫が肝要である。毎日おのれの手の皮を厚くして眞面目に働いてさへ居らうならば、斷じて面の皮の厚くなる憂ひはない。面の皮の厚くない人であれば、

人は斷じて人に棄てられるものではない。たとひ貧乏して居らうとも、人が人に棄てられさへせねば、神にも佛にも亦棄てられては居らぬ人である。人が人に棄てられず、同時に神佛にも亦見棄てられて居らん者であれば、何時か何處でか誰かに救はれて必ず笑ふ時節が來るに違ひない。

本來我々人間は、空しく遊んで暮すのが目的で此の世に生れて來たのではなくて、自他共に働く爲に此の世に生れて來たのである。この約束に背いて手の皮を薄くし、毎日空しく遊んで居ると云ふことは、假令長者どの丶子息どのでも人間の約束に背いて居る。ましてや無資力無資産の身の分際でありながら、毎日のらりくらりとして手の皮を薄くし、面の皮は千枚張、大砲の彈丸でも見事彈き返して見せるぞと云ふやうになつて、而もそれを自慢のやうに思つて居ると、おツつけ頭髪を短かく剪られて、カーキー色のお仕着を着なければならぬやうに成つて來るのは極つて居る。

今日世間に好くある奴だが、別にこれと云ふ能力もない癖に手の皮を薄くして世を渡る工夫ばかりして、手の皮の厚いのは卑しい「彼は勞働者だ」などゝ誤解して居ると、それこそ飛んだ感違である。

そんな人間と見たならば、決して近附かぬことである。おなじく人を使ふにも斯んな人間を使つて油斷して居ると、屹度手を燒いて「オ、アツ〳〵」と言はねばならぬ。また斯んな人間と仲好くすると、おツつけ酷い目に會はされるに極つて居る、「オイ何うだ、貴公の着てる其の濕暖さうな着物を脱いでおれに着せてくれぬか」位の事では始末が着かなくなる。斯んな人間は何處まで太々しいか底の知れぬものである。

若し夫れ正しい人間として世に立たうとも思ふならば、手の皮は厚かるべし、面の皮は薄かるべしである。この反對に出て、世を樂々と握拳丸一渡らうなどゝ思つて居ると、それこそ追ツつけ神さまのお力でも救ひ難い人間に我れからなつて了はなければならぬ。

（五二） 常に溜息を吐く女

物事を一々氣にして歎息することになると、朝から晩まで溜息を吐いて居なければならぬ。何處の家でも毎日黄金の茶釜の轉がり込んで來るやうなことばかりはない。人間には諦めが肝腎である。愚痴な者には何に就けても憂の絶えろ暇はない。

或る人の妻には常に歎息する癖がある。誠に好くない癖である。この女は朝飯を炊きながら

我れ知らず「ア、！」と深く溜息を吐く。福神が側に來て居つても逃げさうに思はれる。別に心を勞することのない場合にでも、この女の顏は何となく憂の色に曇つて見える。人に脈はれるのも無理はない。

夫と何か家事上の話をして居つても、我れ知らず幾度となく太息を吐く。不斷ならばまだ宜いが、何か夫に新しい思立ちのある場合に當つて溜息の聲を聞かされると、その弱い氣に擊れて夫の意氣は沮喪する。その氣に感じて夫の方でもつひ一緒に「ア、！」と溜息を吐くやうになる。夫婦揃つて溜息を吐くやうになつては、何をしても好い結果は得られない。

夫婦差向ひの場合はまだ宜いが、客が來て愉快に話をして居る場合にでも、この女は客の前で、「ア、！」と深く溜息を吐く。客は何となく不愉快に感ずるのでつひ此家に居る氣になれず話を好い加減に切上げて歸つて了ふ。斯う云ふことが二三度もあると、「彼の家は何となく陰氣な家だ！」と云ふ感じを有つて、自然と訪ねても來なくなる。人の家に人種が盡きるやうになつては最う駄目だ。その家は自然と衰微して行く時である。

或る時夫の親友の一人が思ひ切つて細君に忠告した。

「貴女人の前で何時も溜息を吐きなさるは好くない癖ですね。今後は斷じてお廢めなさい。そ

れちゃ家が繁昌しません。何故かといふと、溜息を吐くと弱い氣ばかりが集つて來て強い氣は去つて了ふ。だから有ゆる災害が集つて來るやうになる。これに反して強い氣を吐いて居れば自然に強い物が集つて來るやうになる。だから病氣もせねば損もせぬ。その他の災難にも自然に懸らなくなつて來る。家は繁昌せずには居らぬ。溜息はお廢しなさい。貴女が何時も主人公に弱い氣を吹つかけて居ると、大將何をしても思ふやうに行きませんよ。私が好いことを教へて上げやう。これから溜息の出かゝつた時は、その溜息をウンと呑み込んで、ドツ來い占めた！と一番元氣をお出しなさい。左樣すりや屹度運が開ける！」

主人は喜んで、

「君好く言つてくれた。斯んな溜息を吐く女はない。朝起るから夜寢るまで溜息を吐いて居るから乃公は全く遣り切れない。此奴と一緒に差向ひで飯を食ふやうになつてから、乃公は段々仕合が惡くなつたやうに思ふが君何うだ？」

「それは其の筈だ！」

二人の話を聞きながら、細君は又溜息を吐いた。夫は苦い顏をして、

「君これだよ！

客も笑つて匙を投げた。この女は何うしても此の癖が直らずに、今でも盛に溜息を吐いて居るが、益々以て仕合が好くないと云ふことである。

（五三）無暗矢鱈に笑ふ人

人間は面白い、何時も泣いて日を送つて居る人があるかと思ふと、一方には又何に就けても笑つてばかり居る人もある。

人の性癖は色々で、泣く癖のある人になると、嬉しい事があつても泣き、可笑しい事に出合つても泣き、何かに就けて泣いてばかり居るが、これとは反對に笑ふ癖のある人になると、泣くべき事があつても笑ひ、悲しい事に出會つても亦笑ひ毎日ハア〳〵笑つて居る。笑ひ上戸と云ふのはこれで、斯う云ふ人には何でも可笑しいものだと見える。泣く人よりは此方の方が景氣は好いが、餘りに下らん事に笑ふので、斯う云う人は相手に依つては、何となく其の人を厭ふやうな傾きもある。

何でも極端な事をするのは狂人めいて面白くない。いかに人は笑ふが好いからと云つて、人の泣くべき所にまで笑つては、人間の調子を外れて、何だか工合が妙になる。それは丁度何事